

京都府久御山町

林寺跡第2次発掘調査報告書

財團法人 古代學協會

京 都

平成16年



第2次・第3次調査区全景（上が南）



方形周溝墓1出土弥生土器



鳥煙跡 S X 1000断面（北西より）



土器埋納遺構 S X 462検出状況（上が西）

序

財團法人古代學協會・古代學研究所では『平安京及びその近郊の古代学的研究』を研究テーマの柱の一つとして、長年調査研究を行ってきた。その研究の一環として、この度、京都府久世郡久御山町の林寺跡を発掘調査する機会に恵まれ、報告書を刊行するに到ったことは誠に欣快に堪えない。

林寺跡では從来より様々に論じられてきた古代寺院であるが、これまで発掘調査がなされたことはなかった。財團法人古代學協會・古代學研究所が行った2年前の試掘調査と今回の発掘調査を通してその実態の解明が期待された。今回はその初の本格的発掘調査の成果報告である。

残念ながら寺院に関連する遺構は検出されなかつたが、飛鳥時代の多量の遺物と継続的に搬入される瓦はこの地に何か特別な施設があつたことを予想させるものであった。また、弥生時代後期の方形周溝墓が見つかったが、これは発掘前には予期していなかつたものである。この発見は当該地域の「クニ」の誕生について重要な資料を資するものとなつた。また、平安時代後期の土師器皿を埋納した遺構が見つかったことは、この地域に平安時代後期以降集落が展開することを明らかにしたものとして評価されよう。

巨椋池南畔の地域は「栗限」の地として『日本書紀』に登場する。古代には大溝が掘られ、広大な田地が拓かれた。この地を流れる名木川の美しい風景は和歌にも詠まれ『万葉集』卷九に收められている。平安時代には宮中に日常の食物を調進する園池がいくつか置かれていた。現在においても整然と区画された水田地として条里景観がよく残っている地域である。このような古代の田園地帯ともいえるこの地域において形成された遺跡であることを考へるとき、平安京近郊を研究するにふさわしい遺跡であり、今回の発掘調査の成果はその期待にたがわないものと思われる。

今回の発掘調査では日産車体株式会社、株式会社フジタを始め、京都府教育委員会、久御山町教育委員会等、関係者各位の御理解と御協力を賜るところ甚大であった。ここにその芳情を銘記し、謹んで篤く御礼の辞を申し上げる次第である。

平成16年9月

財團法人古代學協會理事長
古代學研究所所長兼教授
角田 文衛

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 調査の経過	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査経過	4
第3章 層序と遺構	6
第1節 層序	6
第2節 遺構の概要	6
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構	9
第4節 古墳時代後期から奈良時代の遺構	16
第5節 平安時代から鎌倉時代の遺構	22
第4章 出土遺物	31
第1節 弥生土器・古式土師器	31
第2節 古墳時代後期から飛鳥時代の土器類	32
第3節 平安時代から鎌倉時代の土器類	35
第4節 瓦	36
第5節 土製品	38
第6節 石製品	38
第7節 銅鏡	38
第8節 動物遺体	39
第5章 考 察	40
第1節 林寺跡周辺の微地形	40
第2節 林寺跡周辺の条里地割	41
第3節 林寺跡における遺構と遺物の変遷	43
第6章 まとめ	46
英文要旨	48

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置 1	1
第2図 遺跡の位置 2 (1/25000)	2
第3図 調査区配置図 (1/2500)	3
第4図 グリッド配置図 (1/1000)	5
第5図 断面図の位置	6
第6図 調査区断面図 1 (1/250)	7
第7図 調査区断面図 2 (1/250)	8
第8図 方形周溝墓 1 平面図・断面図 (1/150)	9
第9図 溝 S D275平面図・断面図 (1/40)	10
第10図 溝 S D341平面図・断面図 (1/40)	11
第11図 溝 S D50遺物出土状況平面図 (1/40)	12
第12図 溝 S D200・溝 S D201断面図 (1/30)	12
第13図 溝 S D264平面図 1 (1/60)	14
第14図 溝 S D264平面図 2・断面図 (1/60)	15
第15図 溝 S D535断面図 (1/30)	16
第16図 溝 S D631平面図・断面図 (1/60)	16
第17図 穫穴住居跡 S H465平面図 1 (遺物出土状況) (1/40)	17
第18図 穫穴住居跡 S H465・土坑 S K629平面図・断面図 (1/40)	18
第19図 土坑 S K626平面図・断面図 (1/60)	19
第20図 土坑 S K628平面図・断面図 (1/60)	19
第21図 溝 S D 4・溝 S D 5・溝 S D 7断面図 (1/60)	20
第22図 溝 S D231平面図・断面図 (1/60)	20
第23図 溝 S D232・溝 S D540平面図・断面図 (1/60)	21
第24図 溝 S D252平面図・断面図 (1/40)	22
第25図 建物跡 S B 1・欄列 S A 2・P484平面図・断面図 (1/100) 及び井戸 S E546・井戸 S E627平面図・断面図 (1/60)	23
第26図 井戸 S E10平面図・見通図 (1/60)	24
第27図 土器埋納遺構 S X462平面図・見通図 (1/10)	26
第28図 溝 S D 1断面図 (1/30)	26
第29図 溝 S D181・溝 S D186平面図・断面図 (1/60)	27
第30図 溝 S D250・溝 S D251平面図・断面図 (1/60)	28
第31図 烟突跡 S X1000出土土器類・遺構外出土綠釉陶器実測図 (1/3)	35
第32図 林寺跡周辺の土地利用と微地形	40
第33図 林寺跡周辺（桑本里）の条里地割と坪並の復元	42

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 上 第2次・第3次調査区全景（上が南）
 下 方形周溝墓1出土弥生土器
- 巻頭図版 2 上 島畠跡S X1000断面（北西より）
 下 土器埋納遺構S X462検出状況（上が西）
- 図版 1 第2次・第3次調査区全体図（1/1000）
- 図版 2 北トレンチ溝平面図（1/150）
- 図版 3 溝S D200・溝S D201平面図（1/60）
- 図版 4 道路遺構S F 1・溝S D68・溝S D69・溝S D538平面図（1/200）
- 図版 5 溝S D68・溝S D69・溝S D70・溝S D535・溝S D538平面図（1/200）
- 図版 6 溝S D535・溝S D538・溝S D68・溝S D69・溝S D70断面図（1/30）
- 図版 7 溝S D535・溝S D539・溝S D70平面図（1/200）
- 図版 8 溝S D244・溝S D261・溝S D266・溝S D50平面図・断面図（1/60）
- 図版 9 島畠跡S X1000平面図・断面図（1/150）
- 図版10 弥生土器・古式土師器実測図1（1/3）
- 図版11 弥生土器・古式土師器実測図2（1/3）
- 図版12 弥生土器・古式土師器実測図3（1/3）
- 図版13 壴穴住居跡S H465出土土器類実測図1（1/3）
- 図版14 壴穴住居跡S H465出土土器類実測図2（1/3）
- 図版15 壴穴住居跡S H465出土土器類実測図3（1/3）
- 図版16 壴穴住居跡S H465出土土器類実測図4（1/3）
- 図版17 土坑S K628出土土器類実測図1（1/3）
- 図版18 土坑S K628出土土器類実測図2（1/3）
- 図版19 土坑S K628出土土器類実測図3・土坑S K626出土土器類実測図（1/3）
- 図版20 溝S D 5・溝S D 7出土土器類実測図（1/3）
- 図版21 溝S D231・溝S D232出土土器類実測図（1/3）
- 図版22 溝S D251・溝S D252出土土器類実測図（1/3）
- 図版23 溝S D541・溝S D275出土土器類・その他の遺構出土須恵器実測図（1/3）
- 図版24 溝S D 1・溝S D68・溝S D538・井戸S E10・井戸S E546・土器埋納遺構S X462出土土器類実測図（1/3）
- 図版25 格子目タタキ成形の瓦実測図（1/4）
- 図版26 複目タタキ成形の瓦実測図（1/4）
- 図版27 その他調整による布目瓦実測図（1/4）
- 図版28 土製品・石製品実測図（1/3）
- 図版29 上 交差点全景（上が南）
 下 方形周溝墓1・島畠跡S X1000（上が南）
- 図版30 上 溝S D200・溝S D201（上が東）
 下 溝S D264完掘状況（南より）
- 図版31 上 溝S D341土器出土状況（東より）
 下 溝S D341完掘状況（北より）

- 図版32 上 溝S D275・溝S D341土器出土状況（南東より）
 下 溝S D275土器出土状況（南西より）
- 図版33 上 溝S D69・溝S D70断面（南より）
 下 壁穴住居跡S H465遺物出土状況（北より）
- 図版34 上 壁穴住居跡S H465・土坑S K629完掘状況（北東より）
 下 壁穴住居跡S H465・土坑S K629・土坑S K626完掘状況（東より）
- 図版35 上 溝S D4・溝S D5完掘状況（北より）
 下 溝S D231完掘状況（北より）
- 図版36 上 溝S D252遺物出土状況（東より）
 下 溝S D252遺物出土状況（北より）
- 図版37 上 溝S D1完掘状況（北より）
 下 井戸S E10完掘状況（西より）
- 図版38 上 近世小溝群と道路造構（南より）
 下 道路造構S F1・溝S D68・溝S D538完掘状況（北より）
- 図版39 上 溝S D68断面（南より）
 下 溝S D538・溝S D535断面（南より）
- 図版40 上 建物跡S B1検出状況（北東より）
 下 島烟跡S X1000第1面検出状況（北より）
- 図版41 上 島烟跡S X1000第2面検出状況（北西より）
 下 島烟跡S X1000完掘状況（北西より）
- 図版42 弥生土器・飛鳥時代の土器類
- 図版43 土坑S K628出土土器類
- 図版44 瓦1
- 図版45 瓦2・土製品・銅錢・動物遺体
- 図版46 上 壁穴住居跡S H465出土土器類
 下 土坑S K628出土土器類
- 図版47 上 土器埋納造構S X462出土土師皿
 下 石製品

付 表 目 次

第1表 弥生土器・古式土器類観察表	49
第2表 古墳時代後期～奈良時代土器類観察表	52
第3表 平安～鎌倉時代土器類観察表	63
第4表 瓦観察表	66
第5表 土製品観察表	69
第6表 石製品観察表	69

例　　言

1. 本書は京都府久世郡久御山町大字林字高黒地内に所在する林寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日産車体京都工場の跡地売却に伴う再開発事業に伴い、平成15年3月24日から6月30日に財團法人古代學協會・古代學研究所が実施した。
3. 採図及び図版で使用した方位と座標軸は平面直角座標第VI系に基づくものである。ただし、単位(m)は省略している。標高はT.P.(東京湾平均海面高度)による。
4. 第2図には、京都府教育府指導部文化財保護課編『京都府遺跡地図』〔第3版〕(第3分冊)(京都、平成15年)を、第3図には、平成10年測量久御山町1/2500都市計画図を、第32図と第33図には、昭和40年測量1/3000久御山町全図を一部加筆の上使用した。
5. 本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(2000年度版)に準じた。
6. 遺構・遺物の実測には江谷 寛、桐山秀穂、繁松泰成、田中元浩、田村朋美、嶋根真須美、篠原風花が行った。
7. 図版の作成とトレースは桐山と田中が行った。
8. 写真的撮影は江谷と桐山が行った。
9. 出土遺物は久御山町教育委員会が、調査の記録は財團法人古代學協會・古代學研究所がそれぞれ保管する。
10. 本書の執筆は江谷(第6章)と桐山(第1~第3章、第4章第2節~第5章)、田中(第4章第1節)が行い、江谷が編集した。

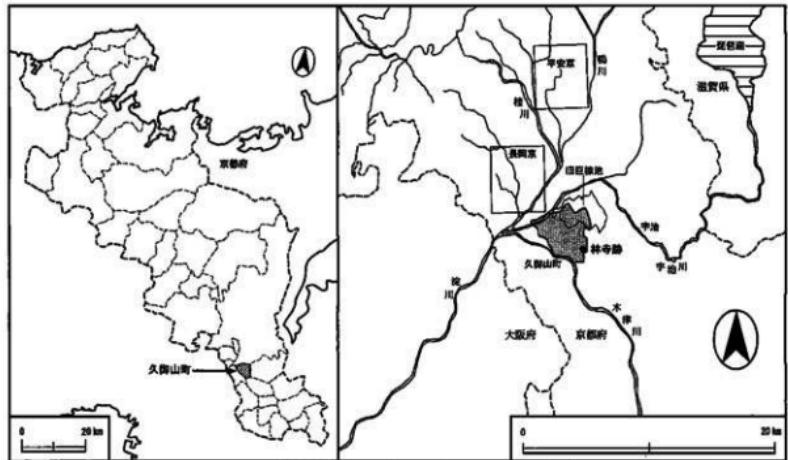
第1章 はじめに (第1~第3図参照)

林寺跡は京都府久世郡久御山町大字林字高黒地内に所在する(第1・第2図)。近鉄大久保駅より西へ1.2km、寺山地区の丘陵の緩やかな坂を下りきり、沖積平野に入ったところに位置する。旧日産車体京都工場の敷地の北西部にあたる(第3図)。

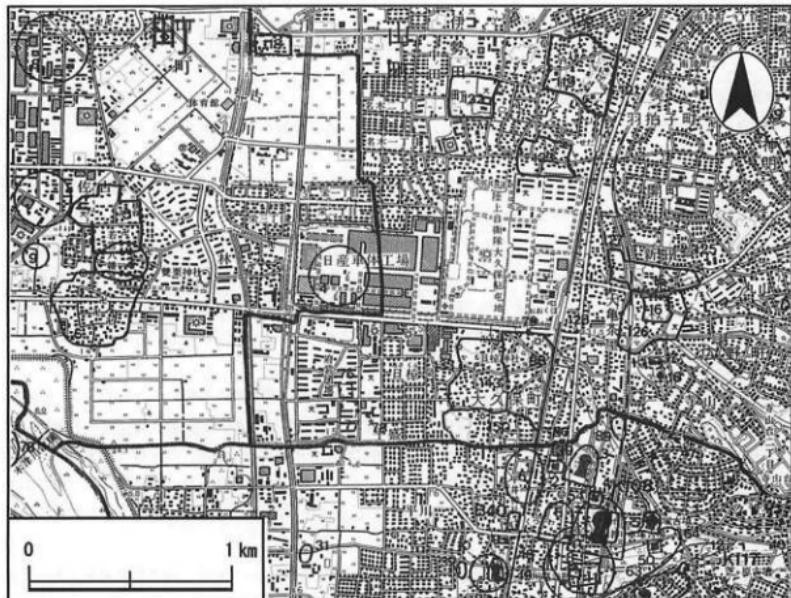
この沖積平野は京都盆地の中部、西を男山丘陵、東を宇治丘陵によって区画され、木津川下流に展開する。戰前までは木津町・山城町より北流した木津川が旧巨椋池に流れ込み沖積平野を発達させてきた。旧河道が網状に分布しており、各所に自然堤防を形成している。この平野にはそのため木津川や旧河道に伴う自然堤防が広範に分布している。しかし、この旧河道も木津川のものばかりではない。城陽市寺田から塚本にかけて扇状地末端から西向きの数条の旧河道が確認されている。林寺跡周辺でもまた同様に蛇行しつつ西流する旧河道の存在が指摘されている。この旧河道の形成する1つの自然堤防上に林寺跡が立地している。同じ旧河道に伴うとみられるいくつかの自然堤防には佐山・林などの集落も立地している。

林寺跡周辺の遺跡についてみてみれば、やはり自然堤防上に立地する。林寺跡の西側では、市田齊当坊遺跡(弥生時代中期、古墳時代前期)、佐山遺跡(弥生時代後期、弥生時代終末期～古墳時代後期)、佐山尼垣外遺跡(绳文時代晚期、弥生時代中期～後期)がある。このうち弥生時代中期の市田齊当坊遺跡、弥生時代終末期～古墳時代前期の佐山遺跡はこの時期、この地域の拠点集落である。また東側では小倉遺跡(弥生時代後期)、神楽田遺跡(弥生時代中期)、若林遺跡(古墳時代前期)、井尻遺跡(弥生時代～古墳時代)、旦椋遺跡(古墳時代)がある。

古墳は平野部において若林遺跡、市田齊当坊遺跡で6世紀の方墳が見つかっており、今後発掘調査が進めば新たに見つかってくる可能性が高い。この地域の首長墓は庵寺山古墳(前期)、金毘羅山古墳(中期)、坊主山古墳(後期)と宇治市域の丘陵部において展開する。また、古墳時代中期には林寺跡南方に久津川古墳群が造営される。畿内でも有数の大型前方後円墳である久津川車塚古墳をはじめとする古墳群で南山城全域を支配した首長の墓と考えられている。



第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡の位置 2 (1/25000)

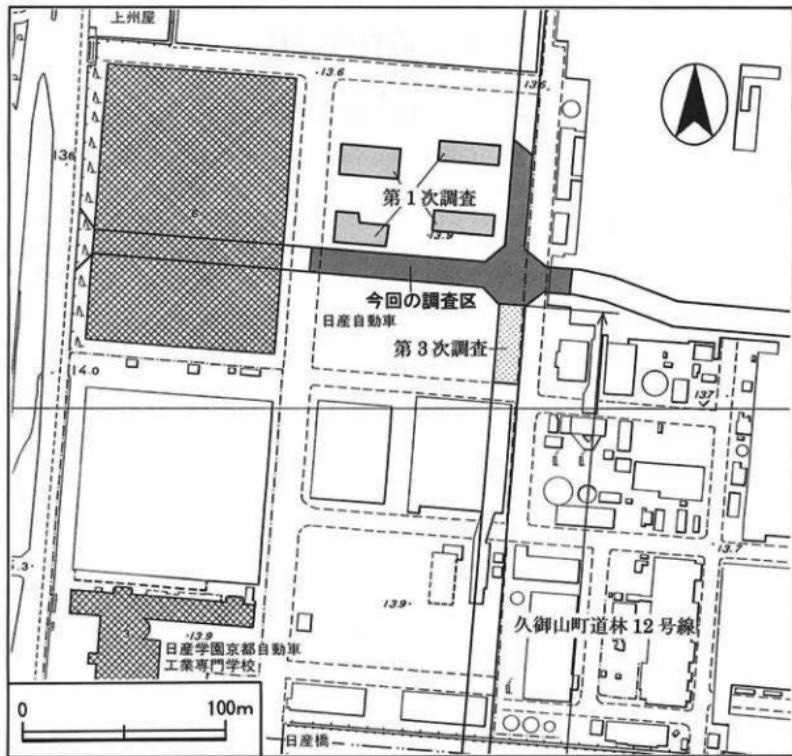
古代寺院についてもこの地域には多く、宇治市広野廃寺、城陽市久世廃寺・平川廃寺・正道廃寺がある。また、城陽市正道遺跡は屯倉ないし都衙に関わる遺跡と考えられている。

文献史料でこの地域は飛鳥時代に「栗隈」の名で飛鳥時代に初めて登場する。「日本書紀」によればこの地は5世紀ないし7世紀に「栗隈大溝」が開削されたとされる。「栗隈大溝」については諸説あるが、この地はこうした開発が相当進んだ地域であったことがうかがわれる。『和名類聚抄』では久世郡に所在する郷として竹潤、奈美、那羅、水主、那紀、宇治、久世、殖栗、栗隈、富野、拌志、羽栗の十二郷があげられている。大字の林、林寺跡の林はこの拌志の遺称である。『延喜内膳司式』には宮中に野菜などを貢進する園池として奈良園、奈美園が登場する。奈良園は那羅郷の地、現在の八幡市上奈良、下奈良一帯、奈美園は那紀郷、すなわち現在の宇治市伊勢田町付近と考えられている。こうした開発の歴史や園地の存在を考えたとき、巨椋池南畔の沖積平野は農業地帯として認識され、開発が進められてきたと考えができるよう。

林寺跡は奈良時代の寺院跡とされてきたが、平成13年に行われた第1次調査（試掘調査）の結果、繩文時代晚期、弥生時代中期、弥生時代終末期、古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期、室町時代、江戸時代の遺物が確認され、飛鳥時代以前の下層遺跡の存在が明らかとなつた。しかし、これらの時期はすべて遺物で確認されただけである。今回の調査ではこれらの時期の実態の解明が目的とされた。

参考文献

江谷 宽編『京都府久御山町林寺跡試掘調査報告書』（京都、平成14年）。



第3図 調査区配置図 (1/2500)



発掘前光景 (南東より)



発掘作業光景

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

京都府宇治市及び久世都久御山町にまたがる日産自動車社有地を含む日産車体京都工場の跡地売却に伴う再開発事業が平成15年（2003）に本格的に始まった。これは工場の敷地を事業所用地4ヶ所と住宅用地2ヶ所に分割し売却するものである。そのための基盤整備として道路建設が計画されたが、当該地の一部が埋蔵文化財保護地の範囲内であることから、京都府教育委員会の指導をもとに久御山町教育委員会と日産車体株式会社とが協議した結果、道路予定地について試掘調査し、その結果に基づいて発掘調査することになった。試掘調査は日産車体株式会社が財團法人古代學協会・古代學研究所に委託して同年2月に行った。その結果、飛鳥時代のものと見られる遺構が見つかった。

試掘調査の結果に基づく協議において、久御山町道12号線の道路部分は久御山町が、その他の部分は日産車体株式会社が発掘調査を行うことになった。本調査は試掘調査に引き続き財團法人古代學協会・古代學研究所が行い、日産車体株式会社主体の発掘調査は3月より、久御山町主体の発掘調査は5月より開始することになった。日産車体株式会社主体の調査について古代學研究所は、この再開発事業の工事施工者である株式会社フジタと3月に発掘調査の業務委託契約を締結し、3月24日に発掘調査を開始した。なお、日産車体株式会社主体の調査を第2次調査、久御山町主体の調査を第3次調査として調査と報告を行う。この報告書はその第2次調査の報告にあたる。

発掘の体制は以下の通りである。

調査主任：江谷 寛（財團法人古代學協会・古代學研究所教授）

調査員：堀内明博（財團法人古代學協会・古代學研究所助教授）

桐山秀徳（財團法人古代學協会・古代學研究所助手）

調査補助員：紫松泰成（同志社大学大学院博士課程）

田中元浩（立命館大学大学院修士課程1年）

田村朋美（京都大学文学部4年）

嶋根真須美（京都大学文学部4年）

笹原風花（京都大学文学部4年）

また、発掘調査の実施に伴う様々な作業について、下記の業者の協力をいただいた。

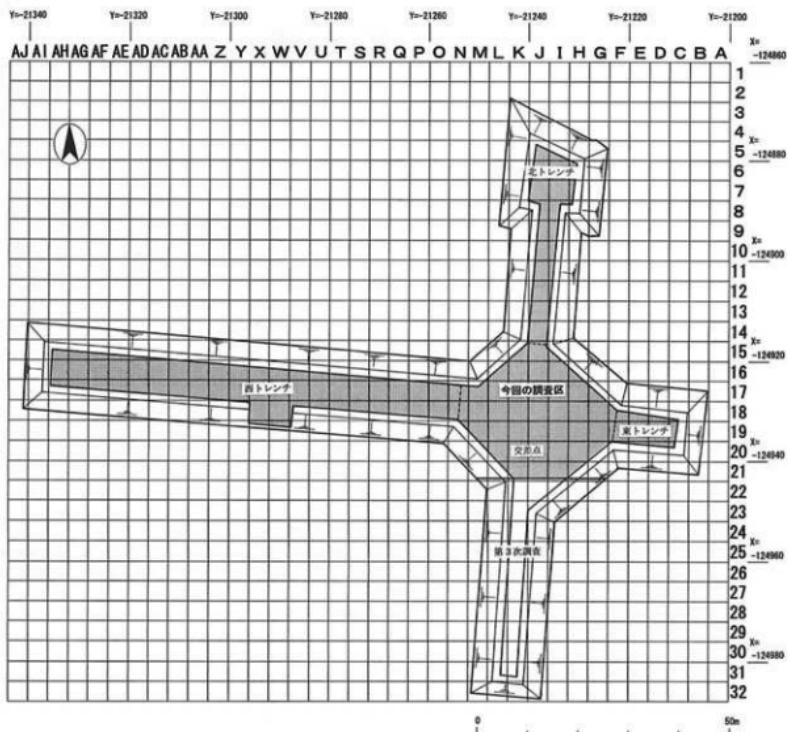
機械掘削：（有）千萬興業

作業員派遣：有限会社ティ・エス・ケイトレードサービス

測量基準点移設・航空測量：日間調査設計コンサルタント株式会社

第2節 調査経過（第4図参照）

発掘調査は平成15年3月24日に開始し6月30日に終了した。第2次調査と第3次調査は併行して行うため、これと共通の基準でグリッドを設定することにした。第2次調査と第3次調査の調査対象地区は、幅12.8m、長さ110mの南北道と幅13.1m、長さ125mの東西道とその交差点部分である。これに国土座標第VI系に基づく4m方眼の網を被せて北東隅を基点として、南北方向で1～32列、東西A～AJ列を設定した。そして各グリッド名は



第4図 グリッド配置図 (1/1000)

このアラビア数字とアルファベットを組み合わせて用いることとした（第4図）。

なお、調査区が長大で、上述のグリッド名では位置がわかりづらいため、これとは別に便宜的に第4図に示すような呼称も併用した。すなわち、交差点部分を「交差点」、交差点より北側を「北トレンチ」、東側を「東トレンチ」、西側を「西トレンチ」と仮称した。

また、遺構番号については、遺構の性格に関係なく通し番号を付与した。そしてこの番号に S D (溝), S K (土坑) 等の記号を冠することで遺構の性格を表した。なお、これも第2次調査と第3次調査で同一のオーダーで番号を付与したため、遺構番号548から608の遺構は第3次調査の報告で取り扱っている。

3月24日から4月17日まで機械掘削を行った。その後遺構検出と調査区の割り付け、1/100平面図の作成を行った。4月21日より遺構の掘り下げを開始した。遺構ごとに掘り下げの後、写真撮影と実測を行った。この作業は6月30日に終了した。調査区の全景写真と写真測量は6月26日に行った。そして調査区の断面実測は6月28日から30日に行なった。6月30日に撤収作業、7月1日には現場の引渡しを行なった。

第3章 層序と遺構

第1節 層序（第5～7図参照）

基本層序は以下の通りである。平成13年の第1次調査とは、当時I層とした盛土層がない点以外は基本的に変わらない。

I層：5YR4/4にぶい赤褐色砂泥（1～2cmの礫を含む。）、7.5YR4/3褐色砂泥（1～2cmの礫を含む。）、10YR6/4にぶい黄橙色砂泥（10cm、1cm程の礫を含む。）、10YR5/4にぶい黄褐色泥土が短いスパンで繰り返し積上げられている。あまり締まっていない。厚さ2.0m前後である。戦時中の京都飛行場建設に伴う盛土層である。重機により除去した。

II層：5Y4/2～4/3灰オリーブ色～暗オリーブ色砂泥層。戦前の耕作土層である。厚さ0.3～0.5mである。

III層：5Y4/1～4/2灰色～灰オリーブ色砂泥層。II層よりも色調が淡い。中近世の層と考えられる。これはさらに細分できるが、それらを2ないし3時期にまとめるこも可能である。

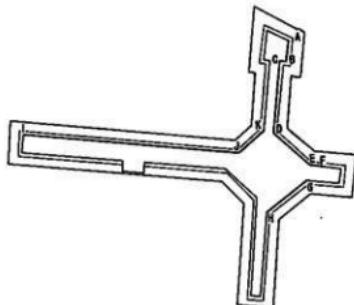
IV層：2.5Y4/1黄灰色泥土層。地山である。

次に断面の特徴について主要な点を指摘しておく。南北断面について交差点南東壁面で幅3m、高さ1.5mの盛土がみられる。戦前まで機能していた造構であり、重機により除去している。この造構は反対側である北東壁面には現れない造構であるが、上面に平坦な硬化面があり、道の造構と判断した。また、東西断面についても西トレレンチで随所に盛土が見られる。これは上部に耕作土が認められるので島畑の造構である。これらも基本的には戦前まで使用されていた島畑であり、重機掘削により除去しているが、1基のみ精査している（島畑跡S X1000）。

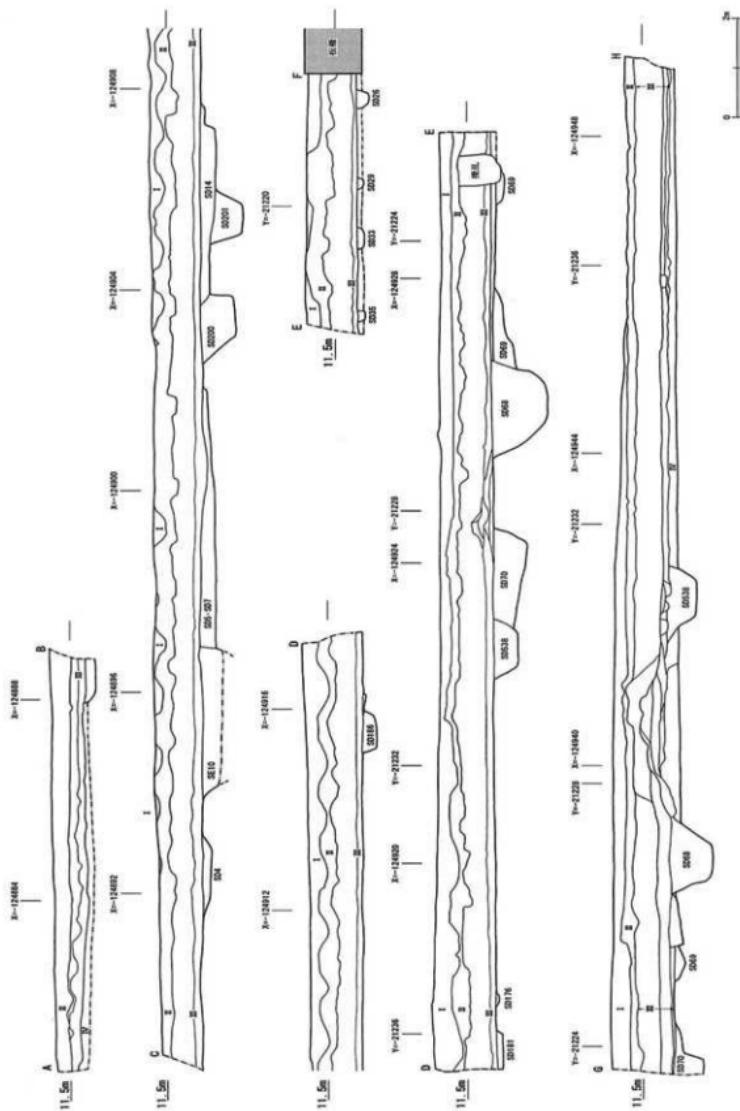
第2節 遺構の概要（図版1参照）

今回の調査ではIII層まで重機により掘削し、IV層上面にて造構検出を行った。造構数は第2次調査と第3次調査を合わせると632基である。主要な造構には方形周溝墓1基、建物跡1棟、竪穴住居跡1基、井戸3基、横列1本、溝、土坑、ピットがある。

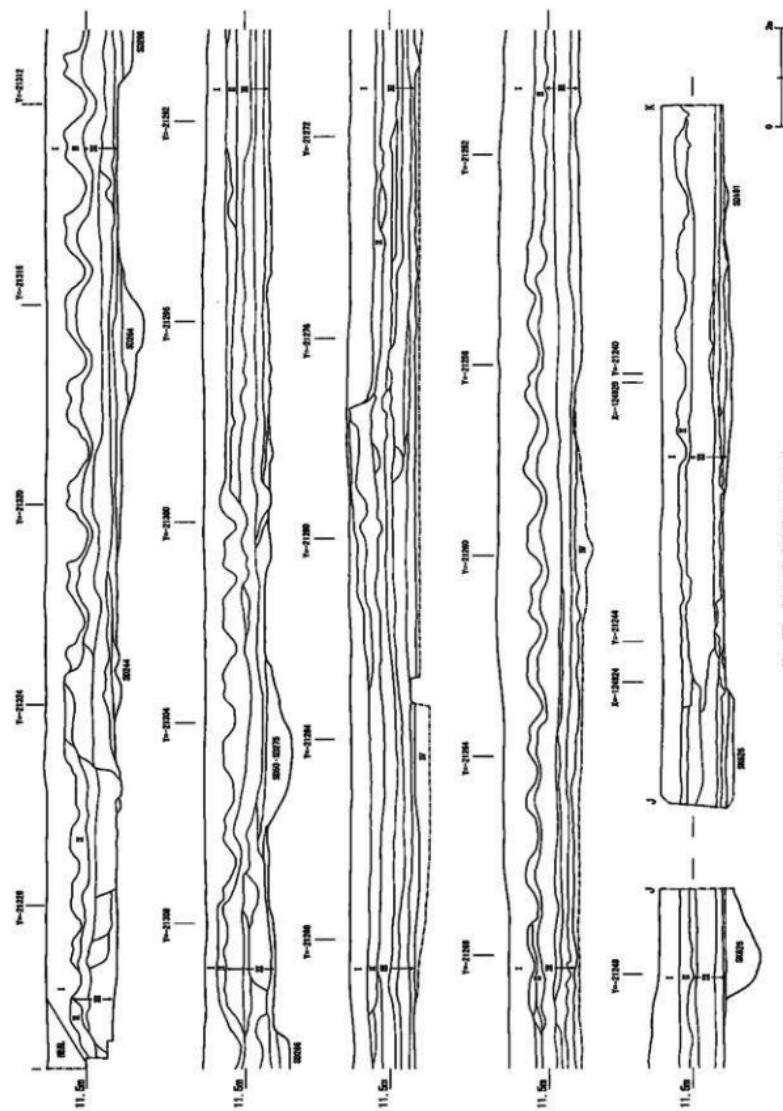
第2次調査における造構・遺物の時期は大きく3時期に分かれる。弥生時代後期、飛鳥時代、平安時代～鎌倉時代である。いずれの造構も検出レベルに差がなく、一面で検出した。また検出面であるIV層上面は島畑の存在した個所では標高11.0m前後であるが、それ以外では10.6～10.9mと低い。島畑のない地点では削平を受けて標高が低いが、島畑のある地点では削平を逃れており本来の地山の標高を示しているといえる。また、遺跡の堆積土について洪水による堆積土が見つからなかった。これは巨椋池南畔部の他の遺跡とは異なり、林寺跡の特徴ともいえる。字名の「高黒」が示すように、この地域では小高いところであったようである。こうした地形条件により、洪水による堆積がほ



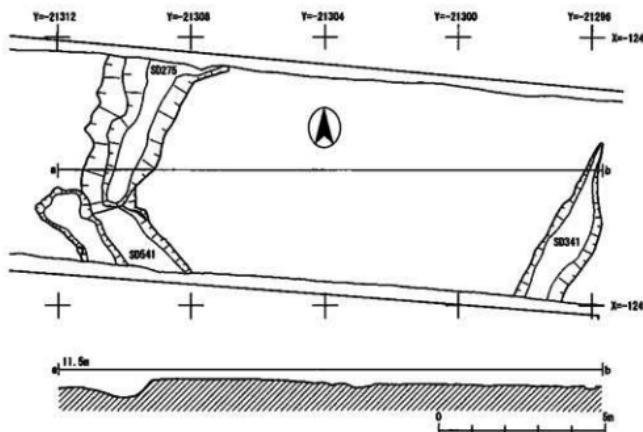
第5図 断面図の位置(図中のアルファベットは第6図・第7図のアルファベットと対応する)



第6図 河谷X断面図1 (1/250)



第7図 潟本区断面図2 (1/250)



第8図 方形周溝墓1平面図・断面図(1/150)

とんどなかつたことも考えられる。こうしたことをふまえれば当該遺跡の堆積状況について、土砂の堆積が少なかったこともあるが、中近世の島畑の造成による削平など土地改変により、古い時代の地層が削られて

既になくなっていると考えられる。したがって検出レベルによる時期比定は不可能であった。

ただし検出面についてこのような若干の起伏があるものの南に向かって徐々に標高が高くなっている。これは調査対象地区の自然地形を示しているとみられる。したがってこれら遺構の検出レベルも10.86~11.05mと幅がある。

第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構

1) 方形周溝墓1 (SD275・SD341・SD541) (第8~11図、図版29・31・32参照)

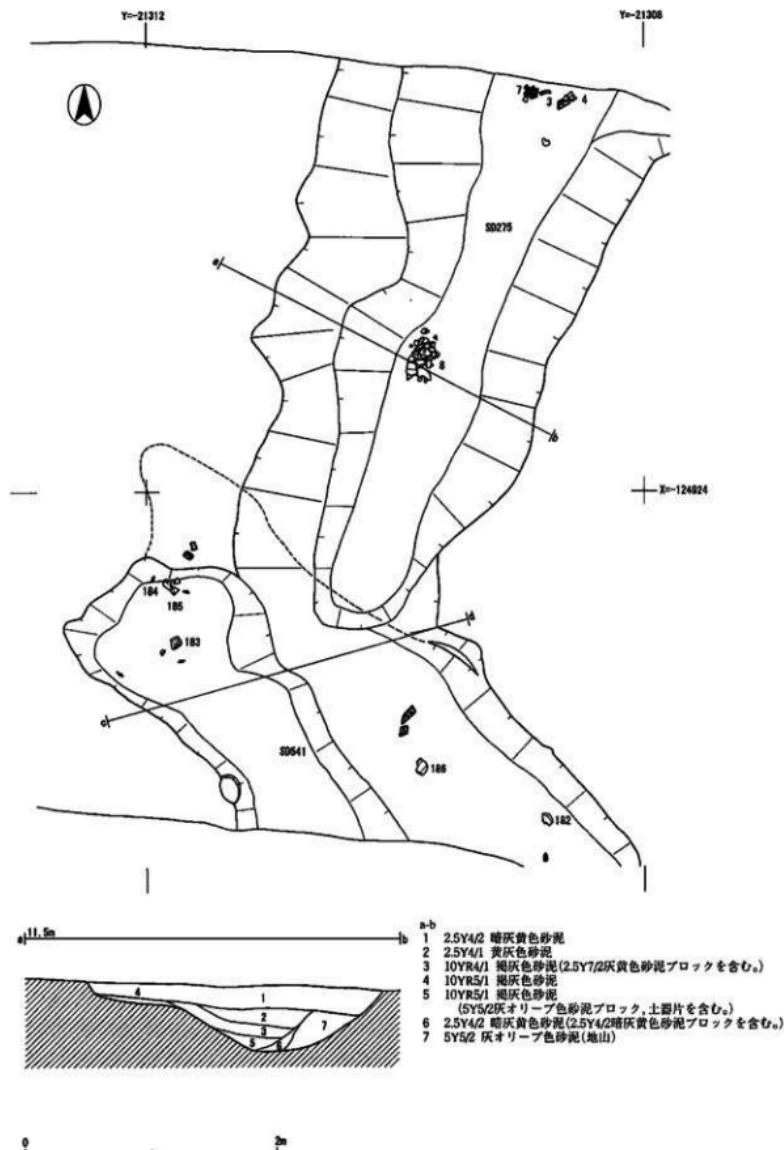
方形周溝墓1は西トレンチ中央部、X~A B16~17区に位置する。主体部は削平により既に消失している。周溝の一部が残存するのみで、北西辺のSD275と南西辺のSD341からなる。しかしこれらも1辺の溝の約1/2程度が残存した結果の溝である。

SD275はA B17に位置する北東~南西方向の溝である。A B18区北部より認められ、溝の底部は緩やかに低くなっている。そして調査区北壁で最深となり、北東方向に調査区外へ延びる。もともとは南西方向にも延びていたが、削平により消失したものであろう。1層と2層以下で時期と形態が異なるので、それぞれ別個の溝と考えられる。したがって上層と下層に分けて報告する。

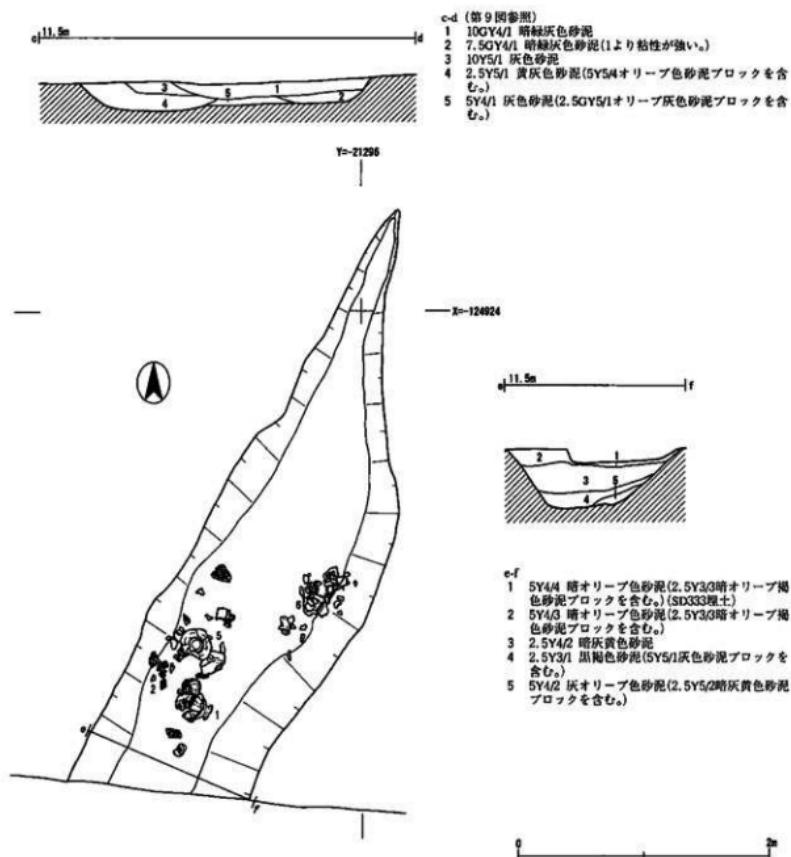
上層(1層)の溝は最大幅5.32m、深さ約20cmである。断面形は浅い皿状である。A B18区でSD541に切られる。出土遺物には須恵器、土師器がある。所属時期はSD541に先行するが、比較的近い時期、つまり飛鳥時代と考えられる。

下層の溝は残存する最大幅4.32m、深さは最深で37cm、断面形はV字状である。出土遺物には弥生土器の壺・鉢・手焙形土器などがある。このうち、手焙形土器は溝の底面直上で1個体がまとまって出土した。墓に供献されていた土器が転落したものを考えられる。ほかの土器もまとめて出土しているが、破片が少なく完形にはならない。埋土は4層に分かれる。遺構の時期は出土土器から弥生時代後期後半である。

SD341はX16・Y16・Y17区に位置する北東~南西方向の溝である。X16区南西隅より認められ、溝の底部は緩やかに低くなっている。そして調査区南壁で最深となり、南西方向に調査区外へ延びる。もともとは北東方向にもあったが、削平により消失したものであろう。残存する最大幅は3.1m、深さは最深40cmで、断面形は逆台



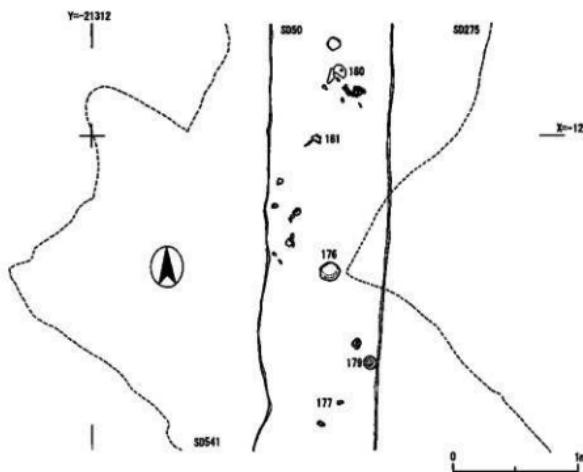
第9図 渋S D275平面図・断面図 (1/40)
(遺物に付した番号は本章の遺物番号に対応する。)



第10図 溝S D541断面図・溝S D341平面図・断面図 (1/40)
(遺物に付した番号は本書の遺物番号に対応する。)

形である。埋土は4層に分かれ。出土遺物には弥生土器の蓋が少なくとも3個体出土している。いずれもY17区から出土しているが、2個体は底面直上で溝の墓の内側の壁沿い、もう1個体は外側の壁沿いにあった。内側の2個体のうち、1個体は口縁を東側に向け横倒しの形で検出された。もう1個体は口縁を下にして逆さの形で見つかった。しかし、この底部は破損し、周辺に破片となっていた。外側の壁沿いの1個体は破片でまとまっていた。いずれも供獻されていたものが溝内に転落し、破損したものと考えられる。溝の時期は出土土器から弥生時代後期後半である。

なおS D275に直交して切るS D541は飛鳥時代の溝であるが、この遺構の性格を考える上で参考にすべき遺構でありここに報告する。S D541はA B17区に位置する北西—南東方向の溝である。A B17区西端より南東方向に延びる。調査区南壁まで確認できるが、溝はさらに外へと延びる。A B17区でのS D541の端部の状況は、肩部



第11図 溝S D50遺物出土状況平面図(1/40)
(遺物に付した番号は本章の遺物番号に対応する。)

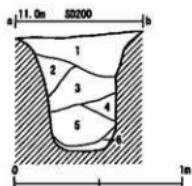
から底部への傾斜はかなり急に落ちていくので、ここが本来の溝の端部である可能性がある。残存する溝の最大幅5.0m、深さは最深で24cmである。埋土は5層に分かれるが、1層・2層で構成される溝と、3層・4層で構成される溝の最低2回の再掘削が認められる。これを見まえれば、S D541は幅約1.2~1.6m、深さ約24cmの断面浅い逆台形の溝が2本重なった結果と考えられる。出土遺物には土師器・須恵器がある。土師器には皿・壺などがあり、飛鳥ⅢからⅣ

期のものである。したがってこの遺構の時期は7世紀前半と考えられる。

また、S D50の出土遺物は、本来S D275上層あるいはS D541に含まれていた遺物の可能性が高い。それは、S D50とS D275・S D541と重なっている部分から出土しており、遺物の時期も一致するからである。

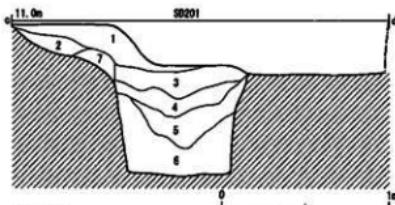
以上の溝について考えれば、弥生時代後期後半にS D275下層溝とS D341が掘削され、古墳時代後期にS D275の上層溝とS D541が掘削されたことになる。そしてS D275上層溝は下層溝とほぼ同じ位置に溝を掘削している。これは弥生時代後期のS D275下層溝が飛鳥時代にくぼみとして残っていて、それを利用する形で上層溝が掘削されたためと考えることができる。とすれば、S D541も同様に周溝のくぼみをそのまま溝として利用するために掘削した結果できた溝と考えることができよう。S D541では弥生時代の遺構としては残っていないが、それを示す可能性のある遺構と考えることもできる。

なお、S D275とS D341を同一の方形周溝墓の遺構と考えた根拠は以下の通りである。



溝S D200

- 1 SY3/1 オリーブ黒色砂泥(10Y3/2オリーブ黒色砂泥ブロックを含む。)
- 2 7.5Y4/1 灰色砂泥(SY5/3灰オリーブ色砂泥ブロックを含む。)
- 3 SY5/3 灰オリーブ色砂泥(SY6/3オリーブ色砂泥ブロックを含む。)
- 4 2.5Y4/1 黄褐色砂泥(SY5/2灰オリーブ色砂泥ブロックを含む。)
- 5 5Y4/1 灰色砂泥(SY5/1オリーブ色砂泥を層間として含む。)
- 6 10Y5/1 綠灰色砂泥



溝S D201

- 1 10Y3/2 オリーブ黒色砂泥
- 2 7.5Y4/1 灰色砂泥
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥(10B4/1時計灰色砂泥ブロックを含む。)
- 4 5B6/4/1 灰青灰色砂泥(ブロック状の土が堆積している。)
- 5 5Y5/3 灰オリーブ色砂泥(SB4/1暗青灰色砂泥ブロックを含む。)
- 6 5Y5/4 オリーブ色泥土(10B4/1暗青灰色砂泥ブロックを含む。)

第12図 溝S D200・溝S D201断面図(1/30)

- ① S D275とS D341は同時期の溝で、約10mの間隔で平行に位置している。この溝から推定される方形周溝墓の形態と規模は弥生時代後期の方形周溝墓としては妥当である。
- ② そして溝の肩はどちらも一方が非常に急な傾斜をしており、それはともに墓の内側と推定される側である。
- ③ S D541が周溝の一部を踏襲しているとすると、形態的に違和感がない。
- ④ S D341と対となる溝がS D275と反対の位置にあたるU・V17・18区に存在しない。

以上からS D275とS D341を同一の方形周溝墓が削平された痕跡の遺構と判断した。

2) 溝S D70 (図版5・6・7・33上参照)

S D70は交差点の東側、H・I16, G・H17, F・G18, F19区に位置する。交差点の北東壁から確かめられ、わずかに蛇行するが直線的に伸び、交差点と東トレンチの境界あたりの南壁に達する。S D70はさらに調査区外に延びている。方向は北よりやや西に振り、ほぼN-20°-Wの方向である。幅0.8~1.0m、深さは最深60cmである。断面形はU字状で、溝の壁は垂直に近く立ちあがる。底は所々狭い平坦面があり、北より南に向かって低くなる。埋土は7層に分かれるが、48層・49層の溝と50層・51層の溝の、最低2回の再掘削が認められる。48層から51層の状況は流水の痕跡を示している。52層・53層には砂泥ブロックを含み人為的に埋められたと考えられる。この点は溝の断面形とともに後述するS D200とS D201と共通する。S D70はこれら2本の溝と交差点の北側で連続する可能性を指摘できるが、S D70のどの段階とこれらの溝が対応するのか、具体的な点は現段階ではわからない。出土遺物には庄内壺の颈部が1点出土しているほか、弥生土器が小破片で出土しているが、時期を決定できる程遺存していない。S D200・S D201と関連する可能性が高いことから弥生時代後期から終末期の遺構と考えられる。

3) 溝S D200 (第12図、図版3・30上参照)

S D200は北トレンチの中央部、J 9~11区で確認された。わずかに蛇行するがほぼ直線に近い溝で、その方向は北よりやや西に振りっている。ほぼN-17°-Wの方向である。確認されたのはこの溝の一部であり、さらに南北に延びている。埋土は6層に分けられるが、1層と2層以下とで2本の溝に分けられる。

上層(1層)の溝は幅0.6~0.8m、深さ20cmで、断面形は浅い皿状ないし逆台形である。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。北はJ 9区でS D13を切り、調査区外へと延びるが、南はJ 11でS D14に切られている。この遺構の時期はS D14との切り合いから飛鳥時代以前である。

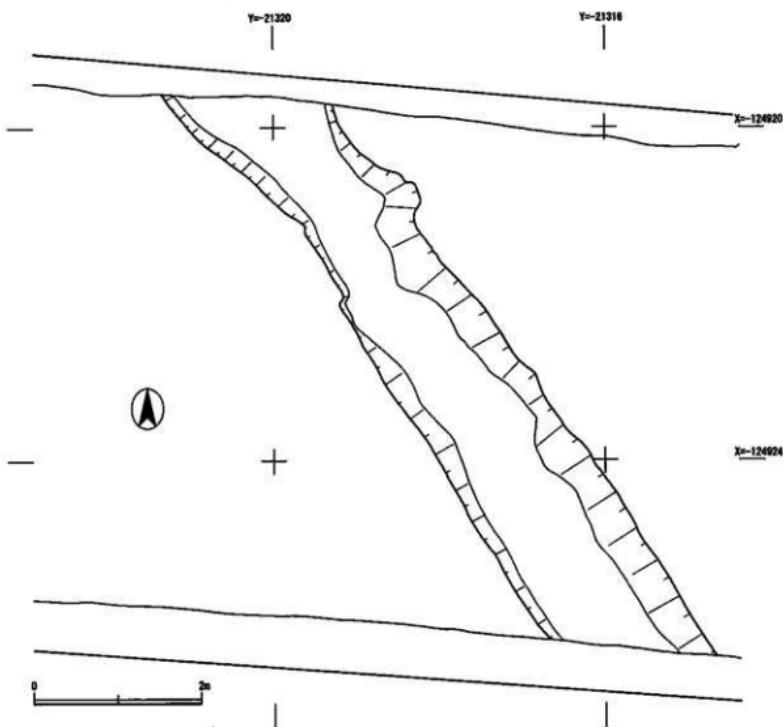
下層の溝は2層から6層で構成される。2層から4層は砂泥ブロックを含み人為的に埋められたと考えられる。5層は植物遺体を含み自然埋没の結果形成されたものである。機能時の堆積層と考えられる。幅0.6m、深さ58cm。断面はU字状で、壁は垂直に近く立ちあがる。これはS D70とS D201に共通である。この溝はJ 9~11区で確認されているが、一部であり、さらに南北に延びる。出土遺物には弥生土器の壺・高杯などがある。弥生時代後期後半から終末期の遺構と考えられる。

4) 溝S D201 (第12図、図版3・30上参照)

S D201は北トレンチの中央部、J 10~12区で確認された。わずかに湾曲する溝で、その方向は北よりやや西に振りっている。ほぼN-30°-Wの方向である。確認されたのはこの溝の一部であり、さらに南北に延びている。埋土は6層に分けられるが、この溝も1層・2層と3層以下とで2本の溝に分けられる。

上層(1・2層)の溝は幅約1.8m、深さ20cmで、断面形は浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。J 11・J 12区でS D14に切られる。南北とも調査区外へと延びる。この遺構の時期はS D14との切り合いから飛鳥時代以前である。

下層の溝は3層から6層で構成される。3層は砂泥ブロックを含む層、4層はブロック状の砂泥で形成されている層で、この溝は人為的に埋められたと考えられる。5層・6層は機能時の堆積層と考えられる。幅0.4m、深さ62cm、断面はU字状で、壁は垂直に近く立ちあがる。これはS D70・S D200に共通である。この溝はJ 10~12区で確認されているが、一部であり、さらに南北に延びる。出土遺物は弥生土器の壺などの小破片で、時期決



第13図 溝 S D264平面図 1 (1/60)

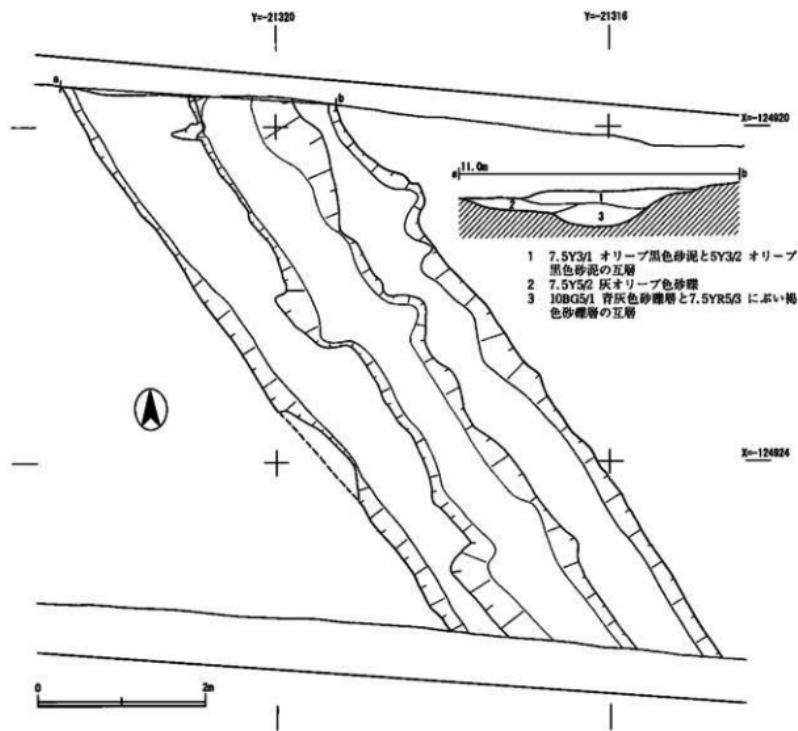
定できる遺物はない。遺構の形態、埋土の状況などからS D70やS D200と近接した時期が想定される。弥生時代後期後半から終末期の遺構と考えられる。

5) 溝 S D264 (第13図、図版30下参照)

S D264は西トレンチの中央部、AD～AE 16・17区に位置する。北西—南東方向のほぼ直線的な溝である。N-35°-Wの方向である。確認されたのはこの溝の一部であり、さらに南北に延びている。埋土は6層に分けられる。1層～3層と4層で2本の溝に分けられる。

上層（1層～3層）の溝は最大幅2.8m、深さ44cmで、断面形は浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。南北とも調査区外へと延びる。埋土は砂礫が堆積しており、この溝は流路であったことがわかる。出土遺物には庄内甕、小型丸底甕、須恵器の破片などがある。弥生時代終末期から古墳時代後期の遺構と考えられる。

下層（4層）の溝は残存する最大幅1.2m、深さ30cmで断面U字状の溝である。断面図には現れていないが、壁は垂直に近く立ちあがる。3層はブロックを含む青灰色砂泥層で、溝は人為的に埋められたと考えられる。これはS D70とS D200に共通である。弥生土器の小破片がわずかに出土するが、時期決定できる遺物はない。遺構の形態、埋土の状況、遺物の出土状況などがS D70やS D200、S D201と近似し、近い時期が想定できる。弥生時代後期後半から終末期の遺構と考えられる。



第14図 溝S D264平面図2・断面図(1/60)

6) 溝S D535(第15図、図版5・6・7参照)

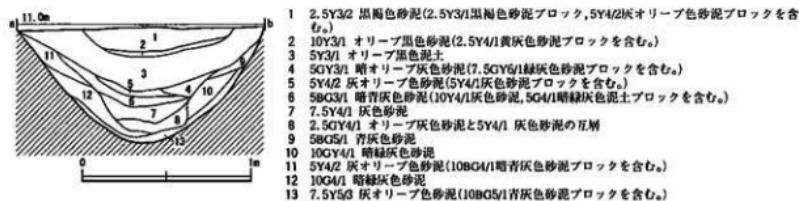
S D535は交差点中央のG17・18, H18・19, I19・20, J20, K20・21区に位置する北東—南西方向の直線的な溝である。N-33°-Eの方向である。G17・18区ではS D70と交わり、この地点がS D535の北東端である。しかし交点の大半がS D68によって切られており、前後関係あるいは同時性について具体的にはわからぬ。しかし、S D535の埋土の状況や遺物の時期がきわめて近似していることから同時期に存在した可能性が高いと考えられる。南西方向については調査区外に延びる。S D535の最大幅1.9m、深さは最深63cmで、北東に向かって低くなる。断面形はV字状で、壁の立ちあがりはかなり急である。

埋土は13層に分けられたが、最低3回の掘りなおしが認められる。6層・11層は砂泥ブロックを含み埋められた可能性が指摘できる。また、3層・10層・12層のように自然に埋没する過程を示す土層もあれば、8層のように水の流れた痕跡を示す土層もあり、再掘削後の状況は必ずしも一定ではない。

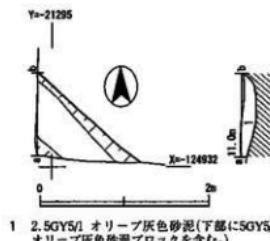
出土遺物には弥生土器の甕・壺・高杯などがある。弥生時代後期後半の遺構である。

7) 溝S D539(図版7参照)

S D539は交差点中央のI18・19, J19・20, K19・20に位置する北東—南西方向の直線的な溝である。主軸の方向はN-38°-Eである。最大幅55cm、深さは最深10cmで断面は浅い皿状である。北東端、南西端とも立ちあがりが緩く、不明確である。削平により溝の底に近い部分が残存したものと考えられる。弥生土器が数点出土



第15図 溝 S D535断面図 (1/30)



第16図 溝 S D631平面図・断面図 (1/60)

し、弥生時代の遺構と考えられる。

8) 溝 S D631 (第16図参照)

S D631は西トレンチ拡張部のX18区に位置する北西—南東方向の溝である。一部の確認に留まり、北西方向、南東方向とも調査区外にさらに延びる。幅は3.6m以上、深さ18cmで、断面形は浅い皿状である。方向はN-45° - Wである。出土遺物はない。溝の方向から弥生時代から古墳時代のいずれかの時期の遺構と考えられる。

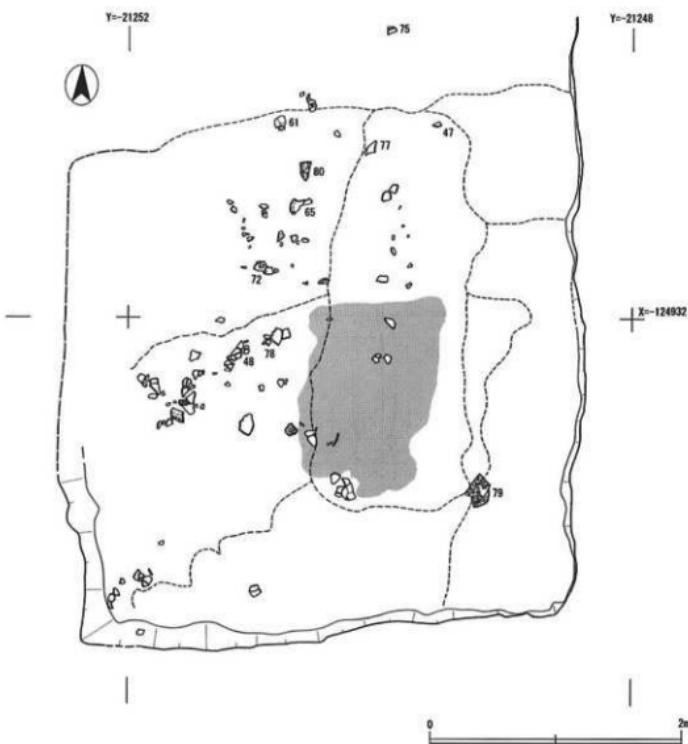
第4節 古墳時代後期から飛鳥時代の遺構

1) 壁穴住居跡 S H465・土坑 S K629 (第17・第18図、図版33下・34参照)

S H465・S K629は交差点西部のM17・18区に位置する。調査時において最初S H465を確認し掘り進めたが、調査の後半でこの壁穴住居跡を切る土坑が2基あることが判明した。それがS K629ともう1つの土坑である。後者は調査の進行上、遺構の平面形態が把握できず遺構として登録できなかった土坑がある。こうした事情からここではこれらの遺構をまとめて報告する。S H465は一辺5.9mの方形の壁穴住居跡である。確定的ではないが深さは20cmほどが残る。主軸の方向はほぼ正南北である。井戸と土坑に切られており、住居の半分以上が破壊され、炉跡、柱穴は見つかなかった。住居の施設としては周壁溝とベッド状遺構の一部が残存するのみであるが、これらを根拠に壁穴住居跡と判断した。周壁溝は東壁南半部には壁に沿って幅20cm、深さ10cmほどの溝として残存する。ベッド状遺構も住居の南東隅に、住居の底面よりも10cmほど高い高まりとして残る。しかし、具体的な平面形態については他遺構に切られてわからない。

断面図をみれば、切り合ひ関係を大きく3つに分けることができる。1・2層、3~5層、7~11層の3群である。1・2層は焼土の層である。この土層の底面からは焼けた面は検出されず、焼土を捨てた遺構と考えられる。出土遺物には土師器、須恵器があり飛鳥V期に併行する時期のものである。3~5層の遺構はおそらく土坑と考えられる。それは断面逆台形に掘りこんでいることと、平面では地山面で住居跡北半部に大きな落ち込みが見られることから想定できる。また、18ラインより北側では標高10.9m付近に遺物がかなりまとまって出土しており、その分布はこの土坑の範囲と考えることができよう。土師器・須恵器が出土した。これも飛鳥V期に併行する時期のものである。8~11層はS K629の埋土である。

S K629は地山の面では長さ4.8m、幅2.4mの平面長方形の土坑である。しかし、埋土が断面図でいう7~11層であるので、掘りこみ面での平面形は一回り大きくなる。18ラインより南側の遺物は標高11.0m前後に比較的まとまって出土しているが、この分布する範囲はS K629の上部の範囲を示していると考えることができよう。横断面ではV字状を呈する。遺物は8層と10・11層からまとめて出土した。土師器と須恵器があるが、時期は



第17図 暈穴住居跡 S H465平面図1 (遺物出土状況) (1/40)
(遺物に付した番号は本書の遺物番号に対応する。トーンは焼土の分布範囲を示す。)

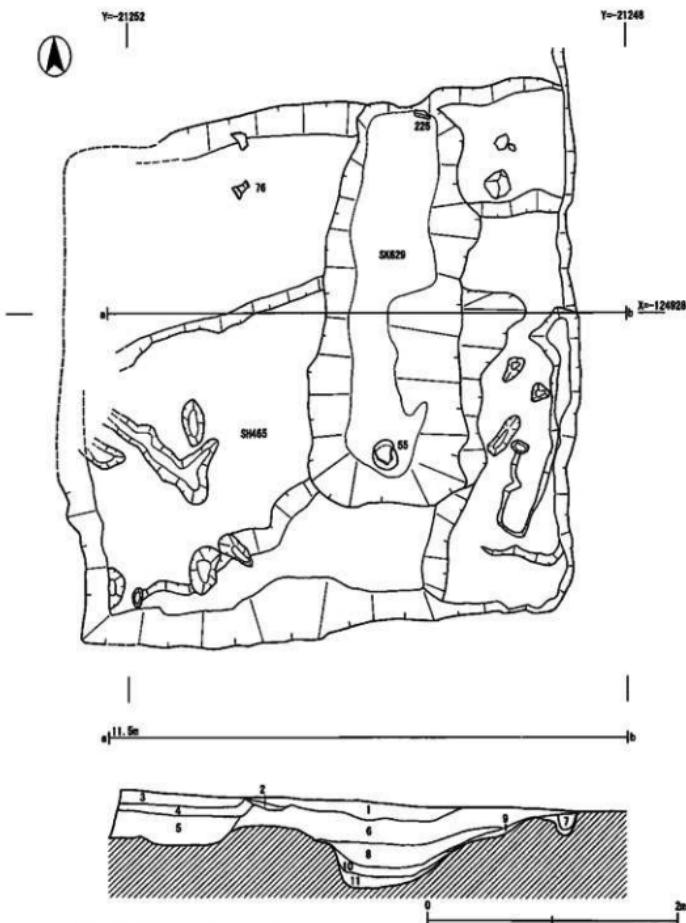
飛鳥ⅠないしⅡ期に併行すると考えられる。

2) 土坑 S K 626 (第19図、図版34下参照)

S K626はS H465・S K629の北側、交差点西北隅のM17区に位置する。南端部の一部を検出した。大部分は調査区外に広がるため、具体的な平面形態はわからない。検出した部分では東西4.1m、南北1.5m以上で、方形の一部のようにも見える。断面形は逆台形で、底面は平坦だが西に向かって低くなるようである。深さは最深で68cmである。深さがかなり深いことと周壁溝などの住居に付随する施設が見当たらないこと、埋土はブロック状の砂泥を含み埋め戻されている可能性があることから、暈穴住居跡ではなく廃棄にかかる土坑であろう。出土遺物には土師器と須恵器がある。時期は飛鳥V期に併行すると考えられる。

3) 土坑 S K 628 (第20図参照)

S K628は交差点西端のN・M17・18区に位置する。長さ3.6m、幅3.5mで、その端は、一辺が外側に湾曲する以外は直線的な方形である。断面形は逆台形であるが、壁はあまり急には立ちあがらない。深さは最深で67cmである。埋土は3層に分かれ、1層は焼土塊と炭化物を多く含む。しかし、遺構には焼土面は認められず、この焼土塊は廃棄されたものと考えられる。また3層ともブロック状の砂泥を多く含み、人為的に埋められたと考えることができる。遺物は土器類の破片を中心に1層と3層から多量に出土した。こうした状況から廃棄に関わる土坑



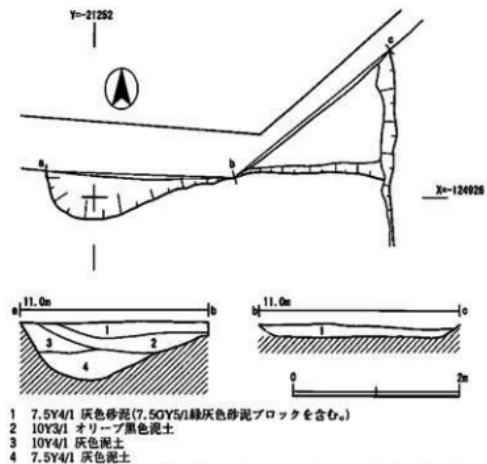
- | | |
|---|-----------------------------|
| 1 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥(焼土と炭化物を多量に含む。) | 5 5Y4/1 灰オリーブ色砂泥(有機物を含む。) |
| 2 7.5Y4/1 灰オリーブ色砂泥(7.5Y5/1灰オリーブ色砂泥ブロックを含む。) | 6 7.5Y4/1 灰オリーブ色泥土(有機物を含む。) |
| 3 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥(7.5Y4/3暗オリーブ色砂泥ブロックを含む。) | 7 7.5Y4/1 灰オリーブ色泥土。 |
| 4 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥(7.5Y4/1灰オリーブ色砂泥ブロックを含む。) | 8 7.5Y4/1 灰オリーブ色砂泥。 |
| | 9 2.5G4/1 暗オリーブ灰色砂泥 |
| | 10 7.5Y4/1 灰オリーブ色泥土 |
| | 11 2.5G4/1 暗オリーブ灰色砂泥 |

第18図 墓穴住居跡 S H465・土坑 S K629平面図・断面図 (1/40)
(遺物に付した番号は本書の遺物番号に対応する。)

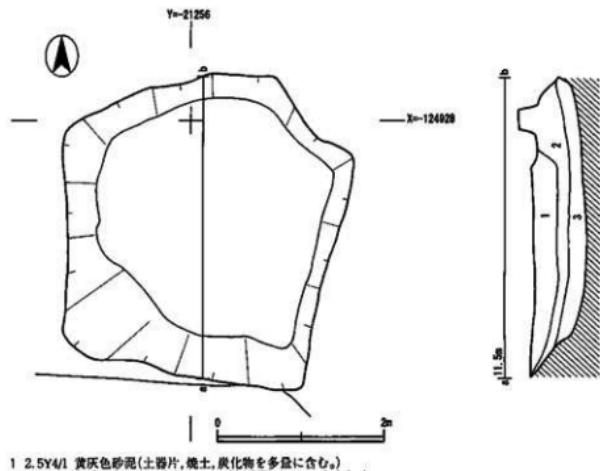
と考えられる。出土遺物には土師器・須恵器の他、瓦、砥石、粘板岩片がある。時期は飛鳥V期に併行すると考えられる。

4) 溝 S D 4 (第21図、図版2・35上参照)

S D 4 は北トレンチの北部、J 5~7, I 7~9区に位置する直線的な溝である。J 6区で途切れるが、これは



第19図 土坑S K626平面図・断面図(1/60)



第20図 土坑S K628平面図・断面図(1/60)

南北に延びる。方向は若干西に振れており、N-17°-Wである。最大幅2.2m、深さは最深部で30cm、断面形は浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物には土師器・須恵器があるが、量的に少ない。切り合いからSD4とSD7よりも古い時期のものである。飛鳥I期からII期に併行すると考えられる。

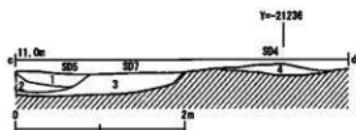
6) 溝SD7 (第21図、図版2参照)

SD5は北トレンチの北半、J6~10、I10~11区に位置する。やや蛇行するがおおむね直線的な溝である。SD5を切る。SD7で確認できたのは一部であり、調査区外にもさらに南北に延びる。方向は若干西に振れて

後世の削平によるものである。また、J5区ではSD5を切る。確認できたのは一部であり、調査区外にさらに南北に延びる。方向は若干西に振れており、N-17°-Wである。幅0.8m、深さは最深で23cm、断面形は浅い皿状である。溝の底は小さいくぼみなど凹凸が多く、平坦ではない。埋土はブロック状の砂泥を含み、流水の痕跡はない。出土遺物には土師器・須恵器の小破片のみで、量的にも非常に少ない。切り合いからSD5よりも新しい時期のものであるが、埋土の特徴や溝の方向からSD7と同時期の可能性が高いと考えられる。飛鳥I期からII期に併行すると考えられる。

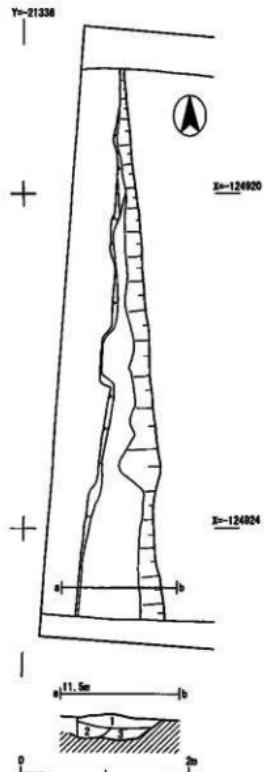
5) 溝SD5 (第21図、図版2、35上参照)

SD5は北トレンチの北半、J5~10、I8~11区に位置する。やや蛇行するがおおむね直線的な溝である。SD7に切られており、J5区ではSD4に切られる。確認できたSD5は一部であり、調査区外にもさらに南北に延びる。



1. 2.5GY3/1 帯オリーブ灰色砂泥(5Y4/3暗オリーブ灰色砂泥ブロックを含む)(溝SD5埋土)
2. 7.5Y4/1 灰色砂泥(溝SD5埋土)
3. 2.5Y4/2 暗黄色灰色砂泥(10GY3/1暗緑灰色砂泥ブロックを含む)(溝SD7埋土)
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂泥(5Y4/3暗オリーブ色砂泥ブロックを含む)(溝SD4埋土)

第21図 溝 S D 4・溝 S D 5・溝 S D 7 断面図 (1/60)



1. 2.5GY5/1 オリーブ灰色砂泥
2. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂泥
3. 5YS2/2 暗オリーブ色砂泥

第22図 溝 S D 231 平面図・断面図 (1/60)

おり、N-17°-Wである。幅1.2m、深さは最深部で13cm、断面形は浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物には土師器・須恵器があるが、量的に少ない。切り合からSD5よりも新しい時期のものである。飛鳥Ⅰ期からⅡ期に併行すると考えられる。

7) 溝 S D 14 (図版2参照)

S D 14は北トレンチの中央部、J 10~12区に位置する。やや蛇行する溝で、J 10区では北西-南東方向に走るが、J 10区とJ 11区の境界付近では正南北に向きを変える。確認できたS D 14は一部であり、調査区外では南北にさら

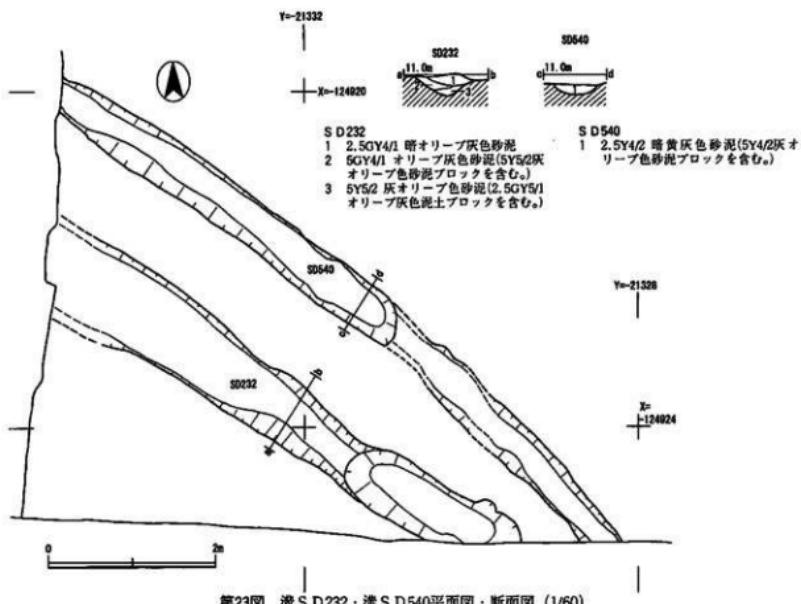
に延びる。S D 200とS D 201を切る。最大幅は1.4m、深さは最深で24cmで、断面形は浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は土師器・須恵器の小破片で時期を決定できるものはない。切り合からSD200・SD201よりも新しいものであるが、切り合の関係や埋土の特徴からSD4やSD7と同時期の可能性がある。飛鳥時代の溝である。

8) 溝 S D 69 (図版4・6参照)

S D 69は交差点の東部、H-I 16, G-H 17, F-G 18, F 19区にS D 70と重なるように位置する。交差点の北東壁からわずかに蛇行するが直線的に延び、交差点と東トレンチの境界あたりの南壁に達する。S D 69は調査区外にもさらに南北に続く。方向は北でやや西に振り、南部では正南北に近い方向をとる。ほぼN-10~30°-Wの方向である。最大幅3m、深さは最深60cmである。S D 69という名称を付しているが、断面をみてもわかるように実際は複数の溝の集合体である。いずれも幅1mほど、深さ60cm前後。断面形は浅い皿状で壁は緩く立ちあがる。底面は北より南に向かって低くなる。これらの溝のうち1本はS D 70とセットとしてみれば、SD200とSD201と共通する。S D 69もS D 70と同じくこれら2本の溝と交差点の北側で連続する可能性を指摘できるが、北トレンチ北部の溝で方向や埋土の状況が近似するものは、この2本の溝以外にも、SD5, SD7, SD14もあり、これらもS D 69と連続する可能性がある。S D 69のどの段階とこれらの溝が対応するのか、具体的な点は現段階ではわからない。出土遺物はほとんどなく時期が決定できるほどではない。SD5, SD7, SD14やS D 200・S D 201上層溝と関連する可能性が高いことから、飛鳥時代の遺構と考えられる。

9) 溝 S D 231 (第22図、図版35下参照)

S D 231は西トレンチの西端、A H 15~17に位置する直線的な溝である。南北方向でわずかに西に振る溝である。N-4°-Wの方向である。確認できたのは溝の東半分の一部であり、溝の西側の肩および南北端は調査区外である。確認できた最大幅は1.06m、深さは30cmで、断面形は皿状と推測される。埋土は3層に分けられ、再掘削が最低2回行われたことがわかる。しかし流水などの痕跡は認められなかった。出土遺物には土師器・須恵器、製塙土器、坩堝の破片がある。飛鳥V期すなわち平城I期からII期



に併行すると考えられる。

10) 溝SD 232 (第23図参照)

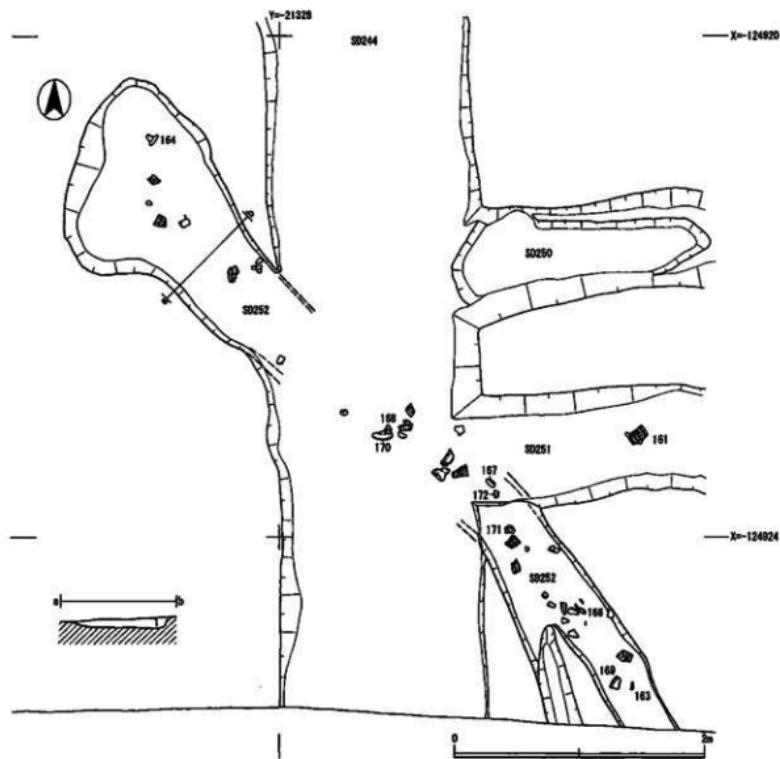
SD 232は西トレンチの西部、A G～AH16～17区に位置するほぼ直線的な溝である。北西～南東方向の溝で、W-30°～Nの方向である。これはSD 540とはほぼ平行である。AH16区ではSD 231に切られ、西にさらに延びるかどうかは不明である。AG17区ではSD 234・SD 235・SD 236・SD 237・SD 238に切られるが、調査区外にさらに南に延びる。残存する最大幅は1.08m、深さは最深で28cm、断面形はV字状である。南西に向かって底面は低くなる。埋土は3層に分かれ、その状況から自然埋没したとみられる。出土遺物には土師器、須恵器がある。飛鳥時代の溝である。

11) 溝SD 252 (第24図、図版36参照)

SD 252は西トレンチの西部、AF16・17、AG16区に位置する直線的な溝である。北西～南東方向の溝で、N-40°～Wの方向である。AG16区中央付近で北西端が確認された。同じAG16区でSD 244に切られる。東についてはAF17区で調査区外にさらに南東へ延びる。最大幅2.1mで、断面形は浅いV字状である。深さは最深で10cmほどである。埋土は1層で、その状況から自然埋没したとみられる。出土遺物には土師器、須恵器がある。飛鳥Ⅳ期に併行すると考えられる。

12) 溝SD 540 (第23図参照)

SD 540は西トレンチの西部、AG～AH16～17区に位置するほぼ直線的な溝である。北西～南東方向の溝で、W-30°～Nの方向である。これはSD 232とはほぼ平行である。AH16区ではSD 231に切られるがさらに調査区外に西へ延びる。AG17区ではSD 234・SD 235・SD 236・SD 237・SD 238に切られるが、さらに調査区外に南へ続く。残存する最大幅は0.58m、深さは最深で20cm、断面形は逆台形で、壁はやや急に立ち上がる。南西に向かって底面は低くなる。埋土は1層であるがその状況から自然埋没したとみられる。出土遺物は弥生土



1 5Y4/3 暗オリーブ灰色砂泥(5Y4/4暗オリーブ灰色砂泥ブロックを含む。)

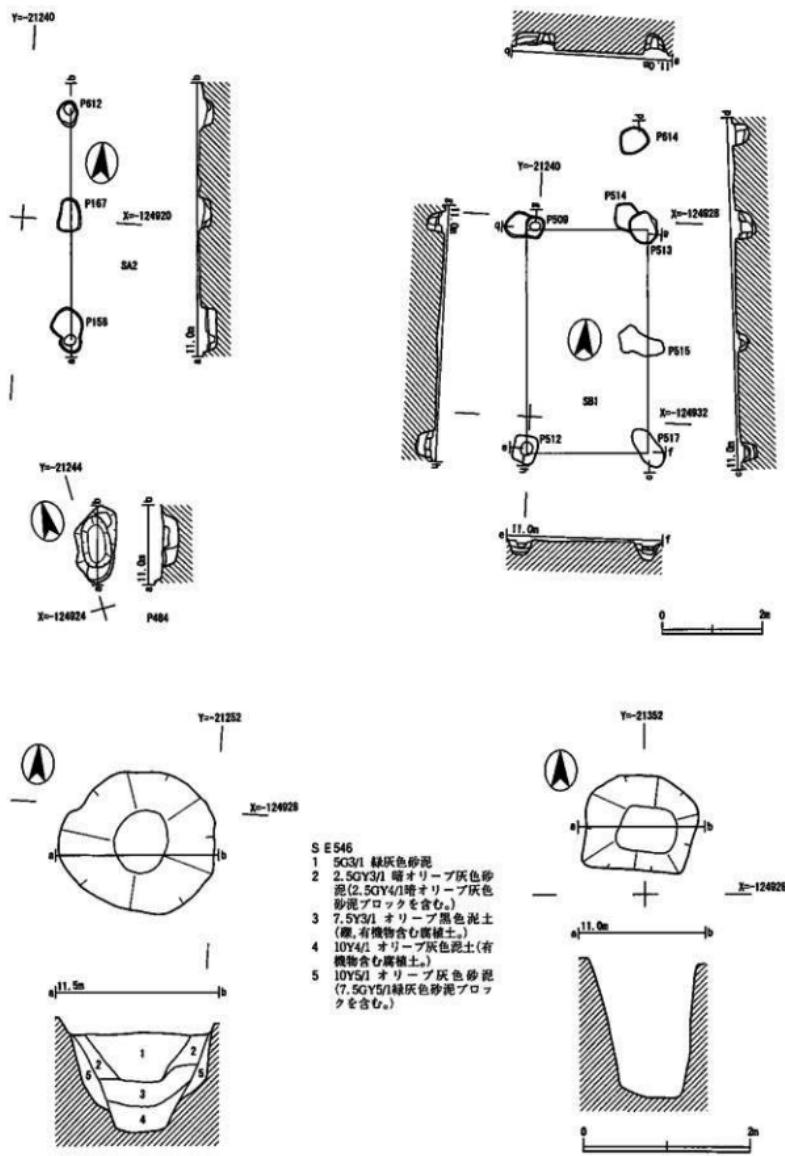
第24図 潟S D 252平面図・断面図 (1/40)
(遺物に付した番号は本書の遺物番号に対応する。)

器が少量あるのみである。遺物からすれば弥生時代とすべきであるが、溝の方向がS D 232と平行であることから飛鳥時代の可能性もある。

第5節 平安時代後期から鎌倉時代の遺構

1) 建物跡 S B 1 (第25図・図版40上参照)

S B 1は交差点の中央、J・K17~19区に位置する建物跡である。2間×1間の南北棟と考えられるが、西壁中央の柱穴が確認できなかった。桁行は8尺等間、梁行は7尺等間である。建物の主軸はN-3°-Wとやや西に振れる。柱掘形は直径が約40~50cmの平面形で円形を呈し、深さは30~50cm残存する。P515, P518に柱の抜きとり痕が認められた。また、P513に先行する柱穴P514が確認されており、この建物に先行する建物の存在ないし横列S A 1からの延長も想定できるが、具体的にはよくわからない。出土遺物は土器の細片が数点あるのみで時期決定に耐える資料ではない。しかし、この建物は周辺に位置する井戸や土器埋納遺構と一連のものと考え



第25図 建物跡 S B 1・橋列 S A 2・P 484平面図・断面図(1/100)及び井戸 S E 546・井戸 S E 627平面図・断面図(1/60)

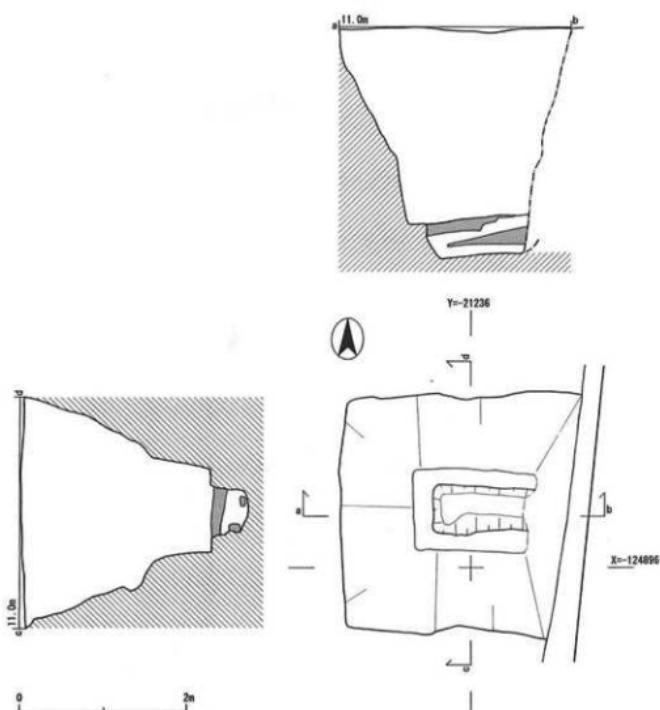
られるので、平安時代後期から鎌倉時代のものと考えられる。

2) 棚列 S A 2 (第25図参照)

S A 2は交差点北部、J 15・16区に位置する南北の棚列である。2間分を確認した。主軸はわずかに西に振れており、N - 4° - Wである。柱掘形は直径40cmの平面形で円形を呈し、深さは30cm前後である。柱穴P 612ではS D181を切り、したがってS D181よりも新しい遺構である。そして中世の溝S D179に切られる。出土遺物はない。しかし、この棚列はS B01と同様、周辺に位置する井戸や土器埋納遺構と一緒にものと考えられるので、平安時代後期から鎌倉時代のものと考えられる。

3) 井戸 S E 10 (第26図、図版37下参照)

S E 10は北トレント中央部、I・J 9・10区に位置する井戸である。S D5, S D7, S D13, S D200を切る。検出面において南北2.5m、東西2.8m以上の平面形で方形を呈する。井戸の東端は調査区外に位置しており検出できなかったが、S E 10全体の8割程度を確認することができた。S E 10はまず、深さ2.25mまで断面形が逆台形状に掘り下げられている。その時点での底面は南北0.98m、東西1.40m以上の方形である。この掘り込まれている土層は砂泥の堆積で構成される沖積層であり、湧水層ではない。底面において粘土質の腐植土とシルト質の砂泥層との互層に変わり、その上面から発掘時でも水がしみ出してきた。この深さに到達するところが井戸を掘り下げた当時でも必要であったと考えられる。



第26図 井戸 S E 10平面図・見通図 (1/60)
(トーンは粘土質の腐植土の分布範囲を示す。ただしそれは埋土ではなく地山に含まれており、井戸の壁で確認できたものである。)

そしてその面の中央をさらに幅60cm、深さ60cmで断面形をU字状に掘り下げている。おそらく水溜の機能を持つくぼみと考えられる。

しかし、井戸としての施設はこの中央の土坑のみで、縦板や曲物などの井戸枠は認められなかった。そして土層の堆積状況をみても、検出面より遺構の底面まで、拳大ほどの地山ブロックを多く含んだ暗緑灰色砂泥層の1層のみの埋土であり、人為的に一気に埋め

られたことが考えられよう。機能時のものと考えられる堆積層はなかった。

以上のような状況から井戸として掘られているが、素掘りの井戸としては平面規模が大きすぎ、その可能性はない。また、井戸枠が認められなかつたが、仮に井戸枠を抜き取ったと考えても、機能時の堆積層が見当たらぬことから、非常に短期間のうちに埋められたと考えられる。あるいは、井戸枠を埋設する前に井戸の構築を放棄して埋め戻された可能性も考えられよう。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦質土器、銅鏡がある。土師器と須恵器はS E10が切る遺構 S D5、S D7からの混入であろう。それ以外で年代決定の根拠とできるものは瓦質土器の1点のみである。脚付鍋の脚部の破片である。詳細な時期はわからないが、およそ13世紀、鎌倉時代のものであろう。

4) 井戸 S E546 (第25図参照)

S E546は交差点の西部、N 17・18区に位置する。直径1.8mの平面形はほぼ円形である。深さは1.32mで、断面形は逆台形である。井戸枠ではなく、規模からみても素掘りの井戸と考えられる。S E627とS H465を切る。埋土は5層に分かれるが、1~3層は埋没時の堆積層、4層は機能時の堆積層と考えられる。3層は3cmほどの礫を含み特異である。1層と2層からは土器片や炭化物を含んでおり、井戸として機能を停止した後、ごみなどの廃棄に使用された可能性がある。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、白磁がある。時期は13世紀と考えられる。

5) 井戸 S E627 (第25図参照)

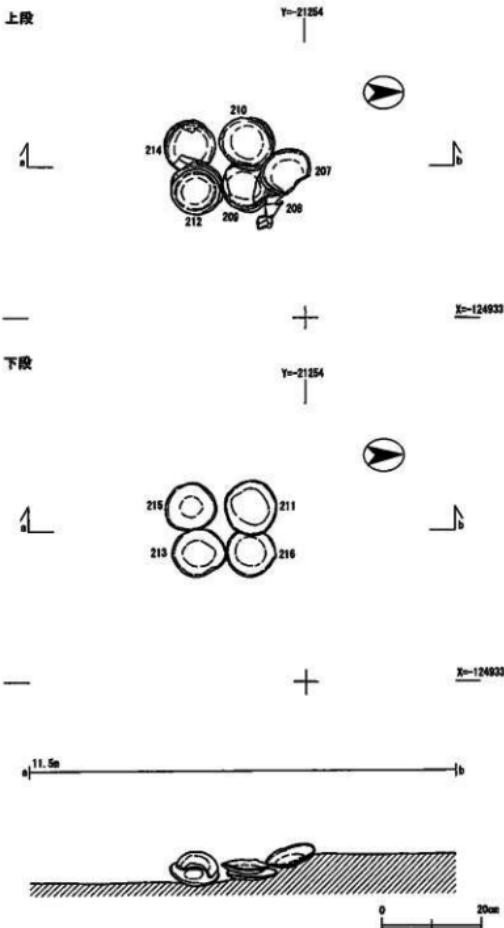
S E627は交差点の西部、M・N 17区に位置する。南北1.3m、東西1.8mの平面形はほぼ方形である。深さは1.66mで、断面形は箱形で、壁は垂直に近い。井戸枠ではなく、規模からみても素掘りの井戸と考えられる。S H465を切るが、S E546に切られる。埋土にブロック状の砂泥を含み、人為的に埋められたと考えられる。出土遺物は土師器、須恵器がある。S H465からの混入である。時期はS E546よりも古いが、11世紀後半から13世紀と考えられる。

6) 土器埋納遺構 S X462 (第27図、巻頭図版2下参照)

土器埋納遺構 S X462は交差点の西部、N 18区に位置する。土師器皿を2枚セットで4組を地面に正方形に並べ置いたものである。また別に2枚の皿がこの北側の皿に重なるように置かれていた。この内1枚は遺存状態が悪かった。この土師器の周囲には、掘りこんだ形跡が見当たらないこと、土層の境界付近から検出されていることから、土師器皿を並べた後、土を被せて埋めたと考えられる。近似する土器埋納遺構には興福寺中金堂²¹⁾や高野山宝性院²²⁾に例がある。これらは穴を掘った中に皿を並べ置いているという違いがあるが、地鎮にかかる遺構と考えられている。S X462については建物跡が近接していないので直接建物と関係付けることはできないが、この北側にS E546、S E627があり、東側にはS B1がある。さらにこの南側には第3次調査のS A01があり、これら一連の建物のある敷地の南端を区画するものと考えられる。これらの区域を屋敷地と捉えれば、S X462はこの屋敷地の地鎮など祭祀にかかる遺構と考えることができよう。土師器皿は平安京縦年のIV期中に併行し、時期は11世紀後半のものである。

7) 溝 S D 1 (第28図、図版2参照)

S D 1は北トレントの北部、H・I 6~8区に位置する南北溝である。北でわずかに西に振れており、N -3° -Wの方向である。確認できたのは一部であり、調査区外にさらに南北に延びる。溝の規模や形態、位置関係からS D538とは連続する可能性が強い。幅1.1m、深さ60cmで断面形は逆台形である。底面は幅50cmほどの平坦面があり、壁は底近くでは垂直に近く立ち上がるが、中位で屈曲し上部では緩やかに立ち上がる。土層から確認できなかつたが、恐らく崩落と再掘削の過程でこのような断面形になったものと推測される。埋土は7層に分けられるが、7層は砂層であり、6層以上でも薄い砂層を含むなどしてお、水が流れていたことがわかる。底面は北から南に向かって低くなつてお、また埋土の堆積状況からも北から南へ流れていたと考えられる。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、瓦、瓦器がある。混入の遺物を除けば、9世紀~13世紀の遺物であり、この時期にS D 1は機能していたものと考えられる。近世の遺物は全く含まないこと、これと連続すると考えられるS



第27図 土器埋納造構 S X 462平面図・見通図 (1/10)
(遺物に付した番号は本書の遺物番号に対応する。)



第28図 潟 S D 1断面図 (1/30)

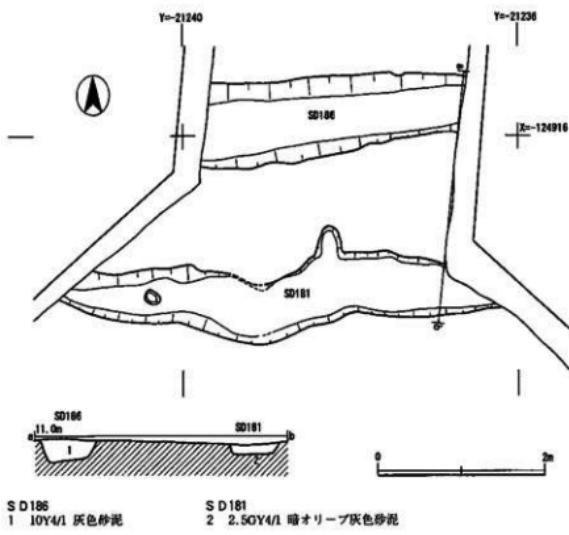
D538では埋没後に近世の素掘りの小溝が形成されることから、13世紀以降の中世のうち、いずれかの時期に埋没したと考えられる。

8) 道路造構 S F 1・S D 68・SD 538(図版4・6・38・39参照)

これらは交差点東部で検出された。道路造構 S F 1は S D 68と SD 538を東西の側溝とするもので、その内部には小さい溝状造構による下部構造が確認できたことから、道路造構と判断した。そこでまず東西の側溝、ついで下部構造の小溝群を説明した後、S F 1について報告することにする。

S D 68はG17~20区に位置する南北溝である。ほぼ正南北の方向である。S D 69, S D 70, S D 535を切る。S D 68で確認できたのは一部であり、調査区外にさらに南北に延びる。幅1.5m、深さは最深で1m、断面形は逆台形である。底面は幅50~100cmほどの平坦面があり、壁はかなり急に立ち上がる。埋土は砂層ないし薄い砂層を含むなどしており、水が流れていることがわかる。底面は南から北に向かって低くなっている局所的な凹みのよう、埋土の堆積状況では北から南へ流れていたと考えられる。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、瓦、瓦器がわずかある。混入の遺物を除けば、13世紀の遺物であり、この時期に S D 68は機能していたものと考えられる。近世の遺物は全く含まないこと、埋没後に近世の素掘りの小溝が形成されることから、13世紀以降の中世のうち、いずれかの時期に埋没したと考えられる。

S D 538はH16~21区に位置する南北溝である。ほぼ正南北の方向で



第29図 溝S D181・溝S D186平面図・断面図 (1/60)

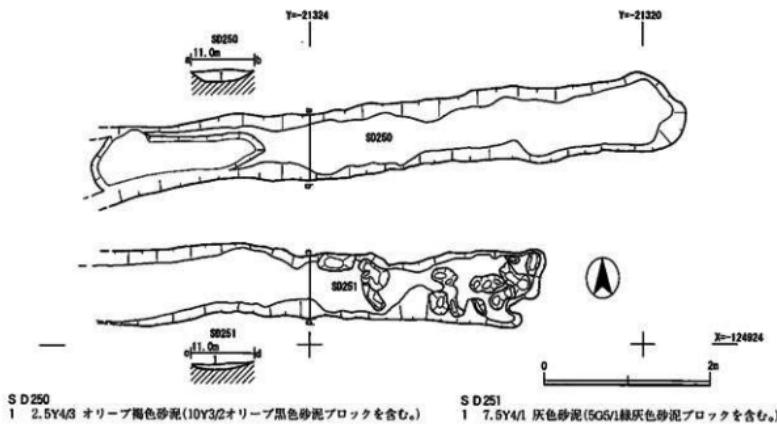
ある。SD69, SD70, SD535を切る。確認できたのは一部であり、調査区外にさらに南北に延びる。溝の規模や形態、位置関係からSD1とは連続する可能性が強い。幅1.3m、深さ50cmで断面形は逆台形である。底面は幅50cmほどの平坦面があり、壁はかなり急に立ち上がる。埋土は砂層ないし薄い砂層を含むなどしておらず、水が流れていることがわかる。底面は多少低くなっている箇所はあるものの、ほぼ水平で埋土の堆積状況から北から南へ流れていったと考えられる。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、瓦、瓦器がある。混入の遺物

を除けば、13世紀の遺物であり、この時期にSD538は機能していたものと考えられる。近世の遺物は全く含まないこと、SD538では埋没後に近世の素掘りの小溝が形成されることから、13世紀以降の中世のうちいざれかの時期に埋没したと考えられる。

SD68とSD538の間には小さな東西溝がいくつか存在する。SD72, SD73, SD74, SD75, SD77, SD78, SD79, SD82, SD217, SD218, SD219, SD220, SD221, SD222である。いずれも幅20~30cm、深さ10cmほどの小さな溝で断面形は浅い皿状である。埋土はいずれも灰オリーブ色砂泥で土器片や炭化物を含む。これらの溝は30~50cmの間隔で平行に並ぶ。SD218からSD222の間では溝の間に畝状の細長い高まりがあることがわかった。ここは重機で掘削し残した部分を精査した結果、検出したものである。ほかの地点では重機掘削時に削られて溝のみが検出されているが、実際はこうした小さい東西溝には細長い高まりが伴っていたと考えられる。これは道路遺構の下部構造で「波板状凹凸面」といわれるものである。出土遺物には土師器、須恵器の小破片があるが、遺構の年代の手掛かりになるものはない。切り合いから中近世の南北の小溝群に先行するものである。

以上のような状況からSD538とSD68に挟まれた部分で、東西の小溝群の分布する区域を道路遺構と捉えた。交差点南東壁の断面を見れば、台形状の高まりとして道路が現れている。しかし、交差点北東壁では台形状の高まりは見とめられず、道路はここまで延びていないことになる。東西の小溝群もG18区より北では検出していない。とすれば道路遺構はN18区が北端になると推測することができよう。

この道路遺構の時期は側溝に当たるSD68、SD538が機能していた13世紀には存在することがわかる。しかし、形成時期についてはSD68とSD538が掘削される時期や東西の小溝群が形成される時期がわからないので、道路遺構についてもわからない。また、道路遺構の廃絶時期については、交差点南東壁の断面では、SD68やSD538が埋没してからも、道路遺構の高まりには土が積まれておらず、維持されていたことがわかる。遺物からそれを示す時期のものはないのでわからないが、廃絶時期は近世以降である。



第30図 溝SD 250・溝SD 251平面図・断面図(1/60)

S D 181は交差点の北端、J・K15区に位置する東西溝である。幅は一部1mほどのところもあるが、およそ50~75cm、深さ13cm、断面形は逆台形である。出土遺物には土師器、須恵器があるが、混入したものであろう。遺構の時期は遺構の方向からS D 1、S D 68、S D 538と同時期かそれ以降と考えられ、中近世の遺構である。

10) 溝SD 186(第29図参照)

S D 186は交差点の北端、J 14・15区に位置する東西溝である。最大幅は1m、深さ27cm、断面形は逆台形である。出土遺物には土師器、須恵器があるが、混入したものであろう。遺構の時期について遺構の方向からS D 1、S D 68、S D 538と同時期かそれ以降と考えられ、中近世の遺構である。

11) 溝SD 244・溝SD 261・溝SD 266・溝SD 50(図版8参照)

S D 244、S D 261、S D 266、S D 50は西トレンチ西部に位置する南北溝である。形態・規模・時期が共通し、位置も近接しているので、遺構の性格にも共通性があるものと考えられる。そこでここではまとめて報告することにする。

S D 244はA F 15~17区に位置する。南北溝であるが北でわずかに西に振る。N-5°-Wの方向である。溝は一部の検出に留まり、調査区外でさらに南北に延びる。幅1.7m、深さ20cm、断面形は浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。埋土はブロック状の砂泥を含む層の1層である。

S D 261はA D 16・17区に位置する。正南北方向の溝である。A D 16区で北端が確認されている。南は調査区外にさらに延びる。幅1.0m、深さ10cmで、断面形は浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。

S D 266はA C 16・17区に位置する。正南北方向の溝である。溝は一部の検出に留まり、調査区外でさらに南北に延びる。幅1.4m、17ラインを境に北は段状にさらに深くなる。A D 17区では深さ8cmほどであるのに対し、深いA D 16では28cmある。断面形は浅い皿状である。埋土は2層に分かれるが、2層が分布している範囲では深さが深い。

S D 50はA B 16・17区に位置する。正南北方向の溝である。溝は一部の検出に留まり、調査区外でさらに南北に延びる。幅2.0m、深さ10cmで、断面形は浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

これらの溝は、断面形が浅い皿状で、壁が緩やかに立ち上がっていることが特徴である。また、切っている遺構の遺物がほぼ原位置を保ったまま出土するという傾向がある。それはS D 244におけるS D 252の遺物、S D 50におけるS D 275・S D 541の遺物の出土状況に示されている。このような特徴から考えれば、溝を掘り内部をき

れいに仕上げられたものではなく、この溝の範囲で土が攪拌を受けて形成されたものと考えられる。そしてこれらの溝は A B 16・17区から A F 16・17区の間を平行して並んでいる。S D244とS D261の間隔は8mあるが、S D261とS D266、S D50は約5mの等間隔で並ぶ。こうしたことからこれらの溝は畑と関連する遺構の可能性を考えられる。

出土遺物にはS D244で信楽の擂鉢の小破片が出土しており、近世には確實に存在したとみられる。しかし、中世に遡るものかどうかは手掛かりがなくわからない。

12) 溝S D250・溝S D251（第30図参照）

S D250、S D251は西トレンチの西部に位置する東西溝である。形態・規模・時期が共通し、位置も近接しているので、遺構の性格にも共通性があるものと考えられる。そこでここではまとめて報告することにする。

S D250は西トレンチの西部、A D～A F 16区に位置する直線的な溝である。東西方向でやや北に振る溝で、E-5°-Nの方向である。A D 16区ではS D244に切られるが、それ以上西には延びない。東についてもA D 16区で東端が確認されている。最大幅0.9mで、断面形は浅い皿状である。深さは10cmほどであるが、底面が西端で急激にくぼみ、そこでの深さは15cmほどになる。西端のくぼみ以外では底面はほぼ水平である。埋土は1層である。出土遺物には土師器、須恵器がある。

S D251は西トレンチの西部、A D～A F 16区に位置するほぼ正東西方向の直線的な溝である。A D 16区ではS D244に切られるが、それ以上西には延びない。東についてもA D 16区で東端が確認されている。最大幅0.9mで、断面形は浅い皿状である。深さは6cmほどであるが、底面が西端で急激にくぼみ、そこでの深さは10cmほどになる。また東半部の底面は小さいピット状のくぼみなどにより凹凸がはげしい。埋土は1層である。出土遺物には土師器、須恵器がある。

この2つの溝も底面には凹凸が多く、あるいは急に深くなったり浅くなったりして不安定である。こうした状況は述べたS D244・S D261・S D266・S D50の状況に似ている。S D250、S D251はこれらの溝とは直交し、切り合いからこれらの溝に先行する。S D250、S D251はS D244・S D261・S D266・S D50に先行するが近い時期と考えることができよう。

13) P 484（第25図参照）

P 484は交差点の北西部、K 16区に位置する。平面形は長軸1.6m、短軸0.85mのやや不整であるが精円形を呈する。深さは30cmである。柱当たりなど柱の痕跡は認められなかったが、埋土の状況から柱を抜き取った可能性はある。出土遺物は土師器と須恵器の細片がわずかに出土した。交差点の北西側調査区外に建物跡が存在すると仮定すれば、この遺構はその柱穴の1つになる可能性があり、一応報告しておく。

14) 島畠跡 S X1000（巻頭図版2上、図版9・40下・41参照）

島畠跡 S X1000は西トレンチの中央、U～X 17～20区に位置する壇状の遺構である。上面で東西10.2m、南北5.9m以上、下端部で東西13.7m、南北8.7m以上、高さ1.1mの壇状の遺構である。2月の試掘調査で初めて見つかり、寺院の基壇の可能性が指摘されたが、本調査での精査の結果、この遺構上から耕作の痕跡が見つかり、また土は中世に積み上げられたものであることが判明し、島畠と判断した。島畠の上面を2面確認した。それらを上から順に第1面、第2面として大きく2時期に分けることができる。

第1面は上述の壇状遺構の上面にあたる。標高11.4m前後のはば平坦な面である。S D422が検出されたが、これは耕作に関連する小溝である。また、西端では幅50cm、高さ10cm前後の壘状の高まりが見つかっている。南側に3mほどあり、調査区外に南へさらにつく。東端の島畠の傾斜部や島畠下端部では直径20cmほどのピットが南北方向にならんで検出された。木質遺物は残っていないが、規模や形状から杭の跡と考えられる。これは土止め施設などの関連が想定できる。

第2面は島畠下端より高さ0.7mの面で、標高11.0m前後のはば平坦な面である。南北方向のS D616～622があり、耕作に関わる遺構と考えられる。また、西端には第1面と同様、壘状の高まりが認められる。幅30～100

cm、高さ10~20cmで、南には調査区外にさらに続く。東端でもこれと同様の畔状の高まりが検出されている。幅30cm、高さ15cmで調査区外に南へさらに続く。

第1面と第2面を掘り下げる結果、出土した遺物には土師器、須恵器、瓦器、鉄釘がある。この内新しい時期の遺物に土師器皿と瓦器があり、ともに13世紀代のものと考えられる。これらの遺物は量的にわずかであり、出土遺物の大半は飛鳥時代の遺物が占める。時期決定の根拠としてはやや弱いが、この島畝の形成時期は13世紀以降と考えられる。

なおこの島畝跡S X1000を除去して検出した面では溝とピットが見つかっている。SD631は先述しているが造構の方向から飛鳥時代以前の溝と考えられる。P623からは小破片ではあるが、弥生土器が出土している。これらは島畝形成前の遺構と考えられるので、島畝の形成は、古くとも飛鳥時代までは遡らないといえる。

註

(註1) 奈良国立文化財研究所編『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅰ』(奈良、平成11年)

(註2) 元興寺文化財研究所考古学研究室編『高野山発掘調査報告書』(奈良、昭和57年)。ただし近世のものである。

第4章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナにして100箱ある。種類としては弥生土器、土師器、須恵器など土器類が全体の約9割を占める。ほか少量であるが、瓦類、土製品、石製品、銅鏡、動物遺体がある。遺物は弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期から飛鳥時代、平安時代から鎌倉時代の、大きく3つの時期に分けることができる。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺物は方形周溝墓と溝を中心に土器類と石製品がわずかに出土している。コンテナにして10箱程度である。

古墳時代後期から飛鳥時代の遺物は全体の中でも大きな割合を占める。なかでも土器類が最も多く60箱を占める。瓦類や土製品、石製品もこの時期のものが大半である。堅穴住居跡、溝、土坑を中心出土しているが、中近世の遺構や包含層からも調査区全体から出土している。

平安時代から鎌倉時代の遺物は土器類で15箱ある。土器埋納遺構からの一括資料があるほか、井戸、溝を中心に出土している。土器類と銅鏡がある。

各時期とも遺構の一括資料に恵まれており、それを中心に報告していくこととする⁽⁴⁾。

第1節 弥生土器・古式土師器

1) 方形周溝墓1 (巻頭図版1下、図版10・11・42参照)

S D275からは受口状口縁甕(3)、受口状口縁鉢(4)、手焙形土器(8)、壺体部(7)が出土している。受口状口縁鉢(3)は口縁部を受口状にし、受け部外面に列点文を施す。受部の屈曲はゆるやかである。体部には上から7条1対の櫛描直線文、3条1対の櫛による列点文を施す。手焙形土器(8)はほぼ完形で頸部に突帯付加し、刻み目を施すものである。外面は一次調整に刷毛目を施す。文様は受部外面に7~6条の櫛原体による列点文、体部は櫛描直線文、列点文を施す。腋部と受口の境界には耳を付加し刻む。胴部の突帯、腋部の耳等から出現期の手焙形土器に多い特徴であるといえる。腋部に文様は施さない。底部は山城地域以西の手焙形土器にみられる平底である。S D275出土土器は近江地域と共通する受口状口縁部のものが多いが、胎土・焼成からは在地製作品の可能性が高い。受口状口縁鉢の口縁部の形状に新しい要素がみられるが、おおむね山城編年V~3期に相当する。

S D341からは垂下口縁の広口壺(5)、短頸壺(1)、受口状口縁甕(2)、壺底部(6)が出土している。垂下口縁の広口壺はほぼ完形品であり、直立する頸部から外上方にのびる口縁部を持つものである。口縁端部は外側に面を持ち下方に垂下するものであり、端部には3条の凹線を施した後、円形竹管浮文を施す。頸部は縦位のヘラミガキ、体部は上から櫛描直線文、櫛描波状文を3回繰り返す。文様の前後関係は、文様の切り合い関係から上から下へ施すようである。体部下半は縦位のヘラミガキを施す。体部内面は板ナデを施す。短頸壺(1)は口縁部が上方に直立するものであり、完形品である。体部の中位より上に最大径を持ち、底部はドーナツ底である。外面一次調整は乱方向の刷毛目、二次調整は縦位のヘラミガキを施す。内面調整は上半部がナデ、体部下半はハケによる。受口状口縁甕は団上合成により復元した、外上方に立ち上がる受部をもつもので、端部は丸くおさめる。体部はタキ後タケハケを施す。底部外面は垂直方向のタキが残る。以上のうち、弥生中期のもの混入と思われる壺底部(6)以外は、いずれも山城編年V~3期のものである。S D275とS D341は、併行に存在し方形の一体の溝になる可能性が高い。また、出土遺物からみた両溝の時期は同じであることから、方形周溝墓である可能性が高い。

2) S D200出土土器 (図版11参照)

S D200からは直口壺(9, 10), 高杯(11), V様式壺(13), 鉢(12), 壺または壺底部(14), 壺体部(15・19)が出土している。いずれも破片である。V様式壺(13)は小形品である。壺(15)は体部片で列点文, 波状文を施す。いずれも第V様式後半である。

3) S D535出土土器(図版11参照)

S D535からは壺(16), 器台(17)が出土している。壺(16)は如意形口縁部を持ち外面に荒いハケを施す。第II様式の近江型壺である。器台(17)は外面に縦位のヘラミガキを施す。第V様式後半のものである。

4) S D264出土土器(図版12参照)

S D264からは庄内壺(21, 22), 受口状口縁壺(23, 24), 小型丸底壺(25), 壺(20・26), 壺底部(27)が出土している。受口状口縁壺(22)は受部外面に横排列点文を施すもので、受部上方には内傾する平坦面をつくる。第V様式後半に位置づけられる。小型丸底壺(24)は外面に横位の沈線状のヘラミガキを施す。布留式古相のものである。壺(25)は外面に縦凹線を施し、胎土は精良である。壺底部(26)は第II様式の壺の底部で混入である。

5) その他の遺構出土土器(図版12参照)

飛鳥時代以降の遺構にも弥生土器は混入しており、その主要な土器をここで報告する。直口壺(29), クの字状口縁壺(30), 庄内壺(31), 受口状口縁壺(32), 高杯(28, 33), 壺(34), 壺(35), 有孔鉢(36), 壺底部(18, 37)がある。直口壺(29)は頸部片で外面に縦方向のハケが施される。S H465より出土。クの字状口縁壺(30)は分厚く短い口縁部が頸部よりまっすぐ外反する。S D1出土。庄内壺(31)は在地産の胎土をもつ。口縁部は外反気味に立ち上がり、長い特徴がある。内面はヘラケズリを施す。受口状口縁壺(32)は受口状口縁部の屈曲が緩く、布留式に併行する時期のものであろう。S D68出土。高杯(28)は脚部の破片で裾部が大きく開く。脚柱部には沈線が8条以上施され、また、裾の部分には凹線文が5条施される。この沈線と凹線文の間に透孔が開けられている。外面には縦位のヘラミガキが施される。第V様式後半のものである。S D540出土。高杯(33)は脚柱部の破片で、脚顶部を杯底部に差し込み接合するものである。布留式古相のものである。S D7出土。壺(34)はつまみの部分の破片である。S D5出土。壺口縁部(35)はおそらく受口状口縁の破片と考えられる。口縁部やや下がった位置に突帯が貼りつけられ、その上に刻み状の文様が施される。弥生時代中期のものである。S D68出土。

第2節 古墳時代後期から奈良時代の土器類

1) 積穴住居 S H465・土坑 SK 629出土土器類(図版13~16・46上参照)

ここでは振り下げる途中までSK 629等が切り合っていることに気づかず、遺物を取り上げているので、ここではまとめて報告する。そして時期差を示してそれぞれの遺構に当てはめて考察することにする。なお確実にSK 629出土のものはそのように記載する。

土器類(38~59)

皿(38~41, 46), 杯A(42~44), 杯B蓋(45), 杯B(47, 48), 壺の把手(49~51), 壺(52~58), 鍋(59)がある。38と39の皿と43の杯Aは口縁が強く外反する。42, 43, 44の杯Aは外面には横位のヘラミガキがあり、内面には放射状の暗文が残存する。杯B蓋(45)の外面には横位のヘラミガキが残存する。49の把手は断面が丸い角状のもの、50と51の把手は扁平なものである。壺には胴部が球形のもの(52~55)と長胴形のもの(56~58)がある。それらは胴部が球形のものには口縁部が直線的に立ち上がるもの(53), 内湾気味に立ち上がるもの(52, 54), ゆるやかに外反しつつ立ち上がるもの(55)の3種類がある。胴部が球形のものはすべて胴部外面に縦位のハケメが施される。しかし、内面の調整では異なり、52の口縁内面には横位のハケメが施される。54の胴部内面には縦位のハケメが施される。55の内面はすべてナデによる。長胴形のものは口縁部が頸部で大きく折

れ曲がり外に聞く。口唇は上下に拡張するように肥厚する。胴部外面は縦位のハケメが施される。鏡(59)は口縁部が頸部で大きく折れ曲がり、外反しつつ大きく聞く。胴部内面に横位のハケメが施される。55はS K629から出土。

須恵器 (60~81)

杯A (61, 62), 杯H (63, 64), 杯B蓋 (60, 65~69), 杯B (70~72), 壺 (74, 75, 79~81), 壺 (77, 78), 壺K (76) がある。杯A (61, 62) は口縁部が緩やかに立ち上がる。杯H (63, 64) は口縁部の立ちあがりがしっかりしており、口径も14cmほどである。古い様相を示している。杯B蓋のうち、60は口縁部内面にかえりを有しており古い型式である。65から69は口唇にかえりを有するもので、笠形のもの (64, 68) と平坦なもの (65~67) がある。70・71は口縁部片で杯Bになるものであろう。72は杯Bで高台が底部の比較的周辺部に付く。73は杯Bの底部で、高台は底部のやや中心よりに付く。74, 75は壺の口縁部である。74は7条1対の櫛描波状文が、75は9条1対の櫛描波状文が頸部に施される。77・78は壺の口縁部である。どちらも胴部上半にカキメが施される。76は壺Kの口縁部から頸部の破片である。頸部中央に1条の沈線が、頸部上位に2条の沈線が施される。79から81は壺の胴部破片である。杯H (63, 64) と壺 (74, 75), 壺 (77, 78) はこの中では古い一群である。飛鳥Ⅰ期ないしⅡ期のものであろう。それ以外はほぼ飛鳥V期に位置づけられよう。

2) 土坑S K626出土土器類 (図版19参照)

土師器 (120)

鍋 (120) が出土している。口縁は緩やかに外反する。

須恵器 (121)

杯B (121) が出土している。飛鳥V期のものである。

3) 土坑S K628出土土器類 (図版17~19・43・46下参照)

土師器 (82~92, 104~113, 119)

杯A (82~86), 杯B (87), 杯C (88~90), 直A (91, 92, 119), 鏡 (104), 壺 (105~112), 壺B (113) が出土している。杯A (82~86) は体部から内湾気味に立ちあがり、口縁端部は外反する。82と84は摩滅してわからないが、83は内面に斜放射状二段暗文が施される。86の鉢は内外面ともハケの後ナデ消しにより調整されている。杯Cも体部から内湾気味に立ちあがり、口縁端部は外反する。90の内面には一段放射暗文が一部残存する。また90の底面外面は指頭圧痕が顕著である。91と92は皿で、91の内面には一段放射暗文が一部残存する。104は口縁が直口で、鏡の口縁部である。105~108, 110の壺は長胴壺でいずれも口縁部はくの字に折れ曲がるが、口縁が内湾気味に立ちあがるもの (106), 直線的に聞くもの (107), 緩やかに外反するもの (108, 110) がある。109と111は球胴の壺である。口縁は緩やかに外反する。113は河内產の羽釜である。113は壺C, 119は盤である。おおよそ飛鳥V期のものである。

須恵器 (93~103)

杯A (93~96), 杯B蓋 (97~100), 杯B (101~103), 鉢 (114, 117), 鏡 (115), 壺 (116, 118) が出土している。杯B蓋 (97~100) はすべて笠形を呈する。100は口縁部内面にかえりを持ちこの中でもやや古い要素を持つ。114の鉢はいわゆるすり鉢の底部である。115は鏡の頸部から胴部で、胴部中央に1か所孔がある。116は壺の頸部である。5条1対の櫛描波状文と沈線2条が施される。117は鉄鉢形の鉢である。若干古い要素・新しい要素を含むが、おおよそ飛鳥V期のものである。

4) 清S D 5出土土器類 (図版20参照)

土師器 (135)

壺 (135) が出土している。口縁部で内湾気味に立ちあがる。

須恵器 (122~134)

杯H 蓋 (122~124), 杯H (125), 杯G (126), 高杯 (127, 128), 平瓶 (129), 短頸壺 (130, 131), 壺

(132, 133), 鉢 (134) が出土している。124の杯H蓋は他のものよりもやや大きく古い形態をしている。127の高杯は杯部で脚部に凸線が巡る。128の高杯は脚柱部である。透孔があり、外面にはカキメが施されている。ともに長脚の無蓋高杯の破片である。134はすり鉢の口縁部である。外面にカキメが施されている。飛鳥Ⅰ期からⅡ期のものであろう。

5) 溝S D 7出土土器類 (図版20参照)

須恵器 (136~146)

杯 H 蓋 (136, 137), 杯 H (138~140), 杯 G (143), 高杯 (144), 提瓶 (141), 平瓶 (142), 壺 (145), 壺 (146) がある。140の杯Hは他のものよりもやや大きく古い形態をしている。142は平瓶の口縁部から頸部で、頸部に沈線が1条巡る。145は壺の肩部で、肩に稜線が1条巡る。146は壺の口縁部で口縁よりやや下がった位置に沈線が1条巡る。飛鳥Ⅰ期からⅡ期のものである。

6) 溝S D 231出土土器類 (図版21参照)

土師器 (152, 153)

壺 (152) と高杯 (153) がある。152は壺の口縁部で、頸部から緩やかに外反し端部を丸くおさめる。153は高杯の脚柱部である。ともに1層より出土。

須恵器 (147~151)

杯G蓋 (147), 杯B (148, 149), 杯A (154), 杯B蓋 (155), 壺 (150, 151) がある。杯B蓋 (155) は口縁内面にかえりの付くものである。146~150は1層, 153・154は2層から各々出土したが、時期差は明らかではない。飛鳥Ⅳ期のものである。

製塩土器 (156)

製塩土器 (156) が出土した。口縁部で内面に縱方向のハケメが一部残存する。2層から出土。

7) 溝S D 232出土土器類 (図版21参照)

土師器 (160)

杯C (160) の外面は上半が横方向のヘラミガキ、下半には横方向のヘラケズリが施される。内面は一段放射暗文が施される。飛鳥Ⅲ期のものである。

須恵器 (157~159)

壺 (157~159) のうち157・158は脚部の破片、159は頸部である。飛鳥時代のものであろう。

8) 溝S D 252出土土器類 (図版22参照)

土師器 (164, 165)

高杯 (164), 壺 (165) があり、高杯 (164) は脚部、壺 (165) は把手である。飛鳥時代のものである。

須恵器 (163, 166~175)

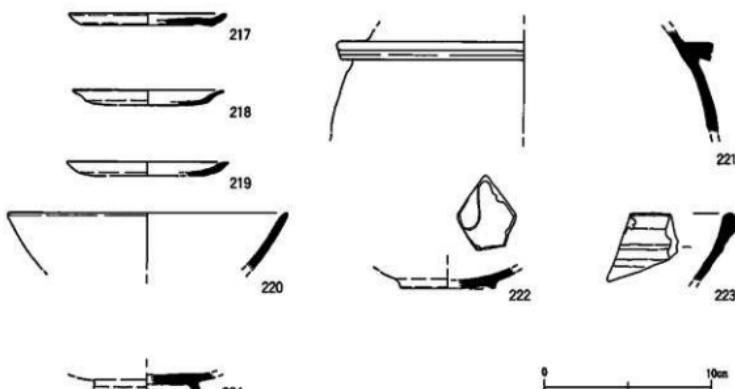
杯A (166~168), 杯B蓋 (169, 170), 杯B (171, 172), 高杯 (163), 平瓶 (173), 鉢 (174), 壺 (175) がある。杯B蓋のうち166と167は内面にかえりがあるが、168にはかえりがない。杯B (171, 172) は高台が中央よりつけられている。飛鳥Ⅳ期のものである。

またS D 251から壺 (161) と杯B蓋 (162) が出土している。壺は口縁部から頸部の破片で、口縁部は内溝しつつ立ち上がり受口状になる。口縁部外面にはヘラによる刺突文が施されている。頸部は縱方向のハケメが施され、その後に2本組の沈線が3本施される。TK209型式よりTK217型式のものと考えられる。杯B蓋 (162) は内面にかえりがある。これらもS D 252とはほぼ同時期のものである。S D 251はS D 252を切っており、これらの遺物はもともとS D 252に含まれていたものが、S D 251に混入した可能性がある。

9) 溝S D 275上層・溝S D 541出土土器類 (図版23参照)

土師器 (176~178, 182, 183, 185~187)

杯A (176), 壺A (177), 杯C (182), 壺 (183), 壺 (178, 185~187) がある。杯C (182) の内面には一段



第31図 島畠跡 S X 1000出土土器類・造構外出土縁釉陶器実測図 (1/3)

放射暗文が施される。183は粗製の小型壺で、内面にはヘラケズりが施されている。178の壺は口縁が頸部より緩やかに外反し、端部を丸く收める。185、186は長頸壺で、口縁は直線的に開く。186は口縁端部を内面につまみあげる。187の壺は口縁部が内湾気味に立ちあがる。飛鳥IV期のものである。

須恵器 (179~181, 184)

高杯 (179), 杯G蓋 (180), 長頸壺 (181), 台付長頸壺 (184) がある。高杯 (179) は完形の無蓋高杯である。181は長頸壺の肩部である。184は台付長頸壺の胴部で、上半部は沈線が2条施され、その間に板状工具による刺突文が施される。下半部は回転ヘラケズりが施される。飛鳥IIIからIV期のものである。

10) その他の造構出土土器類 (図版23参照)

須恵器

ここでは平安時代以降の造構から出土した飛鳥時代の土器類の内、主要なものを報告する。杯H蓋 (188, 189), 杯B (190), 壺 (191, 192), 膜 (193) がある。188の杯H蓋は天井部と肩部の境界を沈線で区切っており、口唇に段がある。MT 15型式のものである。P 484から出土。189の杯H蓋はTK 43型式のものである。SD 68から出土。杯B (190) は高台が中央より付けられている。飛鳥IIIないしIV期のものである。SE 546より出土しており、SH 465からの混入と考えられる。壺 (191), 壺 (192) は口縁部の破片である。191はSE 10, 192はSD 186から出土。膜 (193) は口縁部の破片である。内湾しつつ立ち上がる口縁の外面にヘラによる刺突文が施される。TK 43型式のものであろう。SD 538出土。

第3節 平安時代から鎌倉時代の土器類

1) 溝SD 1出土土器類 (図版24参照)

須恵器壺 (194, 196), 縁釉陶器壺 (195) がある。194は壺の肩部で9世紀前半のものである。196は壺の底部である。195は東海産縁釉陶器の壺の底部である。9世紀代のものであり、平安時代前期のものといえる。

2) 溝SD 68出土土器類 (図版24参照)

土器盤 (197) は、口径12.2cm, 器高2.1cm以上で、口縁部には一段凹みナデが施される。平安京の編年と比較すれば、京都VII期古に併行すると考えられる。13世紀後葉のものと考えられる。

3) 溝SD 538出土土器類 (図版24参照)

瓦器碗（198～201）のうち、198・199は椀の口縁部で、198は大和型瓦器碗第Ⅰ段階D型式で12世紀初頭、199は大和型瓦器碗第Ⅲ段階C型式で13世紀中葉のものである。200・201は椀の底部である。ともに見込みに暗文が施される。200は大和型瓦器碗の第Ⅱ段階、12世紀前半のもので、201は大和型瓦器碗の第Ⅲ段階A型式、12世紀後半のものであろう。

4) 井戸S E 10出土土器類（図版24参照）

土師器皿（202）と瓦質土器鍋（203）がある。土師器皿（202）は口径12.2cmに対して、器高0.9cmと非常に扁平な形態である。口縁部のヨコナデは一段に凹み、大きく外反する。13世紀のものであろう。瓦質土器鍋（203）は脚部の破片である。13世紀代のものである。

5) 井戸S E 546出土土器類（図版24参照）

土師器皿（204）と瓦器碗（205）、白磁碗（206）がある。土師器皿（204）は口径10.8cmで口縁部はヨコナデにより一段の凹みが巡り、大きく外反する。これも在地的な土器で13世紀に位置付けられる。瓦器碗（205）は椀の口縁部で、大和型瓦器碗の第Ⅲ段階C型式で13世紀中葉のものである。白磁碗（206）はⅡ類碗である。

6) 土器埋納造構S X 462出土土器類（図版24参照）

土師器皿（207～216）のうち205～207と210、214はいわゆる「ての字」口縁の皿である。これ以外は口縁部にはヨコナデが施され、底部外面周囲にはヨコナデの境界が段となって認められる。いずれも口径9.0～10.0cm、器高は2.0cm前後に収まる。平安京編年の平安京IV期中に併行する時期で、11世紀中葉のものである。

7) 島畠跡S X 1000出土土器類（第31図参照）

土師器皿（217～219）および釜（221）、須恵器椀（220）、瓦器碗（222）、瓦質土器鉢（223）がある。土師器皿（217～219）はいずれも口径9.0cm前後、器高1.0cm前後で非常に扁平な器形である。口縁のヨコナデは一段である。13世紀代と考えられる。釜（219）は鋤のついた胴部である。山城E型で13世紀のものである。須恵器椀（220）は東播系須恵器椀の口縁部で、森田編年の第2期第1段階のものであろう。12世紀中葉から後半のものである。瓦器碗（222）は大和型瓦器碗の底部で、見込みに連結輪状の暗文が施される。第Ⅲ段階BないしC型式で、13世紀前葉から中葉のものである。瓦質土器鉢（223）は鉢の口縁部で、口唇が外側に丸く肥厚する。黒色化が充分ではなく、白色を呈する。

8) 造構外出土の土器類（第31図参照）

特記すべき遺物として緑釉陶器皿（224）がある。底部で輪高台が貼りつけられている。素地は須恵質で、緑釉陶器である。

第4節 瓦

瓦は瓦当面の出土ではなく、平瓦、丸瓦のみが出土した。凸面の叩き目によって分類し報告する。

1) 格子目タタキ成形の瓦（225～236）（図版25・44参照）

平瓦5点（225、227、230、231、234）、丸瓦4点（232～235）、丸平不明瓦3点（226、228、229）がある。完形はなくすべて破片である。

平瓦では225、236には凹面に模骨痕と布目が認められる。斜め方向に格子目タタキが施され、227と236ではタタキの後横方向のナデが施される。236でもわかるように狭端面に近い凸面にナデが施されるようである。端部については226、231のようにヘラにより面取りされるが、230はさらに凹面側を面取りし、236は凹面側、凸面側とともに面取りをする。225、236の側縁には分割破面があり、凹面側、凸面側とも面取りされている。

丸瓦について凸面は斜位に格子目タタキが施された後、ナデにより消されている。側縁の調整については234より側縁にヘラケズリを施した後、凹面側と凸面側に面取りを施している。また端部については232では凹面側に2回ヘラケズリを施す。232では凹面側に1回面取りのヘラケズリを施している。235は残存部位が非常に小さ

く面取りの有無については確認できない。

タタキの原体について格子はどの個体についても7mm×10mmの長方形ではそろっているように見える。また、いずれも還元焰焼成で青灰色に堅密に焼きあがっており、ほぼ1つの製作地を想定することも可能である。出土造構について223～225はS H465, 227と230はS K628, 228はS D239, 229はS X1000, 231はS D414、このほかは包含層からの出土である。飛鳥V期の造構から出土しているのが最古であり、この時期に林寺跡に持ちこまれたものと考えられる。

2) 繩目タタキ成形の瓦 (237～249) (図版26・44・45参照)

平瓦12点(237～240, 242～247), 丸瓦1点(241)が出土している。完形はなくすべて破片である。

平瓦ではすべて縦位の繩目タタキ痕である。238の凹面は斜位のケズリが施されるが、それ以外には凹面に布目痕が認められる。ただし、240は凹面の側縁に近い部分を縦位のヘラケズリをしている。242には凹面に模骨痕が、246の側面には分割破面が認められる。238, 239, 240, 242, 248は凸面にタタキを施した後ナデ消している。242にはタタキを施した後端部付近をナデにより消している。奈良時代の瓦である。端部は237にのみ残存する。端部をヘラケズリした後、凹面側を面取りする。側縁については、242は側縁にヘラケズリを施すのみであるが、238, 240, 243, 246はその後凹面側を面取りする。239と244には凸面側に離れ砂が認められる。平安時代以降の瓦である。

丸瓦(239)は凸面に縦位の繩目タタキが施された後、ナデ消しがなされている。凹面は布目痕がある。端部に接する凹面には横位のヘラケズリが施される。端部はヘラケズリが施される。

タタキの原体についてはナデ消されたり、摩滅したりして遺存状態が良くないのであまりよくわからないが、繩の太さや構造、密度を見る限り、数種類に分かれる。また、胎土については290が1点のみ特異である。それは全体に赤っぽく発色し、胎土の質も非常にきめこまかなく粘土を使用して砂粒がほとんど含まないが、赤色斑粒がよく目立っている。他の瓦とは胎土が著しく異質で製作地の差を考えざるを得ないものである。したがって今回出土した縦目タタキ成形の瓦には複数の製作地が考えられる。そしてそれは時期的な差異の可能性も含んでいるといえる。

出土造構は238がS H465, 239がS D7, 240がS E546, 241と242がS D1, 243がS D224, 244がS X1000から、これ以外は包含層からの出土である。239についてSD7は飛鳥IないしII期の造構であり、瓦に比べ造構は古すぎる。239の出土地点では別造構など見つかっていないが、後世の遺物がSD7に混入した可能性が高い。

3) そのほかの瓦 (図版27参照)

ここでは凸面をナデやケズリにより調整した瓦を取り扱う。また、摩滅して調整がわからないものもここで取り扱う。

250は軒丸瓦の破片である。瓦当面は欠落しているが、瓦当と接していた丸瓦の部分と瓦当裏に付加した粘土が残存する。凸面にはところどころ布目痕が残る。SH465出土で飛鳥V期のものである。251と252は凹面に布目痕が残る丸瓦の破片である。凸面の調整は摩滅によりわからない。251の側縁はヘラケズリが施されている。252の端部もヘラケズリが施されている。251はS X1000出土である。253は凸面にハケメ状のケズリを施し、凹面には布目痕を残す丸瓦である。一部ケズリの後横位のナデを施している。254は凸面をナデを施し、凹面には布目痕を残す丸瓦である。側縁と端部にはヘラケズリが施される。255は丸瓦の玉縁部である。凸面は摩滅して調整不明である。凹面は縦位のナデが施される。側縁は側縁にヘラケズリを施している。256は凸面に横位のナデを施し、凹面には模骨痕と布目痕を残している平瓦である。凹面は一部ヘラで粘土をかきとっている。端部と端部に接する凹面に横位のヘラケズリを施している。258は、凸面は摩滅して調整不明であるが、凹面には布目痕を残す平瓦である。側縁と接する凹面に縦位のナデが施される。側縁はヘラケズリを施された後、凹面側、凸面側とも面取りが施される。これは焼成がやや甘く土師質で焼きあがっている。257, 259は両面とも摩滅して調整不明のものである。259はSD406から出土している。

第5節 土製品（図版28・45参照）

増堀（260）、礪の羽口（261）、管状土錐（262）、土馬（263）がある。

増堀（260）は口縁部の破片である。内面に鉛滓が付着し、また高熱により一部発泡している。残存する長さ5.5cm、幅6.2cm、高さ4.3cm。礪の羽口（261）は管部の破片である。残存する部位の外面一部に還元して青灰色を呈する部分がある。より先端に近い部分の破片であることがわかる。残存する長さ6.2cm、幅4.3cm、厚さ2.4cmで復元した管の直径は6.5cm、中央の穴の直径2.8cmである。261はS D231から出土。平城Ⅰ期からⅡ期のものである。

管状土錐（262）は瓦質の魚網錐である。約1/2の破片である。外面は継ぎのヘラミガキが施される。中央孔には製作時に棒を引き抜いた際の擦痕が残る。S D83から出土。中近世のものである。残存する最大径3.0cm、残存長3.0cm、中央孔の直径0.9cm、端部の直径1.8cm、残存する重量18gである。

土馬（263）は胴部と首部が残存する。粘土塊の一方の端を細長く引き伸ばして首を成形している。そしてその塊の部分に十字に切込みを入れて四脚を作り出している。背面にはナデにより凹みが作られており、簡略化された駒の表現と考えられる。残存する長さ9.1cm、幅6.2cm、高さ8.6cmで、胎土は砂粒を少量含む。焼成は良くにぶい橙色を呈している。近世の耕作土層から出土。小笠原分類の第Ⅱ段階E形式に相当すると考えられる。奈良時代中頃から後半のものである。

第6節 石製品（図版28・47下参照）

板状石製品（264）、台石（265）、砥石（266）、叩石（267）、擦痕を有する石器（268）がある。

板状石製品（264）は厚さ0.6cmの粘板岩製の板で両面ともよく研磨されている。端部はすべて欠損しており、本来どのような形態であったのか手掛かりがない。S D535から出土し、弥生時代後期のものである。石包丁の可能性も考えたが、弥生時代後期にはほぼ消滅していること、残存する大きさが石包丁にしてはやや大きすぎるるので、用途不明の板状石製品とした。

台石（265）は2面のみを残している破片である。平滑面とあわせた状敲打痕を残す面の2面を残す。石材は砂岩で、S D538から出土。

砥石（266）は完形でSK628から出土した。四角柱状の砥石で側面の四面を使用している。使用面には無数の線状痕が残っている。石材は泥質ホルンフェルスで、粒子が非常に細かい。仕上げ低であろう。飛鳥V期のものである。

叩石（267）は棒状礫の先端に敲打痕の面が形成される。折損しており、1/2の破片である。石材は砂岩である。出土地点はSK628直上の包含層であり、飛鳥時代の遺物である可能性がある。

擦痕を有する石器（268）は棒状礫の1側面に断面V字状の擦痕が集中している。反対の面では数条付いているのみである。端部は擦痕がある面で両端とも剥離ないしは折損している。擦痕から刃物を伴って使用された石器と考えられるが、具体的な使用法や用途についてはよくわからない。SK628から出土。飛鳥V期のものである。

第7節 銅銭（図版45参照）

銅銭（269）は1/2の破片で、文字は風化してよくわからない。SE10埋土より出土。

第8節 動物遺体（図版45参照）

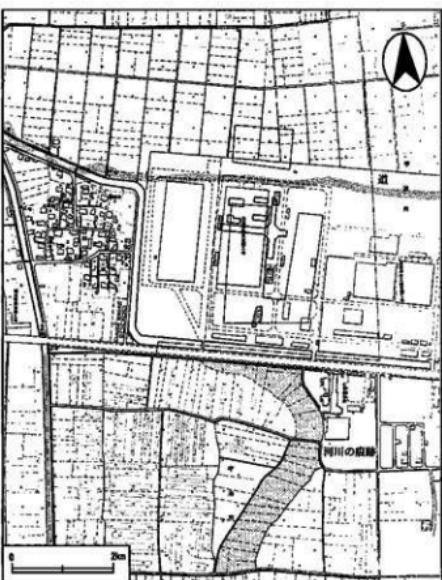
馬歯が2点（270・271）あり、いずれも小破片で詳細はわからない。また、これ以外にもSK628より動物骨の小破片が出土しているが、種類や部位については小さすぎてわからない。

註

- （註）出土遺物を分類するにあたって下記の文献を参考にしている。
- <弥生土器>森岡秀人『8 山城地域』（寺沢 真・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』（近畿編Ⅱ）所収、東京、平成2年）。
- <須恵器>田辺昭三『須恵器大成』（東京、昭和56年）。
- <飛鳥～平安時代土器類>
- 奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原京発掘調査報告書』Ⅱ（奈良、昭和53年）。
 - 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告書』Ⅷ（奈良、昭和51年）。
 - 古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』（京都、平成3年）。
 - 古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』（京都、平成4年）。
- <平安時代以降の土器類>
- 横田洋三『出土土器並編年試案』（財團法人古代學協會『平安京左京五条三坊十五町』所収、京都、昭和56年）。
 - 横田洋三『土器器皿（Bタイプ系）の器形、規格の変化と製作技術について』（財團法人古代學協會『押小路殿 平安京左京三条三坊十一町』所収、京都、昭和56年）。
 - 財團法人古代學協會・古代學研究所『平安京提要』（京都、平成5年）。
 - 小森俊寛・上村憲章『京都の都市道路から出土する土器の編年的研究』（財團法人京都市埋蔵文化財研究所編『研究紀要』3所収、京都、平成7年）。
- <瓦器類>高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』（高槻、昭和55年）。
- <瓦質土器羽釜>
- 菅原正明『畿内における土釜の製作と流通』（『文化財論叢』所収、京都、昭和58年）。
- <綠釉陶器>齋藤孝正『東海地方の施釉陶器生産』（『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東3 施釉陶器一』所収、京都、平成5年）。
- <輸入陶磁器>
- 横田賀太郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」（『九州歴史資料館研究論集』4所収、太宰府、昭和53年）。
- <土 瓦>小笠原好彦『土瓦考』（『物質文化』25掲載、東京、昭和50年）。

第5章 考察

第1節 林寺跡周辺の微地形（第32図参照）



第32図 林寺跡周辺の土地利用と微地形

園の部分を微高地とみなして考えることにする。今回の調査地は南北に伸びる畠地を分断するように設定されていることがわかる。そして遺跡はこの畠地の北部を中心に展開している。

また、水田地を低地、あるいは埋没河川の可能性のある地点とみなして検討すると、日産自動車工場南側に、南北に伸びる帯状の低地帯を認めることができよう。山田良三氏はこれを河川の痕跡とみなしている⁽⁴¹⁾。この河川は東方の宇治市広野の丘陵部に源を発し、蛇行しつつ西流する河川と考えている。そして林寺跡周辺では帯状の水田地に示されるように南から北に向かって流れ、大久保バイパスや日産学園のあたりを北流する。そして工場の敷地を超えた当たりで方向を西に変え、佐古集落の北端に向かう。そして佐古集落の北辺と西辺を巡るように再び向きを変え、佐山集落の西辺を南流する。このように蛇行しつつ西流する河川を想定して、それを古代の名木川に比定している。

この河川を想定した場合、林から佐古・佐山にかけての微高地は、蛇行する河川の自然堤防と理解することができる。林寺跡が立地する微高地は南北に細長くあるように見えるが、この河川の自然堤防ととらえるならば、北に向かうほど西に振れていく微高地になるであろう。また、この微高地の南部については調査地よりもさらに南に伸びることが予想される。流路の変更による分断がなければ、水田地に示される河川痕跡の地域まで延びることになろう。しかし、これはあくまで予想であって、このような微高地の範囲については地質調査を行った上

林寺跡は沖積低地の微高地上に立地する遺跡である。発掘成果をまとめるにあたっては立地条件をまとめておく必要がある。しかし、詳細な地理学的な地形調査は皆無であり、考察する上で大きな制約となっている。ここでは地形図等を利用して一定の見通しをまとめておきたい。特に遺跡が立地する微高地については、範囲に關していくらかの見通しを持つ必要がある。

現在の遺跡周辺の地形は戦中の京都飛行場建設に伴う大規模な土地改変を受けている。改変前の地形は地下に埋もれ、目にすることはできない。しかし、戦前の地形を示す地図があり、それは陸軍測量局が作成した二万分の一の地形図がある。それをもとに微高地について推測することは一応可能である。

第32図は昭和40年測量の久御山町全図(1/3000)に明治22年陸軍測量局作成の地形図(1/20000)より日産車体京都工場付近の道をトーンで、畠の区域を実線の範囲で示したものである。道は幅が広く、実体よりもやや広く示していたと思われる。また河川の痕跡もトーンで示している。そしてここでは集落、畠、果樹

で確定すべきである。

さて第2次・第3次調査の調査地についてみれば、西トレントの中央部と交差点、第3次調査地の南部が標高11mほどで、他の部分より10~20cmほど高く、地表面の高まりが認められる。西トレント中央部や交差点西端の場合、島畝が存在した地点で削平を免れたことにも起因するが、交差点中央や第3次調査地では、島畝はなく削平を受けているが、もともと高かったので削平の結果もわずかな高まりとして残っていると考えられる。

そして溝が密集する場所を見た場合、こうした高まりを避けるように形成されている。弥生時代から飛鳥時代の溝は北西~南東方向の溝である。平安時代以降、中近世の小溝は南北方向であるが、その分布する範囲は前代の溝が分布する範囲に重なるように形成されている。中近世の小溝群の場合、湿気ぬきの施設という見方があるが、こうした機能を想定すれば、小溝群の分布する範囲はまさに湿地帯、すなわち後背湿地であって、水が溜まりやすい場所であったと考えることができよう。

このように見えてくると調査地における微高地も溝の方向と同じく、北西~南東方向であろうと推測される。そして、この遺跡における溝は微高地を避けるように形成されており、後背湿地に間連付けて形成されたと考えることができる。もちろんいくつかの例外があるが、それは各時代の遺構の展開を考察する中で検討する。

第2節 林寺跡周辺の条里地割

林寺跡周辺を含む巨椋池南畔低地部は条里景観が比較的よく残っている地域でもある。林寺跡を考察する上で、条里地割との関係を整理しておくことは重要かつ基礎的な事項である。ここではこれまでの研究成果を応用して調査地が条里地割でどの位置に相当するか検討する。巨椋池南畔低地部の条里地割についてはこれまでに藤岡謙二郎氏、谷岡武雄氏、吉田敬市氏、竹原一彦氏、高橋美久仁氏の研究がある⁽²²⁾。各研究者によって若干の異同があるが、ここでは高橋氏の研究を利用して、これまでに確認された遺構を検討していくことにする。

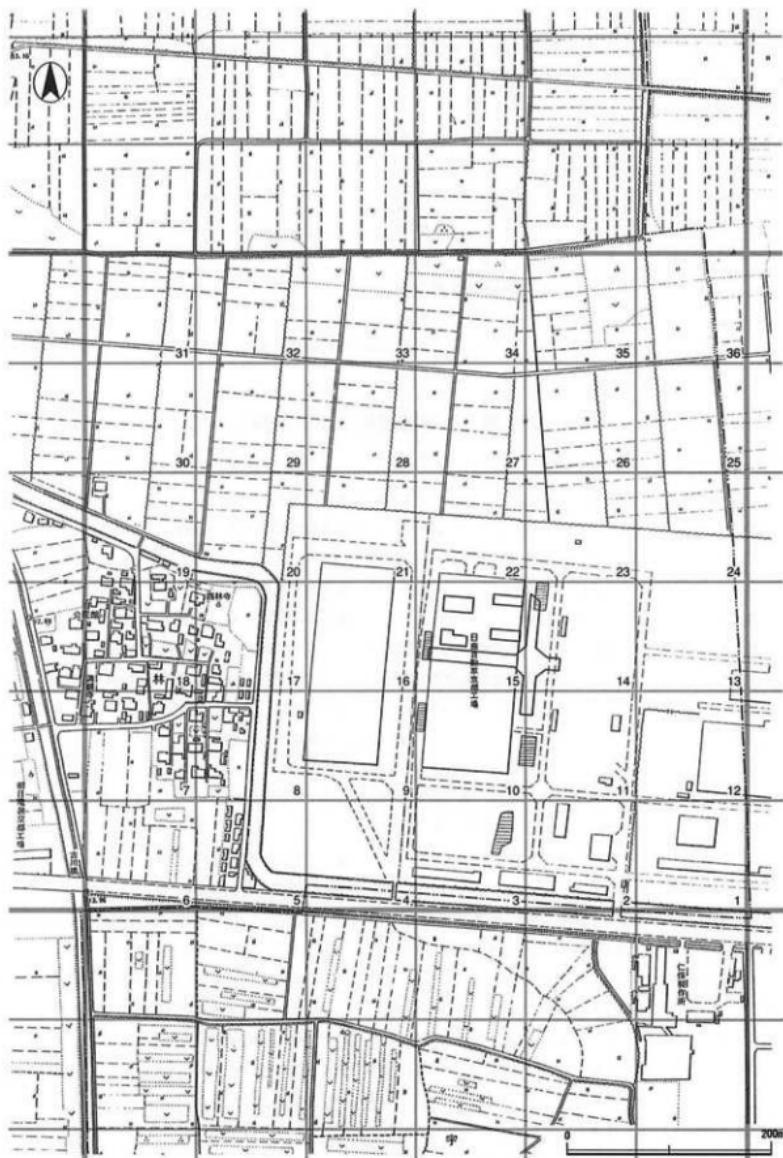
高橋氏の研究によれば、林寺跡を含む字高黒、そしてそれに隣接する字鉢ノ本、八幡講の地域は現在の宇治市と久御山町の境界線を東端と南端とする約650m四方を「桑本里」に比定している。これは字鉢ノ本を里号の遺称ととらえてのことである。久世郡条里の五条七里にあたる。そして調査地では第2次調査において道路遺構SF 1が検出されているが、これは坪境になってこよう。そして戦前の地図におけるこの付近に位置する東西道も坪境になってくると考えられる。これらを手掛かりに坪の推定をすれば十五坪にあたる。

第2次・第3次調査で検出された遺構で坪の地割に関わる遺構をあげると次のようになる。まず道路遺構SF 1は十五坪の東限を画する道である。また、第3次調査のSD587は十五坪の南限を画する溝となってこよう。そしてSD181とSD186は坪の南北の中間に位置する東西溝といえる。

しかし詳細に見れば、道路遺構SF 1は図上で復元される坪境よりも東に約10mずれている。これは復元の誤りかあるいは本来的なものであるか検討しなくてはならない。今回の調査地が位置すると考えられる十五坪の3つ離れた北の坪が桑本里三十四坪であるが、ここについては大慈寺文書の中に14世紀代の田地指図が残されている⁽²³⁾。それによれば三十四坪は一町一反の面積があり、九人の作人によって耕作されている。掲げられている図から1反が南北方向の短冊形に区画され、十一枚が東西に並んでいることがわかる。通常条里制の一坪は一町であり、三十四坪は1反分多い。そして添付されている図からそれは1反分の短冊形の区画が一枚多いことを意味する。この短冊形の区画は東西に並ぶことから東か西に一反分の区画一枚分張り出している、すなわち約10m、東か西に張り出していることになる。これはすなわち坪境が東か西に約10mずれていることを意味しよう。

このことは三十四坪と東限の坪境が一直線上につながる十五坪にも適応できるのではなかろうか。すなわちこの東に約10mずれた東の坪境を、発掘によって検出された道路遺構SF 1に比定することができよう。こう考えてみると、道路遺構のすれば復元の問題ではなく、本来にずれていた可能性を考えることができよう。

こうした可能性が成り立つとすれば、これは十五坪と三十四坪に限定される問題ではなく、南北に隣接する三



第33図 林寺跡周辺（桑本里）の条里地割と坪並の復元

坪、十坪、二十二坪、二十七坪も同様に東に張り出して一町一反の面積をもつことが言えることになってくるであろう。しかし、現在のところ遺跡の立地する里内の発掘は非常にわずかであり、今後の発掘調査の進展とその成果からさらに厳密に実証していく必要がある。また、道路遺構S F 1は古く通っても13世紀代までである。条里制施行当初、奈良・平安時代の状況はどうかは依然不明のままで、今後の課題である。今回まで調査で一応の見通しが持てる資料が発見できたことからこのように林寺跡周辺の条里地割について一応の成果をまとめてみた。今後の調査成果に期待したい。

第3節 林寺跡における遺構・遺物の変遷

これまでの調査において林寺跡で見つかった遺構・遺物を時期別に整理しておく。これまでに確認された時期は、縄文時代晚期、弥生時代中期、弥生時代後期、弥生時代終末期～古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代後半、飛鳥時代末～奈良時代、平安時代前期、平安時代後期～鎌倉時代がある。以下この順に検討を加える。

1) 縄文時代晚期

第1次調査第2トレンチで縄文晚期の土器が出土している。長原式の深鉢口縁部が出土している。遺構から出土したものであるが、出土遺構が縄文時代のものかどうかは確証がない。

2) 弥生時代中期

弥生時代中期前半の遺構は第3次調査の調査地で土坑を検出している。これは集落の縁辺部に当たると考えられ、集落の本体はさらに南の微高地にと考えられる。このほか同じ時期の土器片が第1次調査第1トレンチおよび第2トレンチで出土しており、これとは別に調査区北方に遺跡が広がる可能性がある。

3) 弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は第2次調査において方形周溝墓1基と溝を検出している。詳細な時期は後期後半である。方形周溝墓は微高地上に構築されている。微高地の方向と平行に位置しており、地形に制約を受けた形で構築されているといえる。溝についてSD70, SD200, SD201, SD264は後背湿地に掘られている。やや蛇行する溝で決して直線ではない。地形に合わせて掘削された溝といえる。また、SD535はこれらの溝とは直行する方向で掘られているが、これは微高地を分断する形で掘削されているといえる。これらの溝は特に水が流れた痕跡などはない。位置的には方形周溝墓と平行してそれを囲むように掘削されており、墓域を区画する区画溝としての性格が推測される。なお第1次調査では出土していないので、第2次調査の調査地よりも北には遺構は広がらないようである。

出土した弥生土器には方形周溝墓1に供獻された土器群がある。広口壺、直口壺、受口状口縁の壺、鉢、手焙形土器からなる後期後半の一括資料である。受口状口縁の壺、鉢、手焙形土器など近江地域の影響が指摘できるものもあるが、後期に至っても模描文を施される広口壺の存在や手焙形土器の底部は近江には平底であることなど、山城地域の地域性も指摘できる。

4) 弥生時代終末期～古墳時代前期

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺構には第2次調査のSD264上層溝がある。自然流路である。遺物は庄内甕と布留式の小型丸底壺の破片が第1次調査第1トレンチと第2次調査のSD5とSD538から出土している。この時期の遺跡は第1次調査の調査地を中心に分布しているようである。

5) 古墳時代後期～飛鳥時代後半

陶邑縦年のTK43型式から飛鳥IV期までの時期である。この時期の遺構は第1次調査第1トレンチのSK177、第2次調査の堅穴住居跡1基、溝、土坑がある。第1次調査のSK177は第2次調査のSD5, SD7, SD200上層溝、SD14, SD201上層溝の北東への延長線上に位置しており、関連する遺構と考えられる溝についてはこのほかに第2次調査でSD231, SD232, SD540, SD541とSD275上層溝、SD631がある。いずれも北西～南東

方向の溝、ないしはこれに直交する溝で、地形に沿った遺構の展開が認められる。またS K626・S K629はこの時期の廃棄に関わる遺構である。堅穴住居跡S H465もこの時期のものである可能性がある。これらの方向も正方位に近い。この時期も基本的に地形に沿って遺構が展開するが、性格によっては正方位の方向を持つものが現れる時期といえよう。

遺物は第1次調査の調査地では全体的に出土している。第2次調査の調査地においては、古墳時代後期の遺物は北トレーニング北部と西トレーニング西部に偏る。飛鳥時代の遺物は西トレーニングを中心に出土している。

6) 飛鳥時代末～奈良時代

飛鳥V期すなわち平城I期という時期から平城V期までである。第2次調査においては飛鳥V期=平城I期、すなわち飛鳥時代末の遺構にS K628がある。またS H465を切る土坑もこの時期のものである。また、律令制とともに条里割が施行された時期であり、条里地割に関わる遺構、すなわちS F1, S D68, SD538, SD1, SD181, SD186、第3次調査のSD587も、この時期の遺物は出土していないが、この時期に掘削ないしは構築された可能性が高い。

S K628とS H465を切る土坑では焼土の堆積層が見られた。土器焼成など生産と関係するのか、あるいは火災などと関連するのかは不明である。ここからは金属生産に関係する遺物が出土していないので、金属生産の可能性は考えにくい。しかし叩石や擦痕を有する石器、砥石などが出土しており、何かの生産を行っていた可能性は高い。西トレーニング西端のSD231及びその周囲からは埴輪や轍の羽口の破片といった鋳造関連遺物が出土しており、ここでは周辺に鋳造遺構が存在する可能性が高い。

S K628からは格子目タキ痕のある瓦が出土している。この時期以前の近い時期に格子目タキ痕の瓦がこの遺跡に持ち込まれたと考えられる。また、第1次調査第2トレーニングでは6681型式の平城宮式軒平瓦が出土している。これは奈良時代後半期のものである。楕円タキ痕のある瓦も出土しており、そのいくつかには模骨痕が認められる。奈良時代に持ち込まれたものと考えられるが、遺構からの出土はない。瓦についてみれば複数回この遺跡には持ち込まれていることがわかる。なお、これらの瓦を葺いたと考えられる建物跡は未検出である。持ちこまれた理由が建物に使用するためか、瓦を輸送する中継地であるためかは今のところ判断できない。しかしこのことは当該遺跡に、寺院の可能性も含め、何か特殊な施設があったことをうかがわせるものである。

他方、S K628からは動物骨の小片が出土している。土馬が1点出土しているが、この時期のものと考えられる。遺構外であるが馬歯が出土している。こうした状況はこの時期のこの遺跡では殺生が行われていた可能性を示唆するものである。それはいわゆる殺牛殺馬の儀礼もその可能性の1つである。こうした状況は林寺が寺院跡であるという説への反証となるものである。

7) 平安時代前期

平安時代前期の遺物は第1次調査の調査地、および第2次調査の北トレーニングから出土している。この時期の遺跡は第1次調査地を中心に第2次調査地の北トレーニングを含む範囲に分布しているといえる。出土した遺物は土師器、須恵器、綠釉陶器がある。第1次調査第1トレーニングからは陰刻花文を施した皿、第2次調査では壺や皿など東海産綠釉陶器が出土していることが特記されよう。

8) 平安時代後期～鎌倉時代

11世紀後半から13世紀にかけて再び遺構が活発に形成される。この時期の遺構には第2次調査建物跡1と櫛列SA2、井戸SE10・SE546・SE627、土器埋納遺構SX462、鳥糞跡SX1000、第3次調査櫛列SA01がある。また、条里地割に関わる遺構、第2次調査SF1, SD68, SD538, SD1, 第3次調査SD587も、この時期機能している。

遺構の展開を見れば、十五坪の東中央部に遺構が集中する。第2次調査建物跡1と櫛列SA2、井戸SE10・SE546・SE627、土器埋納遺構SX462はここに分布する。第3次調査櫛列SA01をこの居住域の南限を画するものと考えられる。また、北側については井戸SE10が最も北に位置する遺構である。この間の区域に居住域は

展開すると考えられる。ここは十五坪内でも微高地上で居住に適しており、かつ坪境の道に接して交通の便がよいため選地されたと考えられる。

第3次調査SD587からも土師皿がまとまって出土しており、付近に居住域の存在が推測できる。十五坪側では第3次調査においてその痕跡が見当たらなかった。この南側の十坪側は微高地上に当たり、こちらに居住域を推定するのがふさわしいと考えられる。あるいは第1次調査第2トレンチでは12世紀代の土師器、瓦器、白磁がまとまって出土した。遺構については掘り下げなかったので具体的にはわからないが、このあたりにこの時期の居住域を想定してもよいと考えられる。なお第1次調査第2トレンチから出土した瓦器は椿葉型であったが、第2次調査で出土した瓦器は大和型である。第2次調査資料は13世紀の資料も含み、時期差の可能性もあるが、出土地点が異なれば流通も異なることを示している可能性が指摘でき興味深い。

このような居住域が想定されるが、これはつまり坪内で居住域が点在する形となっている。いわゆる散村の形態である。平安時代後期に至ってこのような散村が出現するのは、やはりそれなりの生産力の向上や経済活動の活発化が背景として想定されるところである。しかし、その具体像についてはほとんどわかっていない。この点に関しては文献史料も踏まえつつ論ずるべきと考え、今後の課題としたい。

註

(註1) 山田良三「日本文化の源流を探る 考古の旅」5<近畿北部篇>（東京、昭和50年）。

(註2) 久世郡条里に関してこれまでに以下のような研究がある。

藤岡謙二郎・谷岡武雄「山城盆地南部景観の変遷」（『日本史研究』7掲載、京都、昭和23年）。

谷岡武雄「平野の開發」（東京、昭和51年）。

吉田敬市「巨椋池湖岸変遷考」（『日本史研究』7掲載、京都、昭和23年）。

鳥居治夫「山城国久世郡・羅喜郡・相楽郡における条里の考察」（昭和61年）。

竹原一彦「京都府久世郡久御山町域の条里型遺構について」（『京都府埋蔵文化財論集』4所収、向日、平成13年）。

高橋美久仁「第四章第四節 城陽の条里遺構」（『城陽市史』1所収、城陽、平成14年）。

(註3) 「大悲寺文書」4所収1575号文書および1581号文書

第6章 まとめ

今回の調査では弥生時代後期、弥生時代終末期～古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代、平安時代前期、平安時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物が確認された。中でも飛鳥時代末の遺物を豊富に含む土坑を発見し、当該期の実態を明らかにする資料を得た。それはこれまでに存在が唱えられてきた当該地における林寺の存否を議論する材料となってこよう。また、弥生時代後期の方形周溝墓1基を発見し、下層遺跡の実態を明らかにする資料を得た。今回の主要な調査成果は以下のようにまとめることができよう。

1) 弥生時代後期

弥生時代後期について後期後半の方形周溝墓1基と溝を検出している。方形周溝墓は微高地に微高地の方向と向きを合わせるように構築されている。溝は、微高地を分断する形で掘削されている溝1本と微高地の周辺を巡る形で掘削されている溝群があり、墓域を区画する区画溝としての性格が推測される。なお第1次調査では出土していないので、第2次調査の調査地よりあまり北には遺構は広がらないようである。

出土した弥生土器には、後期後半の良好な一括資料として方形周溝墓1基に供獻された土器群がある。広口壺、直口壺、受口状口縁の甕、鉢、手焙形土器からなる。受口状口縁の甕や鉢、手焙形土器など近江地域の影響が指摘できるものもあるが、文様や製作手法の一部には山城地域の地域性も指摘できる。

2) 古墳時代後期～飛鳥時代後半

堅穴住居跡1基、溝、土坑を発見した。溝はいずれも北西～南東方向の溝、ないしはこれに直交する溝で、地形に沿った遺構の展開が認められる。S K626・S K629はこの時期の廐棄に関わる遺構である。堅穴住居跡SH465もこの時期のものである可能性がある。この方向は正方位に近い。この時期も基本的には地形に沿って遺構が展開するが、性格によっては正方位の方向を持つものが現れる時期といえよう。

遺物について古墳時代後期の遺物は北トレンチ北部と西トレンチ西部に偏る。飛鳥時代の遺物は西トレンチを中心に出土している。

3) 飛鳥時代末～奈良時代

飛鳥V期＝平城I期の遺構にS K628がある。またSH465を切る土坑もこの時期のものである。また、条里制が施行された時期であり、条里地割に関わる遺構、すなわちS F1、S D68、S D538、S D1、S D181、S D186、第3次調査のSD587は、この時期の遺物を出土していないが、この時期に掘削なし構築された可能性が高い。そして条里制に則っていえば発掘調査地点は山城国久世郡条里五条七里桑本里十五坪に相当する。

S K628とSH465を切る土坑では叩石や擦痕を有する石器、砾石などが出土しており、何かの生産を行っていた可能性は高い。またSK628からは格子目タタキ痕のある瓦も出土している。この時期以前の近い時期に格子目タタキ痕の瓦がこの遺跡に持ち込まれたと考えられる。また、繩目タタキ痕のある瓦も出土しており、そのいくつかには横骨痕が認められる。奈良時代に持ち込まれたものと考えられるが、遺構からの出土はない。なお、これらの瓦を葺いたと考えられる建物跡は未検出である。持ち込まれた理由が建物に使用するためか、瓦を輸送する中継地であるためかは今のところ判断できない。しかし、古代において同一地点で、間隔をおいて複数回瓦が搬入される事実は重要である。寺院の可能性も含め何らかの特別な施設が存在した可能性が高い。なお西トレンチ西端のSD231からは埴輪や體の羽口の破片といった鋳造関連遺物が出土しており、周辺に鋳造遺構が存在する可能性、そしてこれも前述した特別な施設が存在する可能性を示唆するものである。

他方、SK628からは動物骨の小片が、遺構外から土馬と馬齒が出土している。この時期のこの遺跡では殺生や道教の儀礼が行われていた可能性を示すものであり、当該遺跡が寺院跡であるという説には否定材料となるものである。

4) 平安時代後期～鎌倉時代

11世紀後半から13世紀にかけての遺構については建物跡1棟と橋梁、井戸3基、土器埋納遺構、島畠跡が発見されている。また、条里地割に間わる遺構、第2次調査S F1、S D68、S D538、S D1、第3次調査S D587もこの時期に機能している。

遺構の展開を見れば、十五坪の東中央部に建物跡、井戸、土器埋納遺構など遺構が集中する。ここは十五坪内でも微高地上で居住に適しており、かつ坪境の道に接して交通の便がよいため選地されたと考えられる。しかし遺構や遺物の出土状況から十五坪内をすべて居住域であったとは考えにくい。坪内でも部分的に居住域が点在するに考えられ、それは散村的な状況と言えるだろう。

今回の調査にあたっては日産自動車株式会社、日産車体株式会社、株式会社フジタには大変お世話になりました。記して深甚の謝意を表します。また、今回の発掘調査ならびに整理作業では、次の関係各位には格別の御教示と御協力を賜りました。記して謝意を表します。

荒川 史・伊庭 功・岩松 保・植山 茂・内田真一郎・小笠原好彦・五艘雅孝・近藤 広・坂本博司・杉本 宏・大洞真白・浜中邦弘・引原茂治・野島 永・森岡秀人・森 正・渡辺 誠

京都府教育委員会・久御山町教育委員会・宇治市教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

summary

Hayashi Temple Site (林寺跡) is located in Kumiyama-cho (久御山町), Kyoto Prefecture. In this site there are also the settlements from Jomon, Yayoi to Kofun period in the underlying strata. The Japan Institute of Paleological studies executed the second excavation of this site from March 24 to June 30 in 2004. The followings are the abstracts of the principal results of the excavation.

1. Late Yayoi period

One square-shaped moated burial, some ditches and pits were unearthed. A square-shaped moated burial was constructed on the slightly uplifted land. Some ditches surrounded the uplifted land while other crosscut the land. This made us supposed that these ditches were limited the area of graveyard. Potteries excavated from the square-shaped moated burial yielded us a fine example of pottery assemblage of the latter half of the Late Yayoi period.

2. From the late Kofun to the second half of the Asuka period

One pit dwelling, some ditches and pits are excavated. Pit dwelling SH465 can be dated to this stage. This dwelling oriented to the north in accordance with the cardinal line. All the ditches oriented northwest to southeast or directed to the right angle to the orientation. These ditches were arranged according to the geography of area.

3. From the final Asuka period to Nara period

Pit SK628 belongs to this stage. As it was the period in which the allotment of land on grid system (条里) was realized by the ritsuryo (律令) administrative reform remains like road SF1, ditches of SD1, SD68, SD587 are supposed to be constructed in this stage although there is no artifacts dated in this stage. Although no remain of an ancient temple has been confirmed yet, roof-tiles made in the final years of the Asuka period in the Nara period. The fact that the ancient roof-tiles brought there several times at intervals leads us to think that some extraordinary facilities like temple must have located here. Since a hammer stone, a grinding stone and a stone with cutting marks were found in Pit SK628, some industrial activities might be executed there. Since the artifacts related to casting as a fragment of a crucible and a ventilation pipe of bellows were unearthed, a casting industrial site may located in the vicinity.

On the other hand, the fact that a fragment of animal bone found in Pit SK628 along with the teeth of horse and horse-shaped terracotta figurine unearthed out of the stratigraphical context are the negative data to the existence of ancient temple.

4. From the late Heian period to the Kamakura period

The Remains of a building, a fence, three wells, depot of unglazed plates and heaped-up fields were brought to light. Land division based on the allotment introduced in the former period was still carried on. Since the remains in this stage were concentrated on the uplifted land surrounded by the rice field grid, it is hard to think that the people resided with high density in the allotted land. A feature of a scattered village must have been the landscape of this time.

第1表 弥生土器・古式土師器観察表

*残存率は口縁の残存率を示している。ただし底部片の場合、底部の残存率を示している。
 **底部片の場合、口径の数値は「底径」と断っているように、底径の数値を入れている。
 ***括弧内の数値について口径では復元径、器高では残存高を示す。

番号	種類	出土 地点	遺物 番号	器種 (残 存部位)	口径 (cm)	残存率	器高 (cm)	内面調整	外面調整	胎土	色調 (内面/外 面/断 面)	焼成	備考
1	弥生 土器	SD341	34-3	壺口縁～ 底部	12.1	口縁完 存	24.7	上半：横位ナデ 下半：横位ハケ	横位・斜位ハケ の後、縦位ヘラ ミガキ	2～3mmの長石、1～ 2mmの石英、チャー トを含む	7.5YR2/1黒色/ 2.5Y7/3浅黄色/ 2.5Y7/3浅黄色	良好	体部上半に最大径が ある。やや肩が張る 形態で後期でもやや 古い形状を示す。
2	弥生 土器	SD341	29- 1, 32-6	壺口縁～ 体部上 半、底部	(17.4)	1/5	(21.0)	斜位・縦位ナデ	上半：斜位ハケ 下半：縦位タタ キ	2～3mmの長石、石英 を含む	2.5Y6/1黄灰色～ 2.5Y3/1黒褐色/ 2.5Y8/3浅黄色	良好	受口状口縁
3	弥生 土器	SD275	32-3	壺口縁部	(14.1)	1/8	(1.5)	横位ナデ	摩滅により調整 不明	1～2mmの長石、1mm の赤色斑紋を含む	10YR7/4にぶい黄褐色/ 10YR7/4にぶい黄褐色/ 10YR7/1灰白色	良好	受口状口縁
4	弥生 土器	SD275	32-1	鉢口縁～ 体部	(14.0)	1/3	(7.9)	斜位ハケ	斜位ハケ	2～3mmの長石、1～ 2mmの石英、チャー ト、赤色斑紋、雲母 を含む	2.5Y6/3にぶい黄色/ 2.5Y6/3にぶい黄色/ 2.5Y6/3にぶい黄色	良好	受口状口縁。受部に 2点1対の列点文、 頸部に7条1対の櫛 描直線文と列点文が 施される
5	弥生 土器	SD341	33-6	壺口縁～ 底部	16.1	口縁完 存	24.0	体部横位板ナ デ、底部縦位ハ ケ	縦位ヘラミガキ	1～3mmの長石、石 英、チャート、1mm 以下の雲母を含む	5Y6/1灰色～5Y2/1黒色/ 10YR6/3にぶい黄褐色 ～10YR3/3暗褐色/ 10YR6/3にぶい黄褐色～ 3/3暗褐色	良好	口縁は垂下口縁で擬 回線文と円形浮文 が、肩部には櫛描直 線文と櫛描波状文が 交互に3段施され
6	弥生 土器	SD341	33-1	壺底部	底径 7.7	底部完 存	(6.0)	縦位ハケ	縦位ハケ	1～2mmの長石、石 英、チャート、1mm 以下の雲母を含む	10YR6/6明黄褐色/ 10YR5/3にぶい黄褐色/ 10YR5/3にぶい黄褐色	良好	第IV様式に属する
7	弥生 土器	SD275	32-4	壺体部	—	—	(12.5)	斜位ハケ	斜位ハケ	2～3mmの長石、石英 を含む	10YR7/3にぶい黄褐色/ 10YR7/3にぶい黄褐色	良好	
8	弥生 土器	SD275	32-5	手培形土 器口縁～ 底部	16.8	口縁完 存	(15.4)	斜位ハケ	斜位ハケ	2～3mmの長石、石 英、赤色斑紋、1mm の雲母を含む	10YR7/2にぶい黄褐色/ 10YR7/2にぶい黄褐色/ 10YR7/1灰白色	良好	頸部の大半は欠失
9	弥生 土器	SD200	18-23	壺口縁部	(14.2)	1/8	(4.4)	斜位ナデ	縦位ヘラミガキ	2～5mmほどの長石、 石英を含む	10YR7/2にぶい黄褐色/ 10YR6/2灰黃褐色/ 10YR6/1灰黃褐色	良好	
10	弥生 土器	SD200	17-15	壺頸部	—	—	(3.3)	斜位ナデ	摩滅により調整 不明	1mm以下の長石、石 英を含む	10YR8/4淡黄褐色/ 2.5Y7/2灰黃褐色/ 5YR2/1オリーブ黒色	良好	

11	弥生土器	SD200	18-23	高坪口縁部	(20.1)	1/10	(2.9)	横位ナデ	摩滅により調整不明	2~3mmの長石、1~2mmの石英、チャート、0.1mmの雲母を含む	2.5Y7/2灰黄色/ 2.5Y7/2灰黄色/ 2.5Y7/2灰黄色	良好	
12	弥生土器	SD200	18-23	鉢口縁部	(19.0)	1/16	(2.0)	摩滅により調整不明	縦位ハケ	1mm以下の長石、雲母を含む	10YR5/3にぶい黄褐色/ 10YR5/2灰黄褐色/ 10YR5/3にぶい黄褐色	良好	
13	弥生土器	SD200	18-23	壺口縁部	(11.6)	1/8	(1.9)	横位ナデ	横位ナデ	1mm以下の長石、石英、チャートを含む	2.5Y6/3にぶい黄褐色/ 2.5Y3/1黒褐色/ 2.5Y6/3にぶい黄褐色	良好	ミニチュア土器
14	弥生土器	SD200	17-15	壺または壺底部	底径(5.0)	1/8	(3.3)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	2~3mmの長石、石英を含む	10YR3/1黒褐色/ 10YR8/3浅黄褐色/ 10YR8/3浅黄褐色	良好	
15	弥生土器	SD200	18-23	壺体部	—	—	(3.0)	斜位ハケ	斜位・縦位ハケ	1mm以下の雲母を含む	10YR5/3にぶい黄褐色/ 10YR5/4にぶい黄褐色/ 10YR5/4にぶい黄褐色	良好	7条1対の横描波状文と列点文が施される。
16	弥生土器	SD535	22-42	壺口縁部	(14.0)	1/10	(4.0)	横位ハケ	縦位ハケ	2mm以下の長石、石英、チャートを含む	7.5YR8/6淡黄褐色/ 5YR5/8明赤褐色/ 5YR5/8明赤褐色	良好	第II様式大和形堀
17	弥生土器	SD535	23-36	器台底部	底径(17.6)	1/5	(5.5)	横位ナデ	縦位ヘラミガキ	1mm以下の長石、石英、雲母を含む	2.5Y7/2灰黄色/ 2.5Y7/3にぶい黄色/ 2.5Y7/2灰黄色	良好	
18	弥生土器	SH465	36-16	壺底部	底径(16.0)	1/5	(7.0)	摩滅により調整不明	斜位ヘラミガキ	1mm以下の長石、石英、チャート、赤玉粒を含む	2.5Y7/2灰黄色/ 2.5Y2/1黒色/ 2.5Y5/1黄灰色	良好	
19	弥生土器	SD200	18-16	壺体部	—	—	(2.5)	横位ナデ	摩滅により調整不明	1mm以下の長石を含む	10YR6/1褐灰色/ 10YR7/1灰白色/ 10YR7/1灰白色	良好	3条以上の横描直線文と4条以上の横描波状文が施される。
20	弥生土器	SD264	19-44	壺体部	—	—	(4.0)	刺離により調整不明	ナデ	1mm以下の長石、石英を含む	10YR3/1黒褐色/ 10YR8/1灰白色/ 10YR8/1灰白色	良好	8条以上の横描直線文と列点文が施される。
21	弥生土器	SD264	20-1	壺口縁部	(14.2)	1/10	(2.8)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	1~2mmの長石、1mmの石英、雲母を含む	2.5Y4/2暗灰黄色/ 2.5Y4/2暗灰黄色/ 2.5Y8/1灰白色	良好	庄内甕
22	弥生土器	SD264	22-54	壺口縁部	(12.0)	1/8	(2.0)	摩滅により調整不明	横位ナデ	1mm以下の長石、石英、チャート、赤色斑粒、雲母を含む	2.5Y7/2灰黄色/ 10YR6/2灰黄褐色/ 10YR6/2灰黄褐色	良好	庄内甕か?
23	弥生土器	SD264	23-22	壺口縁部	(14.6)	1/8	(1.8)	横位ナデ	横位ナデ	1~2mmの長石、石英、チャートを含む	7.5YR8/2灰白色/ 7.5YR8/2灰白色/ 7.5YR8/2灰白色	良好	受口状口縁。受部に6条1対の列点文を施す。
24	弥生土器	SD264	23-24	壺口縁部	(14.6)	1/10	(2.5)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	1mm以下の赤色斑紋、雲母を含む	5YR5/6明赤褐色/ 5YR5/6明赤褐色/ 5YR5/6明赤褐色	良好	受口状口縁。受部に列点文、頸部に横描直線文が一部残存する。

25	土師器	SD264 22-54	壺体部	—	—	(3. 3)	摩滅により調整不明	横位ヘラミガキ	精良。砂粒をふくまない。	7. 5YR8/4淡黄橙色/ SYR6/2橙色/ SYR6/3橙色	良好	小型丸底壺
26	弥生土器	SD264 22-33	壺口縁部	—	—	(2. 4)	横位ナデ	縦回線文	精良。1mm以下の長石、石英をわずかに含む。	7. 5YR8/2灰白色/ 7. 5YR8/2灰白色/ 7. 5YR8/2灰白色	良好	
27	弥生土器	SD264 22-54	壺底部	底径 (6. 4)	1/5	(3. 6)	摩滅により調整不明	縦位タタキ	1~3mmの長石、石英を含む	10YR8/1灰白色/ 7. 5YR8/3淡黄橙色/ 10YR8/1灰白色	良好	第II様式大和形壺
28	弥生土器	SD540 19-36	高坏脚部	—	—	(5. 4)	横位・斜位ハケ	縦位ヘラミガキ	1~2mmの長石、石英、赤色斑粒、0. 1mの雲母を含む	5YR6/4にぶい橙色/ 2. 5Y6/6橙色/ 10YR8/4淡黄橙色	良好	中位に8条以上の沈線文、根部に5条以上の回線文
29	弥生土器	SH465 23-29	壺頸部	—	—	(4. 0)	横位ナデ	縦位ハケ	2mmほどの長石、石英、チャートを含む	5Y6/1灰色/ 2. 5Y4/1灰黄色/ 2. 5Y4/1黄灰色	良好	
30	弥生土器	SD1 7-45	壺口縁部	(18. 2)	(微小)	(5. 2)	横位ハケ	摩滅により調整不明	1~3mm以下の長石、石英、チャート、0. 1mの雲母を含む	10YR7/3にぶい黄橙色/ 10YR6/3にぶい黄橙色/ 10YR8/2淡黄橙色	良好	
31	弥生土器	SD70 23-47	壺頸部	—	—	(4. 7)	斜位ヘラケズリ	斜位タタキ	1mm以下の長石、石英、赤色斑粒、雲母を含む	10YR7/2にぶい黄橙色/ 10YR7/2にぶい黄橙色/ 10YR7/2にぶい黄橙色	良好	庄内壺か?
32	弥生土器	SD68 23-43	壺口縁部	(22. 2)	1/8	(4. 0)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	1~2mm以下の長石、石英、赤色斑粒を含む	10YR8/1灰白色/ 10YR8/1灰白色/ 10YR8/1灰白色	良好	
33	土師器	SD7 8-28	高坏脚部	—	—	(7. 4)	絞り痕	摩滅により調整不明	精良。1mm以下の長石、石英をわずかに含む。	5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
34	弥生土器	SD5 19-13	蓋つまみ部	—	—	(3. 3)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	1mmの長石、石英、0. 1mの赤色斑粒、雲母を含む	2. 5Y7/1灰白色/ 5YR7/2明褐色/ 10YR5/1泡灰色	良好	
35	弥生土器	SD68 22-25	壺口縁部	—	—	(4. 7)	ナデ	ナデ	1~2mm以下の長石、石英を含む	10YR7/2にぶい黄橙色/ 10YR7/2にぶい黄橙色/ 2. 5Y6/1黄灰色	良好	
36	弥生土器	SE10 31-36	有孔鉢底部	底径 (4. 4)	底部完存	(4. 3)	斜位ハケ	摩滅により調整不明	1~3mm以下の長石、石英、チャートを含む	2. 5Y8/2灰白色/ 2. 5YR8/2灰白色/ 7. 5Y2/1黒色	良好	
37	弥生土器	SH465 36-21	壺底部	底径 (5. 0)	底部完存	(4. 4)	摩滅により調整不明	横位ハケの後ナデ	2~3mmの長石、石英、チャート、1mmの雲母を含む	10YR8/3淡黄橙色/ 10YR8/4淡黄橙色/ 10YR8/4淡黄橙色	良好	

*残存率は口縁の残存率を示している。ただし底部片の場合、底部の残存率を示している。
**底部片の場合、口径の数値は「底径」と断っているように、底径の数値を入れている。

***括弧内の数値について口径では復元径、器高では残存高を示す。

番号	種類	出土 地点	遺物 番号	器種（残 存部位）	口径 (cm)	残存率	器高 (cm)	内面調整	外面調整	胎土	色調（内面/外 面/断 面）	焼成	備考
38	土師 器	SH465	23-29	皿A 口縁部	(15.1)	1/10	(1.6)	横位ナデ	横位ナデ	1mm以下の長石を含 む	5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
39	土師 器	SH465	24-6	皿A 口縁部	(16.4)	1/8	(3.4)	横位ナデ	上半：横位ナデ 下半：横位ヘラ ケズリ	精良。1mm以下の シャモットをわずかに 含む	7.5YR7/6橙色/ 7.5YR7/3にぶい 橙色/ 7.5YR7/3にぶい 橙色	良好	
40	土師 器	SH465	24-6	皿A 口縁部	(15.2)	1/8	(2.5)	摩滅により調整 不明	摩滅により調整 不明	精良。砂粒を含まな い。	2.5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
41	土師 器	SH465	29-37	皿A 口縁部	(17.8)	1/8	(2.6)	摩滅により調整 不明	横位ナデ	精良。1mm以下の赤 色斑粒をわずかに含 む	2.5YR6/6橙色/ 2.5YR6/6橙色/ 2.5YR6/6橙色	良好	
42	土師 器	SH465	27-44	杯口縁部	(21.0)	1/10	(2.8)	摩滅。斜放射状 暗文が残存す る。	横位ヘラミガキ	精良。砂粒を含まな い。	5YR7/6橙色/ 5YR7/6橙色/ 5YR7/6橙色	良好	
43	土師 器	SH465	24-6	杯口縁部	(21.0)	1/10	(4.0)	斜放射状二段暗 文	横位ヘラミガキ	精良。1mm以下のチ ャートをわずかに 含む	5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
44	土師 器	SH465	36-20	杯A 口縁部	(24.6)	1/8	(5.9)	摩滅。一段放射 暗文一部残存す る。	横位ヘラミガキ	精良。1mm以下のチ ャート、赤色斑粒 をわずかに含む	10YR7/4にぶい 橙色/ 10YR7/4にぶい 橙色/ 10YR7/4にぶい 橙色	良好	
45	土師 器	SH465	24-6	杯B蓋 口縁部	(20.6)	1/8	(1.8)	横位ナデ	横位ヘラミガキ	精良。砂粒を含まな い。	7.5YR7/4にぶい 橙色/ 7.5YR7/4にぶい 橙色/ 7.5YR7/4にぶい 橙色	良好	
46	土師 器	SH465	29-35	皿A 口縁部	(22.6)	1/8	(2.9)	横位ナデ	摩滅により調整 不明	1~2mmの長石、 チャート、赤色斑粒 を含む	10YR8/3浅黃橙色/ 10YR8/LB白色/ 10YR8/2淺黃橙色	良好	
47	土師 器	SH465	36-25	杯B底部	底径 (14.2)	1/6	(1.3)	摩滅により調整 不明	横位ナデ	1mm以下の長石、 チャートをわずかに 含む	7.5YR6/4にぶい 橙色/ 7.5YR6/4にぶい 橙色/ 7.5YR6/4にぶい 橙色	良好	
48	土師 器	SH465	36-11	杯B底部	底径 (13.2)	1/4	(2.3)	摩滅により調整 不明	摩滅により調整 不明	1mm以下の長石、赤 色斑粒を含む	5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
49	土師 器	SH465	29-2	壺把手	—	—	(4.5)	ナデ	ハケ	1~2mmの長石、 チャート、雲母を含 む	2.5Y7/3浅黃色/ 2.5Y7/3淺黃色/ 2.5Y7/3淺黃色	良好	

50	土師器	SH465	27-42	壺把手	—	—	(7.1)	ナデ	ハケ	2~3mmの長石、チャート、1~2mmの石英、赤色斑粒を含む	10YR8/1灰白色／10YR8/2灰白色／10YR8/2灰白色	良好	
51	土師器	SH465	23-29	壺把手	—	—	(5.5)	摩滅により調整不明	ハケ	3~4mmのチャート、1~2mmの長石、石英を含む	10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色	良好	
52	土師器	SH465	29-6	壺口縁部	(27.0)	1/10	(4.0)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	1mm以下の長石、石英、チャートを含む	SYR7/5橙色／SYR7/5橙色／SYR7/5橙色	良好	
53	土師器	SH465	37-1	壺口縁～体部	(16.8)	1/4	(12.0)	ナデ。ただし口縁部横位ハケ	上半：縦位ハケ 下半：斜位ハケ	2mm以下の長石、石英、チャートを含む	10YR6/2灰黄褐色／SYR6/6橙色／SYR6/6橙色	良好	
54	土師器	SH465	36-22	壺口縁～体部	(20.2)	1/8	(9.0)	斜位ハケ	縦位ハケ	精良。2mm以下の長石、石英、石英をわずかに含む。	7.5YR8/2灰白色／7.5YR8/6浅黄橙色／7.5YR8/6浅黄橙色	良好	
55	土師器	SH465	37-6	壺口縁～底部	(19.8)	1/2	18.2	ナデ	縦位ハケ	2mm以下の長石、石英、チャートを含む	5YR8/3浅黄橙色／7.5YR8/3浅黄橙色／7.5YR8/3浅黄橙色	良好	
56	土師器	SH465	29-2	壺口縁部	(11.6)	1/8	(3.9)	摩滅により調整不明	ナデ	1mm以下の長石、石英、雲母を含む	10YR8/3浅黄橙色／10YR7/3にぶい橙色／10YR7/3にぶい橙色	良好	
57	土師器	SH465	24-35	壺口縁～体部	(22.4)	1/8	(4.4)	摩滅により調整不明	縦位ハケ	1~2mmの長石、石英、赤色斑粒を含む	10YR8/2灰白色／10YR7/2にぶい黄褐色／10YR7/2にぶい黄褐色	良好	
58	土師器	SH465	24-6	壺口縁～体部	(25.0)	1/6	(10.0)	縦位ヘラケズリ	縦位ハケ	1mm以下の長石を含む	5YR6/6橙色／5YR6/6橙色／5YR6/6橙色	良好	
59	土師器	SH465	36-17	鍋口縁～体部	(29.2)	1/8	7.5	横位ハケ	摩滅により調整不明	1mm以下の長石を含む	10YR8/3浅黄橙色／10YR8/2灰白色／10YR8/2灰白色	良好	
60	須恵器	SH465	29-9	杯B蓋口縁部	(12.4)	1/8	(1.95)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	1mm以下の長石を含む	N5/0灰色／7.5YR6/1褐色／N5/0灰色	良好	
61	須恵器	SH465	36-45	杯A口縁部～底部	(12.3)	1/6	(3.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの長石をわずかに含む	N8/0灰白色／N8/0灰白色／N8/0灰白色	不良	
62	須恵器	SH465	24-7	杯A口縁部～底部	(12.4)	1/8	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの長石、石英を含む	N6/0灰色／N6/0灰色／N6/0灰色	良好	
63	須恵器	SH465	29-6	杯H口縁部～底部	(14.2)	1/6	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの長石、石英をわずかに含む	N7/0灰白色／N8/0灰白色／N8/0灰白色	良好	

64	須恵器	SH465	29-6	杯H口縁部～底部	(13.4)	1/8	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ。底 部に回転ヘラケ ズリ	1mm以下の長石、石 英、雲母を含む	2.5Y8/1灰白色/ N6/0灰色/ 2.5Y8/1灰白色	不良	
65	須恵器	SH465	36-36	杯B蓋 口縁部	(15.0)	2/5	(2.4)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	1mm以下の長石を含 む	N6/0灰色/ N7/0灰白色/ N7/0灰白色	良好	
66	須恵器	SH465	24-7	杯B蓋 口縁部	(15.8)	1/8	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含 む	N7/0灰白色/ N6/0灰色/ N7/0灰白色	良好	
67	須恵器	SH465	29-3	杯B蓋 口縁部	(17.3)	1/8	(1.2)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	1mm以下の長石、石 英、雲母を含む	N6/0灰色/ 58E/1青灰色/ N6/0灰色	良好	
68	須恵器	SH465	29-9	杯B蓋 口縁部	(17.6)	1/8	(2.05)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	1～2mmの長石、石英 をわずかに含む	5P7/1明紫灰 色/5P87/1明青灰 色/5P7/1明紫灰 色	良好	
69	須恵器	SH465	36-3	杯B蓋 口縁部	(19.2)	1/4	(2.3)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	1～5mmの長石、石英 をわずかに含む	N7/0灰白色/ N7/0灰白色/ 7.5Y8/2灰白色	良好	
70	須恵器	SH465	29-3	杯B 口縁部	(12.3)	1/8	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含 む	N8/0灰白色/ N6/0灰色/ N8/0灰白色	良好	
71	須恵器	SH465	36-43	杯B口縁 ～底部	(14.7)	1/3	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	1～3mmの長石をわ ずかに含む	7.5Y7/1灰白色/ N7/0灰白色/ 7.5Y7/1灰白色	良好	
72	須恵器	SH465	24-7	杯B底部	底径 (9.6)	1/6	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、輝 石、雲母を含む	N7/0灰白色/ N7/0灰白色/ N7/0灰白色	良好	
73	須恵器	SH465	24-36	鉢口縁部	(15.4)	1/12	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石をわ ずかに含む	N4/0灰色/ N5/0灰色/ N5/0灰色	良好	頸部下半にカキメ残 存
74	須恵器	SK629	27-43	甕口縁部	(31.4)	1/16	(5.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	2mm以下の長石、石 英、チャートを含む	N5/0灰色/ SYR6/1褐灰色/ SYR6/1褐灰色	良好	頸部は沈線で2段以 上区分した上で、そ の間を6条1対の櫛 捲波状文で埋める。
75	須恵器	SH465	36-26	甕口縁部	(36.6)	1/8	(6.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	0.5mm以下の長石を わずかに含む	N6/0灰色/ N6/0灰色/ N7/0灰白色	良好	頸部は沈線で2段以 上区分した上で、そ の間を6条1対の櫛 捲波状文で埋める。
76	須恵器	SH465	37-3	壺口縁～ 頸部	10.3	3/4	(12.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	1～3mmの長石、石英 を含む	N7/0灰白色/ N7/0灰白色/ N7/0灰白色	良好	頸部上位に沈線2 条、中位に沈線1条 が施される。
77	須恵器	SH465	36-28	壺口縁部	(22.4)	1/12	(9.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石、輝石 をわずかに含む	7.5Y6/1灰色/ 7.5Y6/1灰色/ 7.5Y6/1灰色	良好	頸部上半にカキメ残 存

78	須恵器	SH465	36-19	壺口縁部	(19.0)	1/4	(7.3)	同心円タタキ	平行タタキの後 カキメ	1~2mmの長石をわざ かに含む	5Y6/1灰色/ 7.5Y7/1灰白色/ 7.5Y7/1灰白色	良好	
79	須恵器	SH465	36-1	壺体部	—	—	(19.1)	同心円タタキ	平行タタキの後 カキメ	1mm以下の長石を含 む	5Y7/1灰白色/ 7.5Y7/1灰白色/ 5Y7/1灰白色	良好	
80	須恵器	SH465	36-34	壺体部	—	—	(9.1)	同心円タタキ	平行タタキの後 カキメ	1~2mmの長石、輝石 をわざかに含む	N6/0灰色/ 7.5Y5/1灰色/ 7.5Y7/2灰白色	良好	
81	須恵器	SH465	29-6	壺体部	—	—	(9.7)	同心円タタキ	平行タタキの後 カキメ	2mm以下の長石、1mm 以下の石英、角閃 石、雲母を含む	N6/0灰色/ N5/0灰色/ 7.5YR6/1褐色	良好	
82	土師器	SK628	30-1	杯A口縁 部～底部	(16.6)	1/3	5.4	ナデ	摩滅により調整 不明	精良。3mm以下の赤 色斑粒をわざかに含 む	5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
83	土師器	SK628	38-8	杯A口縁 部～底部	19.2	1/2	5.4	斜放射状二段暗 文	横位ヘラミガ キ。底部へラケ ズリ	精良。3mm以下の赤 色斑粒をわざかに含 む	5YR7/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
84	土師器	SK628	30-1	杯A口縁 部	(19.2)	1/6	(4.3)	摩滅により調整 不明	摩滅により調整 不明	精良。1mm以下の赤 色斑粒をわざかに含 む	2.5YR6/6橙色/ 2.5YR6/6橙色/ 2.5YR6/6橙色	良好	
85	土師器	SK628	38-20	杯A口縁 部～底部	(19.4)	1/3	(4.9)	摩滅により調整 不明	横位ヘラミガ キ。底部へラケ ズリ	精良。砂粒を含まな い。	5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
86	土師器	SK628	30-1	杯A口縁 部	(23.8)	1/10	(4.6)	横位ハケの後、 紙位ナデ	斜位ハケ	精良。1~2mmの赤色 斑粒をわざかに含む	10YR8/1灰白色/ 5YR7/3にぶい橙色/ 5YR7/3にぶい橙色	良好	
87	土師器	SK628	30-1	杯B底部	底径 (12.2)	1/8	(8.0)	ナデ	ナデ	精良。1~2mmの赤色 斑粒をわざかに含む	5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
88	土師器	SK628	30-1	杯C口縁部	(11.2)	1/7	(3.5)	摩滅により調整 不明	ナデ	精良。1~2mmの赤色 斑粒をわざかに含む	5YR7/6橙色/ 5YR7/6橙色/ 5YR7/6橙色	良好	
89	土師器	SK628	30-1	杯C口縁部	(11.4)	1/8	(2.2)	ナデ	ナデ	精良。砂粒を含まな い。	5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	
90	土師器	SK628	30-1	杯C口縁 ～底部	(14.6)	2/5	3.2	摩滅。一段放射 暗文一部残存す る。	ナデ	精良。1~2mmの赤色 斑粒をわざかに含む	10YR8/3浅黄橙色/ 5YR6/6橙色/ 5YR6/6橙色	良好	底部に指頭圧痕顯著
91	土師器	SK628	38-13	皿A口縁 ～底部	(18.8)	1/3	(3.5)	摩滅。一段放射 暗文一部残存す る。	ナデ	1mm以下の長石、赤 色斑粒を含む	7.5YR7/3にぶい橙色/ 2.5YR6/8橙色/ 2.5YR6/8橙色	良好	

92	土師器	SK628	38-1	皿A口縁部	(23.0)	1/8	(3.0)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	精良。1mm以下の長石をわずかに含む。	SYR7/6橙色／SYR7/6橙色／SYR7/6橙色	良好	
93	須恵器	SK628	30-2	杯A口縁部～底部	(11.0)	1/6	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石、輝石を含む	N6/0灰色／2.5Y8/1灰色／N6/0灰色	良好	
94	須恵器	SK628	30-2	杯A口縁部～底部	(12.8)	1/8	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの石英を含む	SY8/1灰白色／2.5Y8/1灰白色／SY8/1灰白色	良好	
95	須恵器	SK628	30-2	杯A口縁部～底部	11.6	3/4	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	1mmの長石を含む	N6/0灰色／N8/0灰白色／N8/0灰白色	不良	
96	須恵器	SK628	30-2	杯A口縁部～底部	(12.8)	1/8	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石、輝石を含む	SY8/1灰白色／2.5Y8/1灰白色／SY8/1灰白色	良好	
97	須恵器	SK628	30-2	杯B蓋 口縁～天井部	(15.4)	1/12	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	2mmの長石を含む	7.5Y6/1灰色／N6/0灰色／7.5Y6/1灰色	良好	天井部1/3残存
98	須恵器	SK628	30-2	杯B蓋 口縁～天井部	16.1	1/2	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英を含む	SY8/1灰白色／10Y7/1灰白色／SY8/1灰白色	不良	
99	須恵器	SK628	30-2	杯B蓋 口縁～天井部	17.6	1/2	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石、石英、輝石を含む	N5/0灰色／N6/0灰色／N6/0灰色	良好	
100	須恵器	SK628	30-2	杯B蓋 口縁部	(17.1)	1/6	(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英を含む	N5/0灰色／N4/0灰色／N4/0灰色	良好	
101	須恵器	SK628	30-2	杯B口縁～底部	13.5	5/8	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石、石英、輝石を含む	N6/0灰色／N4/0灰色／N6/0灰色	良好	
102	須恵器	SK628	30-2	杯B口縁～底部	15.0	3/4	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	1mmの長石、輝石を含む	5B6/1青灰色／5B6/1青灰色／7.5Y6/1灰色	良好	
103	須恵器	SK628	30-2	杯B底部	底径(11.2)	1/8	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石、石英を含む	N7/0灰白色／SY7/1灰白色／N7/0灰白色	良好	
104	土師器	SK628	30-1	瓶口縁部	(19.4)	1/10	(4.4)	横位ハケの後、ナデ	斜位ハケの後、ナデ	2～3mmの長石、1～2mmの輝石、雲母を含む	10YR6/2灰褐色／2.5YR7/2灰黄色／2.5YR7/2灰黄色	良好	
105	土師器	SK628	31-1	甕口縁部	(20.8)	1/12	(6.0)	横位ハケ	縦位ハケ	1～2mmの長石、石英、チャート、0.1mmの赤色斑粒、雲母を含む	7.5YR5/2灰褐色／7.5YR5/1褐色／7.5YR6/1褐色	良好	

106	土師器	SK628	38-8	甕口縁部	(22.0)	1/6	(7.2)	斜位ハケ	縱位ハケ	1~2mmの雲母、角閃石、1mmの赤色斑粒、輝石を含む	10YR7/2にぶい黄橙色／10YR7/3にぶい黄橙色／10YR7/3にぶい黄橙色	良好	
107	土師器	SK628	30-1	甕口縁部	(24.6)	1/10	(3.3)	摩滅により調整不明	縱位ハケ	1~2mmの長石、石英、チャートを含む	2.5Y8/1灰白色／2.5Y8/1灰白色／2.5Y8/1灰白色	良好	
108	土師器	SK628	31-1	甕口縁部	(22.2)	1/10	(5.3)	ナデ	縱位ハケ	1~2mmの長石、石英、チャート、1mmの赤色斑粒を含む	10YR8/1灰白色／10YR8/1灰白色／10YR8/1灰白色	良好	
109	土師器	SK628	30-10	甕口縁部	(25.0)	1/8	(4.2)	摩滅により調整不明	縱位ハケ	1~2mmの長石、石英、チャートを含む	10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色／	良好	
110	土師器	SK628	30-1	甕口縁部	(26.2)	1/10	(5.2)	ナデ	縱位ハケ	2~3mmの長石、石英、チャートを含む	10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色／	良好	
111	土師器	SK628	31-1	甕口縁部	(30.0)	1/12	(5.0)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	1~3mmの長石、石英、雲母を含む	7.5YR6/2灰褐色／7.5YR7/3にぶい橙色／10YR8/2灰白色	良好	
112	土師器	SK628	30-1	羽釜口縁部	(25.8)	1/4	(6.5)	横位ハケ	横位ナデ	2~3mmの長石、チャート、1mmの石英、雲母を含む	5YR5/6明赤褐色／5YR5/6明赤褐色／5YR5/6明赤褐色	良好	
113	土師器	SK628	30-1	蓋口縁～体部	(6.4)	1/4	(3.9)	横位ナデ	横位ナデ	1~2mmのチャート、赤色斑粒を含む	5YR6/4にぶい橙色／5YR6/4にぶい橙色／5YR6/4にぶい橙色	良好	
114	須恵器	SK628	30-2	鉢底部	底径10.0	底部完存	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ。底部に回転ヘラケズリ	1~4mmの長石、石英を含む	N7/0灰白色／N7/0灰白色／N7/0灰白色	良好	すり鉢
115	須恵器	SK628	32-2	蓋体～底部	胴径9.05	底部完存	(10.0)	ナデ	回転ヘラケズリ	1~2mmの長石を含む	N4/0灰色／N5/0灰色／10YR5/1褐灰色	良好	胴部に沈線2条巡る。底部中位に孔1個あり。
116	須恵器	SK628	30-2	蓋頸部	—	—	(4.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の石英をわずかに含む	2.5Y5/1黄灰色／7.5Y4/1灰色／2.5Y7/1灰白色	良好	頸部上半に5条1対の波状文が施される。
117	須恵器	SK628	30-2	鉢口縁～体部	(35.0)	1/5	(9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の輝石を含む	N6/0灰色／5Y6/1灰色／5Y7/1灰白色	良好	鉢形鉢
118	須恵器	SK628	38-6	甕口縁部	(21.8)	1/8	(10.0)	同心円タタキ	格子タタキ	1~2mmの長石、石英、輝石、雲母を含む	7.5Y8/1灰白色／N8/0灰白色／N8/0灰白色	良好	
119	土師器	SK628	31-1	盤口縁部	(38.4)	1/9	(4.0)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	1~2mmの長石、石英、チャート、赤色斑粒、1mmの雲母を含む	10YR7/2にぶい黄橙色／7.5YR8/2灰白色／7.5YR8/2灰白色	良好	

120	土師器	SK626	39-4	鍋口縁～体部	(33.6)	1/6	(8.8)	摩滅により調整不明	摩滅。ナデ一部残存。	1～2mmの長石、石英、赤色斑粒、1mmの雲母を含む。	7.5YR5/2灰褐色／10YR6/1褐灰色／10YR5/4赤褐色	良好	
121	須恵器	SK626	39-5	杯H蓋 口縁部	(12.9)	1/8	(3.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、輝石をわずかに含む	N8/0灰白色／N6/0灰色／N8/0灰白色	良好	
122	須恵器	SD5	17-14	杯H蓋 口縁部	(10.9)	1/12	(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石をわずかに含む	5Y7/1灰白色／5Y8/1灰白色／5Y8/1灰白色	不良	
123	須恵器	SD5	9-34	杯H蓋 口縁部	(12.4)	1/8	(2.45)	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石をわずかに含む	N6/0灰色／SP86/1青灰色／N6/0灰色	良好	
124	須恵器	SD5	17-14	杯H蓋 口縁～天井部	(14.0)	1/5	(3.65)	ロクロナデ	ロクロナデ。天井部へラキリ	1～2mmの長石、石英をわずかに含む	N6/0灰色／N6/0灰色／N6/0灰色	良好	
125	須恵器	SD5	10-4	杯H 口縁部	(13.0)	1/8	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、輝石をわずかに含む	N6/0灰色／N6/0灰色／2.5YR6/2灰褐色	良好	
126	須恵器	SD5	17-14	杯G 口縁部	(12.4)	1/8	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英をわずかに含む	N6/0灰色／SB6/1青灰色／SP6/1紫灰色	良好	
127	須恵器	SD5	17-14	高杯杯脚部 口縁部	(10.6)	1/12	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英をわずかに含む	7.5Y5/1灰色／7.5Y5/1灰色／7.5Y5/1灰色	良好	
128	須恵器	SD5	9-34	高杯脚部	—	—	(6.4)	ナデ	カキメ	1mm以下の長石、輝石、雲母をわずかに含む	N6/0灰色／SP86/1青灰色／N6/0灰色	良好	透孔一部残存
129	須恵器	SD5	16-26	平瓶 口縁部	(8.1)	1/12	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	1～2mmの長石、石英をわずかに含む	N8/0灰白色／N7/0灰白色／2.5G7/1明オリーブ灰	良好	
130	須恵器	SD5	10-4	壺口縁部	(9.8)	1/8	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石をわずかに含む	N5/0灰色／N5/0灰色／N5/0灰色	良好	
131	須恵器	SD5	9-34	壺口縁～体部	(14.7)	1/8	(4.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英をわずかに含む	5PB5/1青灰色／N6/0灰色／SP85/1青灰色	良好	
132	須恵器	SD5	17-13	壺口縁部	(14.6)	1/8	(4.8)	摩滅。同心円タグキ一部残存。	摩滅。平行タグキ一部残存。	1mm以下の長石、石英、チャートを含む	2.5Y7/1灰白色／2.5YR7/4淡赤褐色／10YR6/2灰黃褐色	不良	
133	須恵器	SD5	17-14	鉢口縁部	(15.0)	1/12	(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英、輝石をわずかに含む	5Y8/1灰白色／N6/0灰色／5Y8/1灰白色	不良	すり鉢

134	須恵器	SD5	9-34	鉢口縁部	(14.3)	1/8	(6.5)	ロクロナデ	ロクロナデの後 カキメ	1mm以下の長石をわ ずかに含む	2.5Y7/1灰白色／ N5/0灰色／ N8/0灰白色	良好	すり鉢。頭部中位に 沈線2条が施され る。
135	土師器	SD5	7-33	甕口縁部	(21.0)	1/10	(3.7)	横位ナデ	横位ナデ	1~2mmのチャート、 1mmの長石、輝石を 含む	10YR7/3にぶい黄橙色／ 10YR7/3にぶい黄橙色／ 10YR7/3にぶい黄橙色	良好	
136	須恵器	SD7	26-16	杯H蓋 口縁部	(11.5)	1/12	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、雲 母をわずかに含む	N4/0灰色／ 7.5Y5/1灰白色／ 7.5Y5/1灰白色	良好	
137	須恵器	SD7	15-4	杯H蓋 口縁部	(12.8)	1/8	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、雲 母をわずかに含む	5Y7/1灰白色／ 5Y7/1灰白色／ 5Y7/1灰白色	良好	
138	須恵器	SD7	13-26	杯H完形	9.6	完存	3.75	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の輝石をわ ずかに含む	5Y7/1灰白色／ 7.5Y7/1灰白色／ 5Y6/1灰白色	良好	
139	須恵器	SD7	3-53	杯H 口縁部	(11.4)	1/6	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含 む	10YR6/3にぶい黄橙色／ 7.5YR6/3にぶい褐色／ 7.5YR7/3にぶい橙色	不良	
140	須恵器	SD7	3-53	杯H 口縁部	(13.0)	1/6	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	精良。砂粒を含まな い。	N5/0灰色／ N5/0灰色／ 5Y7/1灰白色	良好	
141	須恵器	SD7	3-53	提瓶 口縁部	(5.2)	1/12	(4.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの石英を含む	5PB6/1青灰色／ 5PB6/1青灰色／ 5PB6/1青灰色	良好	
142	須恵器	SD7	22-21	平瓶 口縁部	(8.8)	1/6	(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石をわ ずかに含む	N7/0灰白色／ N7/0灰白色／ N7/0灰白色	良好	頭部に沈線1条が施 される。
143	須恵器	SD7	3-53	杯G 口縁部	(13.0)	1/6	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含 む	5Y6/1灰色／ N7/0灰白色／ 5Y6/1灰色	良好	
144	須恵器	SD7	3-53	高杯脚部	—	—	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の輝石をわ ずかに含む	5Y6/1灰色／ N6/0灰色／ 5Y7/1灰白色	良好	
145	須恵器	SD7	7-57	壺口縁部	(14.0)	1/8	(0.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の石英をわ ずかに含む	2.5Y5/1灰色／ 5Y6/1灰色／ 5Y6/1灰色	良好	
146	須恵器	SD7	15-4	甕口縁部	(23.0)	1/12	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~3mmの長石を含む	N6/0灰色／ N6/0灰色／ N6/0灰色	良好	
147	須恵器	SD231 1層	10-26	杯G蓋 口縁部	(10.0)	1/10	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の石英を含 む	7.5Y5/1灰色／ 2.5Y6/1灰色／ 7.5Y6/1灰色	良好	

148	須恵器	SD231 1層	10-26	杯B底部	底径 (8.0)	1/8	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英を含む	7.5Y6/1灰色/ 7.5V6/1灰色/ 10Y7/1灰白色	良好	
149	須恵器	SD231 1層	10-26	杯B底部	底径 (8.8)	1/7	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含む	7.5V6/1灰色/ 7.5V6/1灰色/ 7.5T7/1灰白色	良好	
150	須恵器	SD231 1層	10-26	壺口縁部	(19.2)	1/6	(5.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英を含む	5V6/1灰色/ 5Y7/1灰白色/ 5Y8/1灰白色	良好	
151	須恵器	SD231 1層	29-33	壺底部	底径 (13.6)	1/3	(4.5)	ロクロナデ	ロクロナデの後、回転ヘラケズリ	1~2mmの長石、石英、雲母を含む	7.5R5/1赤灰色/ 5R5/1赤灰色/ 2.5YR5/1赤灰色	良好	
152	土師器	SD231 1層	10-25	壺口縁部	(29.2)	1/12	(3.6)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	1~2mmの長石、石英、赤色斑粒、雲母を含む	5Y7/4にぶい橙色/ 10YR7/2にぶい黄橙色/ 2.5YR7/3淡赤橙色	良好	
153	土師器	SD231 1層	10-25	高杯脚部	—	—	(5.4)	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	精良。1mm以下の長石、石英、赤色斑粒、雲母をわずかに含む	2.5YR6/8橙色/ 10YR5/2灰黃褐色	良好	
154	須恵器	SD231 2層	10-28	杯A 口縁部	(10.6)	1/12	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、輝石を含む	5Y6/1灰色/ 5Y5/1灰色/ N8/0灰白色	良好	
155	須恵器	SD231 2層	10-28	杯B 口縁部	(26.6)	1/8	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデの後、天井部を回転ヘラケズリ	1mm以下の長石、輝石、雲母を含む	2.5GY8/1灰白色/ 7.5Y8/1灰白色/ 7.5V8/1灰白色	良好	
156	製塙土器	SD231 2層	10-30	製塙土器 口縁部	(18.4)	1/8	(8.5)	縦位ハケ	ユビオサエ	1~3mmのチャート、1mmの長石を含む	7.5Y8/2灰白色/ 7.5V8/2灰白色/ 5Y4/1灰色	良好	
157	須恵器	SD232	19-4	壺体部	—	—	(5.4)	同心円タタキ	平行タタキの後カキメ	1mm以下の長石、輝石、雲母を含む	N6/0灰色/ 5PB6/1青灰色/ 10R6/2灰赤色	良好	
158	須恵器	SD232	20-57	壺体部	—	—	(9.5)	同心円タタキ	平行タタキの後カキメ	1mm以下の長石をわずかに含む	N6/0灰色/ N6/0灰色/ 2.5GY6/1オリーブ灰色	良好	
159	須恵器	SD232	19-4	壺頸部	—	—	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、雲母を含む	5V8/1灰白色/ 5Y7/1灰白色/ 5Y8/1灰白色	良好	
160	土師器	SD232	18-30	杯C 口縁～底部	(18.8)	1/12	5.0	一段放射暗文	横位ヘラミガキ。底部ヘラケズリ	精良。1mm以下の長石、石英、赤色斑粒、雲母をわずかに含む	2.5YR6/6橙色/ 2.5YR6/8橙色/ 2.5YR7/4淡橙色	良好	

161	須恵器	SD251	14-27	壺口縁～頸部	(32.2)	1/12	(13.1)	ロクロナデ	口縁部ロクロナデ、頸部縦位ハケ	1～3mmの長石、石英を含む	5Y5/1灰色／2.6Y5/1灰黄色／N4/0灰色	良好	口縁部にはヘラによる刻みが、頸部には二条組の沈線が3本施される。
162	須恵器	SD251	13-28	杯B 壺口縁部	(11.0)	1/8	(1.2)	ロクロナデ	ロクロナデ。天井部の一部を回転ヘラケズリ	1mm以下の長石、石英を含む	N6/0灰色／N7/0灰白色／5Y7/1灰白色	良好	
163	須恵器	SD252	20-70	高杯脚部 底部	底径(12.9)	1/8	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英を含む	N5/0灰色／N7/0灰白色／N7/0灰白色	良好	
164	土師器	SD252	20-46	高杯脚部	底径10.6	底部完存	(4.9)	ユビオサエ	摩滅により調整不明	精良。1mm以下の長石、石英、赤色斑粒をわずかに含む	2.5YR6/6橙色／5YR6/4にぶい橙色／2.5YR5/6明赤褐色	良好	
165	土師器	SD252	20-58	斐把手	—	—	(3.2)	ナデ	ナデ	1～2mmの長石、石英、赤色斑粒を含む	10YR2/1黒色／5YR7/3にぶい橙色／5YR8/1灰白色	良好	
166	須恵器	SD252	20-64	杯A口縁部～底部	11.6	4/5	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	1～3mmの長石、石英を含む	N7/0灰白色／N6/0灰色／N7/0灰白色	良好	
167	須恵器	SD252	17-16	杯A口縁部～底部	(12.2)	1/3	(2.05)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含む	N7/0灰白色／N7/0灰白色／N7/0灰白色	良好	
168	須恵器	SD252	14-17	杯A口縁部～底部	(13.8)	1/8	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含む	5B6/1青灰色／5B6/1青灰色／5B6/1青灰色	良好	
169	須恵器	SD252	20-69	杯B 壺口縁部	(7.65)	1/6	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	2mm以下の長石、石英、輝石を含む	N8/0灰白色／N7/0灰白色／N7/0灰白色	良好	
170	須恵器	SD252	14-16	杯B 壺口縁部	(19.8)	1/3	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ。天井部の一部を回転ヘラケズリ	2mm以下の長石、雲母、輝石を含む	N7/0灰白色／N7/0灰白色／N6/0灰色	良好	
171	須恵器	SD252	20-55	杯B 底部	底径(9.2)	1/6	(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、石英を含む	N7/0灰白色／5B6/1青灰色／N7/0灰白色	良好	
172	須恵器	SD252	17-17	杯B口縁～底部	(15.4)	1/12	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含む	N7/0灰白色／N6/0灰色／N7/0灰白色	良好	
173	須恵器	SD252	14-21	平瓶口縁部	(9.0)	1/4	(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含む	N6/0灰色／N5/0灰色／2.5Y7/1灰白色	良好	
174	須恵器	SD252	19-49	鉢口縁部	(24.6)	1/16	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、雲母を含む	N6/0灰色／N6/0灰色／N6/0灰色	良好	

175	須恵器	SD252	14-23	壺口縁部	(27.6)	1/20	(5.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、雲母を含む	5Y6/1灰色／N6/0灰色／5Y6/1灰色	良好	
176	土師器	SD50	5-24	杯A充形	18.8	一部欠	5.1	摩滅により調整不明	摩滅により調整不明	精良。1~2mmの長石、赤色斑粒をわずかに含む	2.5YR6/6橙色／7.5YR6/6橙色／7.5YR6/2灰褐色	良好	
177	土師器	SD50	19-39	皿A口縁部	(21.0)	1/10	(2.2)	摩滅。一段放射暗文一部残存。	摩滅。下半にヘラケズリ一部残存。	精良。1~2mmの長石をわずかに含む	5YR6/6橙色／5YR6/6橙色／5YR6/6橙色	良好	
178	土師器	SD50	14-36	壺口縁部	(7.0)	1/12	(1.5)	横位ハケ	横位ナデ	2~3mmの長石、チャート、1mmの石英を含む	10YR8/2灰白色／10YR8/2灰白色／10YR8/2灰白色	良好	
179	須恵器	SD50	14-38	高杯完形	9.5	完存	7.3	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石をわずかに含む	N4/0灰色／N3/0暗灰色／-	良好	
180	須恵器	SD50	6-4	杯G蓋口縁～天井部	11.4	3/4	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の石英をわずかに含む	N7/0灰白色／7.5Y7/1灰白色／7.5Y7/1灰白色	良好	
181	須恵器	SD50	14-29	長颈壺肩部	—	—	(2.2)	ロクロナデ	摩滅により調整不明	1mmの長石、石英を含む	N5/0灰色／N7/0灰白色／10R5/1赤灰色	良好	
182	土師器	SD541	32-16	杯C口縁～底部	(13.0)	3/5	2.8	一段放射暗文	横位ナデ	精良。1mmの長石をわずかに含む	5R5/8明赤褐色／5R5/8明赤褐色／5R5/8明赤褐色	良好	
183	土師器	SD541	32-11	壺口縁～体部	(10.4)	1/5	(6.4)	斜位ヘラケズリ	縦位ハケ	1~2mmの長石、石英、赤色斑粒、1mmの雲母を含む	5YR7/8橙色／5YR7/4にぶい橙色／5YR7/4にぶい橙色	良好	
184	須恵器	SD541	32-12	台付長颈壺体部	—	—	(5.9)	ロクロナデ	上半：ロクロナデ 下半：回転ヘラケズリ	1mm以下の長石、石英を含む	N7/0灰白色／N4/0灰色／2.5YR6/1赤灰色	良好	腹部中位に沈線2条とその間に刺突文が施される。
185	土師器	SD541	32-10	壺口縁部	(23.2)	1/8	(6.4)	摩滅により調整不明	縦位ハケ	1~2mmの長石、赤色斑粒を含む	2.5Y8/1灰白色／2.5Y5/3黄褐色／2.5Y5/3黄褐色	良好	
186	土師器	SD541	32-15	壺口縁部	(16.4)	1/5	(9.2)	ナデ	縦位ハケ	1mm以下の長石、チャートを含む	5YR5/6明赤褐色／5YR5/6明赤褐色／5YR5/6明赤褐色	良好	
187	土師器	SD275	21-24	壺口縁部	(22.3)	1/4	(3.9)	横位ナデ	横位ナデ	1~2mmの長石、赤色斑粒、雲母を含む	10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色	良好	
188	須恵器	P484	23-2	杯H蓋口縁部	(13.1)	1/8	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石を含む	S86/1青灰色／S84/1暗青灰色／N6/0灰色	良好	

189	須恵器	SD68	22-26	杯H蓋 口縁部	(12.8)	1/16	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ。天井部の一部を回転ヘラケズリ	2~3mmの長石、石英 を含む	2.5Y6/1灰白色/ 5Y7/1灰白色/ 5Y7/1灰白色	良好	
190	須恵器	SE546	25-2	杯B口縁 ～底部	(13.3)	1/8	(4.15)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの長石、石英 をわずかに含む	N6/0灰色/ N6/0灰色/ N6/0灰色	良好	
191	須恵器	SE10	11-24	臺口縁部	(18.4)	1/8	(2.35)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの長石、石英 を含む	7.5Y6/1灰色/ 7.5Y6/1灰色/ 7.5Y6/1灰色	良好	
192	須恵器	SD186	26-18	甌口縁部	(23.4)	1/8	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの長石、石英 を含む	N6/0灰色/ 5B3/1暗青灰色/ N5/0灰色	良好	
193	須恵器	SD538	21-26	甌口縁部	(19.0)	1/8	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの長石、石英 をわずかに含む	N7/0灰白色/ N4/0灰色/ N7/0灰白色	良好	口縁部にはヘラによる刻みが施される。

第3表 平安～鎌倉時代土器類観察表

*残存率は口縁の残存率を示している。ただし底部片の場合、底部の残存率を示している。

**底部片の場合、口径の数値は「底径」と断っているように、底径の数値を入れている。

***括弧内の数値について口径では復元径、器高では残存高を示す。

番号	種類	出土地点	遺物番号	器種(残存部位)	口径(cm)	残存率	器高(cm)	内面調整	外面調整	胎土	色調(内面/外面/断面)	焼成	備考
194	須恵器	SD1	9-1	壺N体部	—	—	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	1mm以下の長石、輝石、雲母を含む	2.5Y6/1灰黄色/ N7/0灰白色/ 5Y8/1灰白色	良好	
195	縁釉陶器	SD1	8-31	壺底部	底径(15.2)	1/6	(4.3)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	精良。砂粒を含まない。	5Y5/1灰色/ 7.5Y7/2灰白色/ 5Y7/1灰白色	良好	
196	須恵器	SD1	7-50	壺底部	底径(14.2)	1/8	(4.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	1~2mmの長石、石英 を含む	5R6/1赤灰色/ 7.5R5/2赤灰色/ 5R6/1赤灰色	良好	
197	土師器	SD68	21-40	甌口縁～底部	(12.2)	1/8	2.15	ヨコナデ	ヨコナデ	精良。1mmの赤色磨粒、0.1mmの雲母を わずかに含む	5YR7/3に近い橙色/ 7.5YR7/2明褐色/ 5YR8/4淡橙色	良好	
198	瓦器	SD538	22-44	甌口縁～体部	(15.4)	1/3	(5.3)	横位ヘラミガキ	横位ヘラミガキ	精良。0.1mmの長石、石英をわずかに 含む	N3/0暗灰色/ N1.5/0黒色/ 5Y8/1灰白色	良好	
199	瓦器	SD538	21-29	甌口縁～体部	(13.0)	1/6	(4.35)	横位ヘラミガキ	ナデ	精良。砂粒を含まない。	N3/0暗灰色/ N3/0暗灰色/ N8/0灰白色	良好	

200	瓦器	SD538	21-39	碗体～底部	底径(5.8)	1/4	(4.3)	横位ヘラミガキ	ナデ	精良。砂粒を含まない。	N4/0灰色／5Y4/1灰色／5Y5/1灰色	良好	
201	瓦器	SD538	22-44	碗底部	底径(5.6)	1/3	(1.25)	暗文	ナデ	精良。砂粒を含まない。	N4/0灰色／N3/0暗灰色／N8/0灰白色	良好	
202	土師器	SE10	8-44	皿底部	—	—	(4.9)	摩滅して調整不明	摩滅。ヨコナデー一部残存。	精良。1mmの赤色斑粒、0.1mmの雲母をわずかに含む	10YR7/2にぶい黄橙色／7.5YR7/2明褐色／7.5YR6/3にぶい褐色	良好	
203	瓦質土器	SE10	8-50	脚付鍋脚部	—	—	(4.3)	—	縦位ヘラケズリ	精良。0.1mmの雲母をわずかに含む	—／N4/0灰色／10YR7/1灰白色	良好	
204	土師器	SE546	22-4	皿口縁部	(10.8)	1/6	(1.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	精良。0.1mmの長石、石英をわずかに含む	7.5YR8/2灰白色／7.5YR7/3にぶい橙色／7.5YR7/4にぶい橙色	良好	
205	瓦器	SE546	25-3	碗口縁～体部	(14.4)	1/6	(3.7)	横位ヘラミガキ	ナデ。一部横位ヘラミガキ	精良。砂粒を含まない。	2.5Y2/1黒色／2.5Y2/1黑色／5Y8/1灰白色	良好	
206	白磁	SE546	22-5	碗口縁～体部	(15.3)	1/4	(5.0)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	精良。砂粒を含まない。	10Y9/1灰白色／7.5Y7/2灰白色／N7/0灰白色	良好	
207	土師器	SX462	35-1	皿口縁～底部	9.2	2/3	1.65	ヨコナデ	ヨコナデ	1mmの長石、石英、0.5mmの雲母を含む	10YR7/2にぶい黄橙色／10YR7/3にぶい黄橙色／10YR7/1灰白色	良好	
208	土師器	SX462	35-2	皿口縁部	(9.5)	1/8	(0.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5mmの石英、雲母を含む	2.5Y7/3浅黄色／2.5Y7/4浅黄色／10YR6/3にぶい黄橙色	良好	
209	土師器	SX462	35-3	皿完形	9.8	完存	1.75	ヨコナデ	ヨコナデ	1～2mmの赤色斑粒、0.5mmの石英、雲母を含む	2.5Y7/3浅黄色／10YR7/3にぶい黄橙色／10YR7/1灰白色	良好	
210	土師器	SX462	35-4	皿完形	9.8	完存	2.1	ヨコナデ	ヨコナデ	1～2mmの赤色斑粒、0.5mmの雲母を含む	10YR6/3にぶい黄橙色／7.5YR6/4にぶい橙色／7.5YR6/2灰褐色	良好	
211	土師器	SX462	35-5	皿完形	9.9	完存	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	1～2mmの赤色斑粒、0.5mmの雲母を含む	7.5YR7/2明褐色／7.5YR7/3にぶい橙色／2.5Y6/1黄灰色	良好	
212	土師器	SX462	35-6	皿完形	9.8	完存	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ	1mmの長石、石英、0.5mmの雲母を含む	10YR7/2にぶい黄橙色／7.5YR6/3にぶい褐色／7.5YR8/2灰白色	良好	
213	土師器	SX462	35-7	皿完形	9.8	完存	2.2	ヨコナデ	ヨコナデ	1～2mmの赤色斑粒、0.5mmの雲母を含む	2.5Y6/3にぶい黄色／2.5Y6/3にぶい黄色／7.5YR5/1褐灰色	良好	

214	土師器	SX462	35-8	皿完形	9.7	完存	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	1mmの長石、石英、雲母を含む	7.5YR7/3にぶい橙色／7.5YR7/4にぶい橙色／7.5YR7/1明褐色	良好	
215	土師器	SX462	35-9	皿完形	9.4	完存	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	1mmの赤色斑粒、0.5mmの雲母を含む	7.5YR7/3にぶい橙色／7.5YR7/3にぶい橙色／7.5YR7/1明褐色	良好	
216	土師器	SX462	35-10	皿完形	9.6	完存	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ	1mmの長石、石英、0.5mmの雲母を含む	10YR7/2にぶい黄橙色／7.5YR7/3にぶい橙色／SYR7/4にぶい橙色	良好	
217	土師器	SX1000	29-46	皿口縁～底部	(9.1)	1/6	0.7	ヨコナデ	ヨコナデ	1～2mmの長石、石英、赤色斑粒、0.1mmの雲母を含む	7.5YR7/4にぶい橙色／7.5YR7/2明褐色／SYR8/3淡橙色	良好	
218	土師器	SX1000	26-26	皿口縁～底部	(9.0)	1/10	0.95	剥離。ヨコナデ一部残存。	剥離。ヨコナデ一部残存。	0.5mmの長石、石英、チャート、赤色斑粒、0.1mmの雲母を含む	7.5YR7/4にぶい橙色／7.5YR7/3にぶい橙色／7.5YR7/3にぶい橙色	良好	
219	土師器	SX1000	26-26	皿口縁～底部	(9.6)	1/10	0.85	摩滅して調整不明	ヨコナデ	1mmの長石、石英を含む	10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色／10YR8/3浅黄橙色	良好	
220	須恵器	SX1000	27-18	碗口縁部	(16.6)	1/10	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	0.1mmの長石、石英を含む	N7/0灰白色／N6/0灰色／N6/0灰色	良好	
221	土師器	SX1000	26-26	釜体部	—	—	(6.2)	摩滅して調整不明	摩滅して調整不明	0.5mmの長石、石英、チャート、赤色斑粒、0.1mmの雲母を含む	7.5YR6/4にぶい褐色／10YR6/2灰黄褐色／7.5YR6/4にぶい橙色	良好	鰐の端部に沈線1条が施される。
222	瓦器	SX1000	27-29	碗底部	底径(5.4)	1/4	(1.2)	摩滅して調整不明	摩滅して調整不明	精良。砂粒を含まない。	N3/0暗灰色／N4/0灰色／2.5Y8/1灰白色	良好	見込みに暗文残存する。
223	瓦質土器	SX1000	27-60	鉢口縁部	—	—	(4.0)	横位ハケ	ロクロナデ	精良。0.5mmの輝石をわずかに含む	5Y8/1灰白色／2.5Y7/1灰白色／2.5Y8/1灰白色	良好	
224	縄輪陶器	(交差点)	3-7	皿底部	底径(6.2)	1/2	(1.1)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	0.1mmの雲母を含む	/鐵胎5Y8/1灰白色／2.5Y8/1灰白色	良好	備産縄輪陶器

第4表 瓦類察表

括弧内の数値について残存値を示す。

番号	出土地点	遺物番号	種類(残存部位)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	凸面調整	凹面調整	側面調整	胎土	色調(凸面/凹面/断面)	焼成	備考
225	SH465	37-4	平瓦	(12.4)	(9.1)	2.1	格子目タタキ	布目痕	ヘラケズリ	1~2mmの長石、石英含む	N8/0灰白色/N8/0灰白色/N8/0灰白色	良好	棲骨痕あり
226	SH465	29-4	(不明)	(4.0)	(2.7)	1.9	格子目タタキ	布目痕	(小ロヘラケズリ)	1mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	10YR6/1褐色/10YR7/1灰白色/10YR7/1灰白色	良好	
227	SH465	24-8	平瓦	(5.7)	(6.4)	2.1	格子目タタキの後一部横位ナデ	布目痕	—	1~2mmの長石、石英、赤色斑粒を含む	7.5YR6/1明褐色/2.5Y7/1灰白色/7.5YR7/3にぶい褐色	良好	
228	N17・017区	18-21	(不明)	(4.9)	(3.3)	(1.4)	格子目タタキ	—	—	1mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	—/5Y7/1灰白色/2.5Y7/2灰黄色	良好	
229	SK628	31-3	(不明)	(2.7)	(3.5)	2.1	格子目タタキ	布目痕	—	0.5mmの長石、石英、雲母含む	5BS/1青灰色/5B6/1青灰色/2.5Y8/2灰白色	良好	
230	SD239	12-46	平瓦	(5.3)	(4.6)	2.0	格子目タタキ	布目痕	(小ロヘラケズリ)	1mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	N7/0灰白色/N6/0灰色/5Y7/1灰白色	良好	
231	SX1000	27-61	平瓦	(3.3)	(3.6)	1.9	横位ナデ	布目痕	(小ロヘラケズリ)	1mmの長石、石英、赤色斑粒を含む	5Y7/1灰白色/5Y7/1灰白色/10YR7/2にぶい黄褐色	良好	
232	SK628	31-3	丸瓦	(4.4)	(7.1)	2.0	格子目タタキの後一部横位ナデ	布目痕	(小ロヘラケズリ)	1~3mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	5BS/1青灰色/5B6/1青灰色/5Y7/1灰白色	良好	
233	SD414	22-57	丸瓦	(7.4)	(7.7)	2.1	格子目タタキの後一部横位ナデ	布目痕	(小ロヘラケズリ)	0.5mmの長石、石英、雲母含む	5B6/1青灰色/5B6/1青灰色/5BS/1青灰色	良好	
234	西トソチ	17-29	丸瓦	(8.4)	(3.2)	2.0	格子目タタキの後一部横位ナデ	布目痕	ヘラケズリ	1~3mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	2.5Y6/1灰白色/2.5Y7/1灰白色/5Y7/1灰白色	良好	
235	西トソチ	4-13	丸瓦	(7.2)	(7.0)	2.2	格子目タタキの後一部横位ナデ	布目痕	(小ロヘラケズリ)	1mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	5Y7/1灰白色/5Y7/1灰白色/5Y7/1灰白色	良好	
236	交差点	15-27	平瓦	(11.9)	(12.1)	2.1	格子目タタキの後小口付近を横位ナデ	布目痕	ヘラケズリ	1~2mmの長石、石英含む	5Y6/1灰色/5Y7/1灰白色/7.5YR7/3にぶい橙色	良好	
237	N18・018区	29-23	平瓦	(7.0)	(8.2)	3.0	縹目タタキ	布目痕	ヘラケズリ	1~3mmの長石、石英、赤色斑粒を含む	N8/0灰白色/N6/0灰色/2.5Y8/1灰白色	良好	

238	SH465	36-49	平瓦	(10.2)	(6.4)	2.0	繩目タタキ	斜位のハケ状のケズリ	—	1~2mmの長石、石英含む	5Y7/1灰白色/ 5Y6/1灰色/ 5Y7/1灰白色	良好	
239	SD7	8-29	平瓦	(15.0)	(12.8)	2.2	繩目タタキ	布目痕	ヘラケズリ	1~2mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	5Y7/1灰白色/ N3/0暗灰色/ 5Y8/1灰白色	良好	
240	SE546	25-4	平瓦	(8.3)	(5.7)	2.5	摩滅して調整不明	縦位のハケ状のケズリ	ヘラケズリ	2~5mmの長石、石英、0.5mmの雲母含む	2.5Y7/1灰白色/ 5Y6/1灰色/ 2.5Y8/1灰白色	良好	
241	SD1	8-24	丸瓦	(12.1)	(8.4)	1.7	繩目タタキの後ナデ消し	布目痕	(小口ヘラケズリ)	1mmの輝石、0.1mmの雲母含む	5Y6/1灰色/ 5Y6/1灰色/ 2.5Y8/1灰白色	良好	
242	SD1	9-3	平瓦	(12.4)	(8.5)	2.5	繩目タタキの後一部ナデ消し	布目痕、一部縦位ヘラケズリ	ヘラケズリ	2~5mmの赤色斑粒、0.5mmの雲母含む	7.5YR6/2にぶい褐色/ 7.5YR6/1褐色/ 7.5YR6/2灰	良好	板骨痕あり
243	西トレチ 16-11	平瓦	(11.1)	(6.5)	1.8	繩目タタキ	布目痕	ヘラケズリ	1mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	5Y7/1灰白色/ N5/0灰色/ 2.5Y7/2灰黄色	良好		
244	SD224	12-35	平瓦	(7.4)	(4.7)	1.35	繩目タタキ	布目痕	(小口ヘラケズリ)	2~5mmの長石、石英、チャート、0.5mmの雲	5Y6/1灰色/ N5/0灰色/ N7/0灰色	良好	
245	U-V16-17区	11-50	平瓦	(6.4)	(6.0)	1.6	繩目タタキ	布目痕	—	1~2mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	5PB4/1暗青灰色/ 5PB4/1暗青灰色/ 5Y8/1灰白色	良好	
246	西トレチ 16-11	平瓦	(4.1)	(7.6)	2.0	繩目タタキ	布目痕	ヘラケズリ	1mmの長石、石英、0.1mmの雲母含む	N7/0灰白色/ 5Y7/1灰白色/ 2.5Y7/2灰黄色	良好		
247	G19-20区	14-5	平瓦	(5.4)	(6.0)	2.2	繩目タタキ	布目痕	—	2~5mmの長石、石英、チャート、0.1mmの雲	N3/0暗灰色/ N4/0灰色/ 5Y7/1灰白色	良好	
248	西トレチ 16-11	平瓦	(7.2)	(5.2)	2.3	繩目タタキの後ナデ消し	布目痕	ヘラケズリ	1~2mmの長石、石英、チャート、0.1mmの雲	2.5Y7/1灰白色/ N5/0灰色/ 2.5Y8/1灰白色	良好		
249	交差点	5-6	平瓦	(5.4)	(6.8)	1.8	繩目タタキ	布目痕	—	1~2mmの長石、石英、チャート、輝石を含む	5Y6/1灰色/ 5Y6/1灰色/ 5Y7/1灰白色	良好	
250	N18区	35-13	軒丸瓦(丸瓦部)	(7.0)	(7.5)	(3.0)	摩滅・剥落して調整不明	摩滅・剥落して調整不明	—	1~2mmの長石、石英、チャート、赤色斑粒を	10YR7/2にぶい黄褐色/ 10YR7/2にぶい黄褐色/ 7.5YR6/2灰褐色	良好	瓦当面は欠失
251	SX1000	27-30	丸瓦	(4.4)	(4.2)	1.75	摩滅して調整不明	布目痕	ヘラケズリ	1~5mmの赤色斑粒、0.5mmの雲母含む	10YR5/2灰黄褐色/ 10YR7/2にぶい黄褐色/ 5YR6/3にぶい橙色	良好	

252	交差点 4-10	丸瓦	(5.1)	(5.4)	1.4	横位ナデ	布目痕	—	1~2mmの長石、 石英含む	N7/0灰白色/ N6/0灰色/ 5Y7/1灰白色	良好	
253	N18区 25-15	丸瓦	(8.0)	(5.1)	1.5	縦位のハケ状 のケズリ	摩滅。布目痕 一部残存。	—	1~2mmの長石、 石英、チャート を含む	2.5Y8/1灰白色/ 2.5Y7/1灰白色/ 2.5Y8/1灰白色	良好	
254	N17・ 017区 18-21	丸瓦	(3.7)	(4.9)	1.8	ナデ	布目痕	ヘラケズリ	2~3mmの長石、 石英、0.1mmの 雲母含む	10YR7/2にぶい黄褐色 /5Y7/1灰白色/ 2.5Y7/2灰黄色	良好	
255	交差点 4-10	丸瓦（玉 縁部）	(10.4)	(7.6)	1.4	横位ナデ	摩滅して調整 不明	ヘラケズリ	2mmの長石、石 英、0.5mmの雲 母含む	10YR8/2灰白色/ 2.5YR7/2灰黄色/ 10YR8/2灰白色	良好	
256	東トレシ チ	平瓦	(10.0)	(13.0)	2.5	横位ナデ	布目痕	ヘラケズリ（小 口ヘラケズリ）	1mmの長石、石 英、0.1mmの雲 母含む	5Y7/1灰白色/ 5Y7/1灰白色/ 5Y7/1灰白色	良好	横骨痕あり
257	交差点 4-10	平瓦	(13.0)	(12.3)	2.8	摩滅して調整 不明	布目痕。側線 付近に縦位ナ デ	ヘラケズリ	1~2mmの長石、 石英、輝石、 0.1mmの雲母含 む	10YR4/3にぶい黄褐色 /7.5YR7/2明褐色 /5YR7/4にぶい	良好	横骨痕あり
258	交差点 5-6	平瓦	(6.8)	(6.0)	1.5	摩滅して調整 不明	摩滅して調整 不明	—	1~2mmの長石、 石英含む	2.5Y7/1灰白色/ 2.5Y6/1灰白色/ 2.5Y7/1灰白色	良好	
259	SD406 11-41	平瓦	(7.3)	(5.3)	2.0	摩滅して調整 不明	摩滅して調整 不明	—	3~5mmの長石、 石英、0.1mmの 雲母含む	2.5Y7/2灰黄色/ 10YR8/1灰白色/ 2.5Y8/2灰白色	良好	

第5表 土製品観察表

括弧内の数値について残存値を示す。

番号	出土 地点	遺物 番号	種類(残存部 位)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	内面調整	外面調整	胎土	色調(表面/断面)	焼成	備考
260	SD231	10-29	埴輪口縁片	(5.5)	(6.2)	(4.3)	(鉢津が厚く付着している)	調整不明	5mmの花崗岩片、1~3mmの長石、石英、チャート、0.5mmの雲母を含む	2.5Y8/1灰白色、(被熱部分)5B4/1暗青灰色/2.5V7/6橙色	良好	
261	SD242	20-53	輪の羽口管部	(6.2)	(4.3)	(2.4)	摩滅して調整不明	摩滅して調整不明	5mmの石英、1~2mmの長石、石英、赤色斑紋を含む	(内面)10YR7/2にぶい黄橙色(外面)7.5YR6/4にぶい橙色(被熱部分)5P86/1青灰色/10YR5/1褐灰色	良好	
262	SD83	20-44	瓦質魚網縫上半部	(3.0)	(2.5)	(2.5)	(棒を引き抜いた痕跡)	縦位ヘラミガキ	精良。0.5mmの長石、石英、輝石、0.1mmの雲母を含む	N5/0灰色/5Y7/1灰白色	良好	上端径1.8cm、中心孔の復元径0.9cm。
263	北トレンチ	2-1	土馬頭部～胴部	(9.1)	6.2	(8.6)		ナデ	2~3mmの長石、石英、チャート、1mmの輝石、雲母、赤色斑紋を含む	5YR7/3にぶい橙色/7.5YR7/1明褐色	良好	

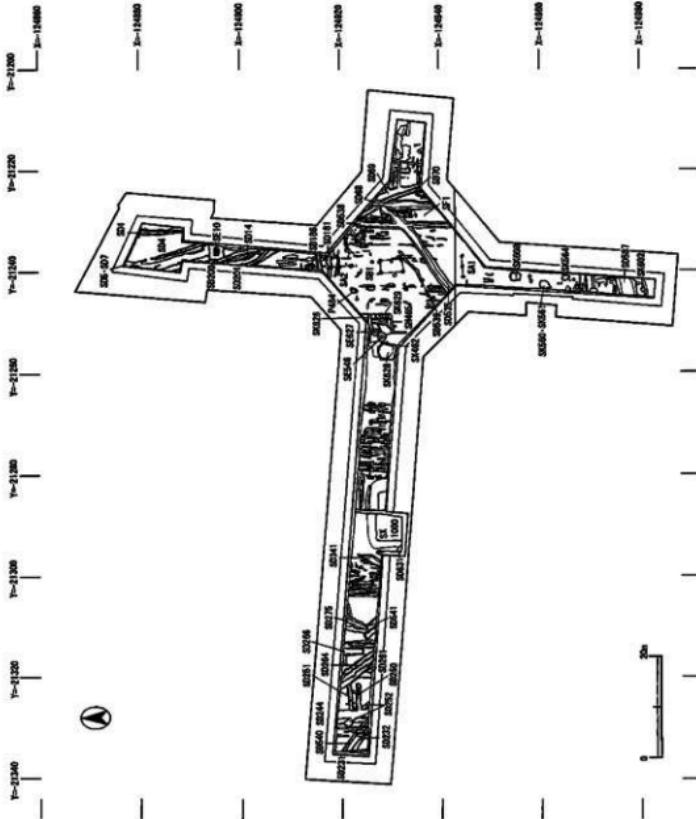
第6表 石製品観察表

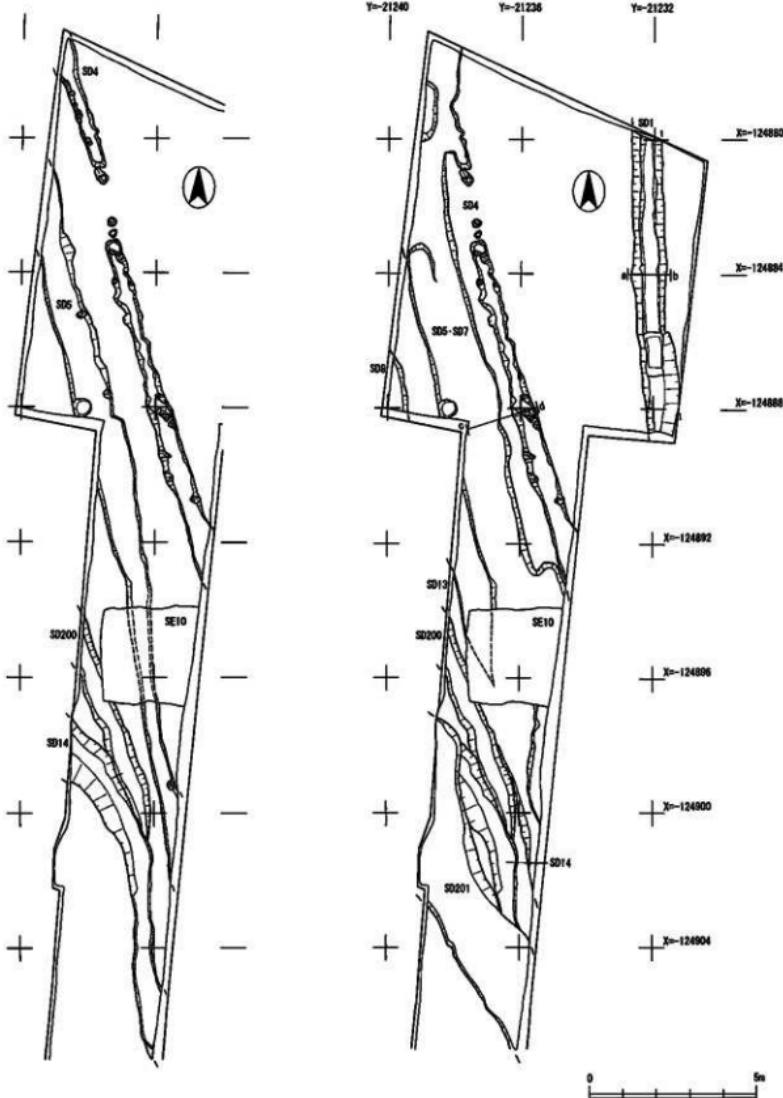
括弧内の数値について残存値を示す。

番号	出土 地点	遺物 番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	遺存状態	備考
264	SD635	24-10	板状石製品	(4.8)	(5.35)	0.6	(28)	粘板岩	破片	
265	SD538	22-45	台石	(9.2)	(9.2)	(7.0)	(692)	砂岩	破片	
266	SK628	31-6	砥石	8.2	4.1	2.9	107	ホルンフェルス	完形	
267	018区	27-5	敲石	(11.8)	(5.9)	4.2	(366)	砂岩	1/2片	
268	SK628	31-5	擦痕のある石器	(13.6)	4.5	2.1	(130)	ホルンフェルス	一部欠	

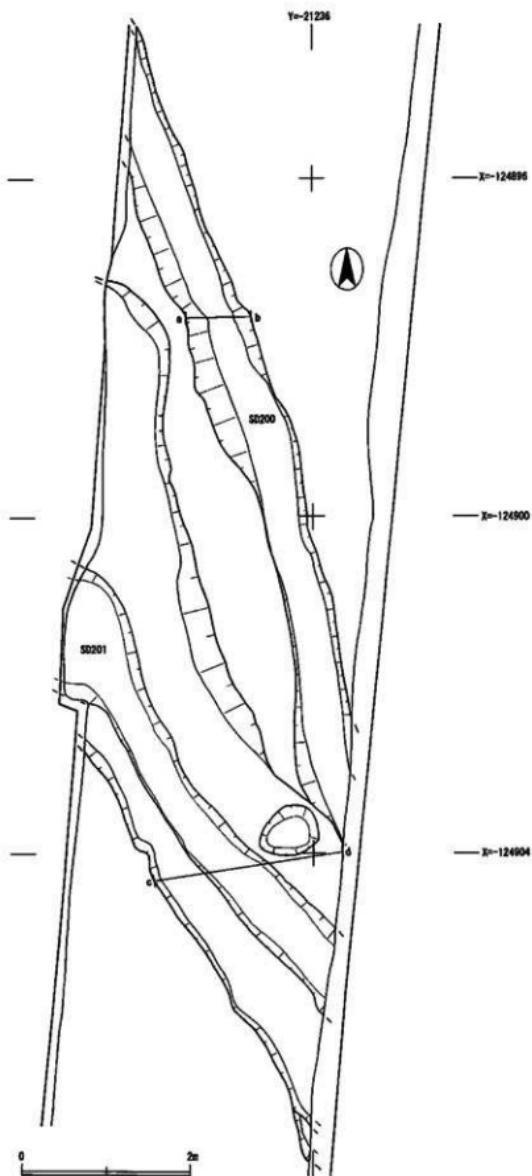
図 版

第2次・第3次調查區全體圖 (1/1000)

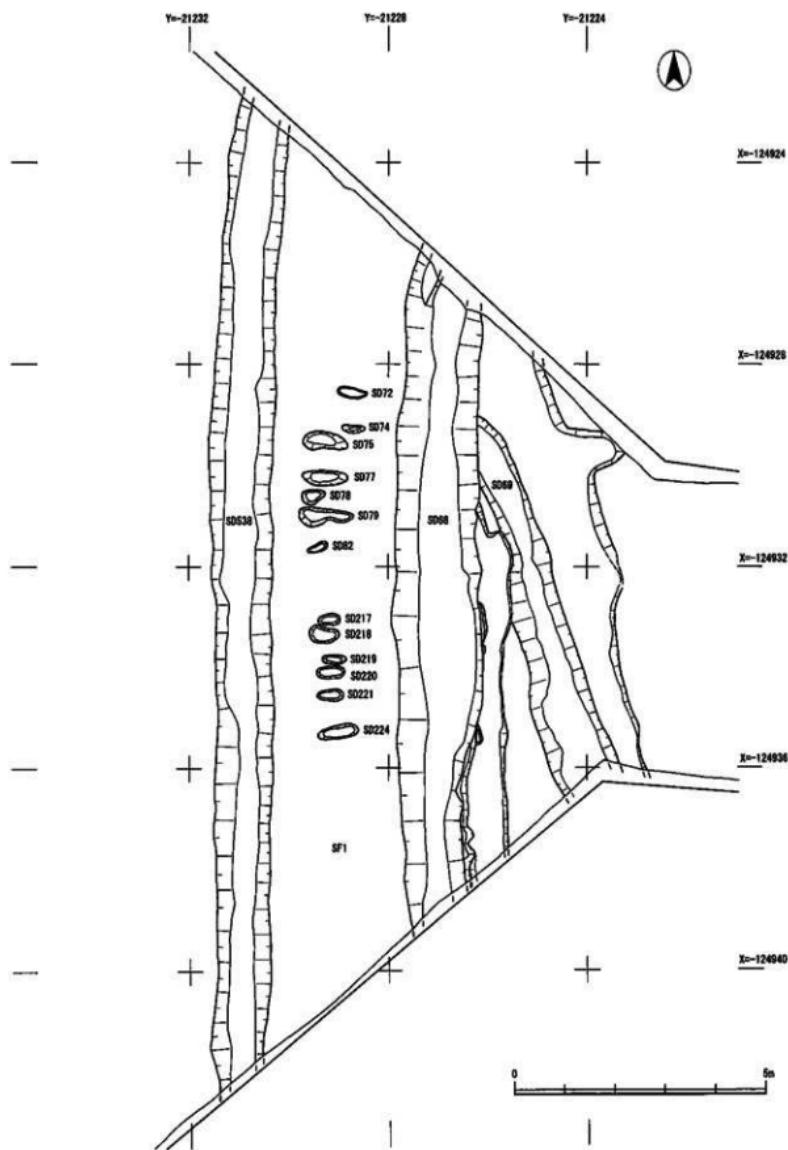




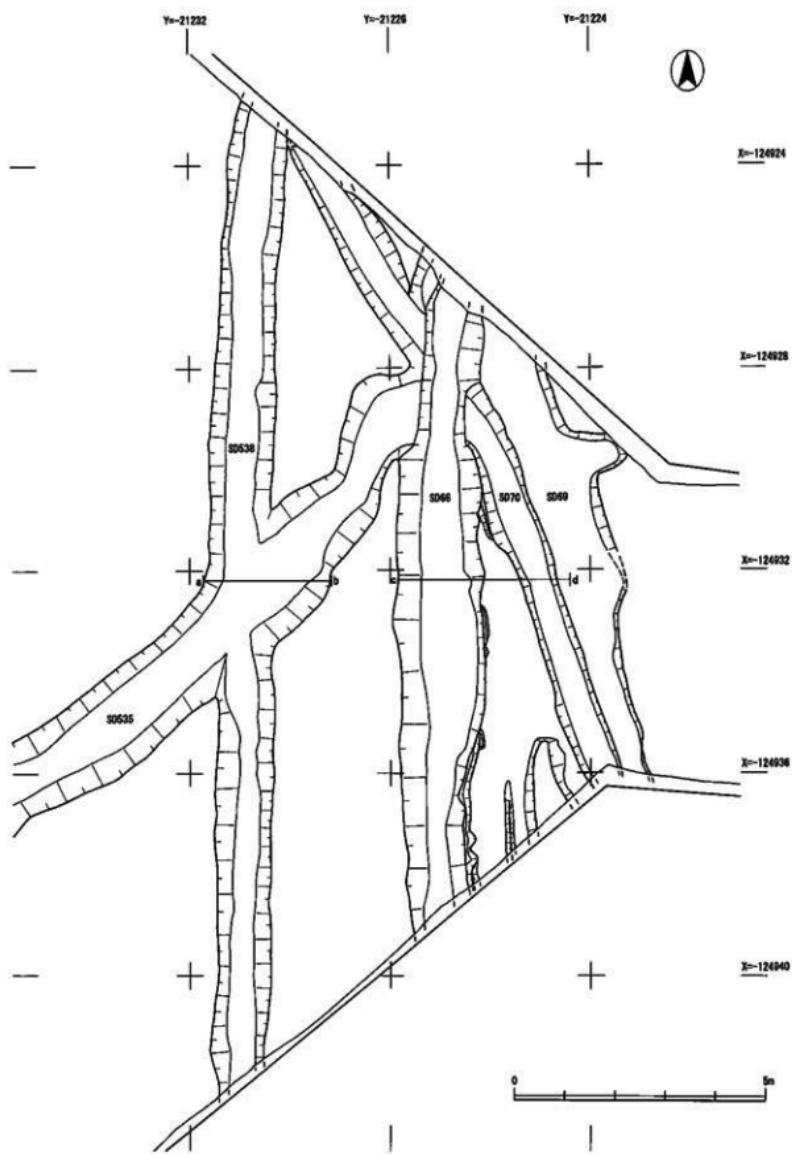
北トレンチ溝平面図 (1/150)



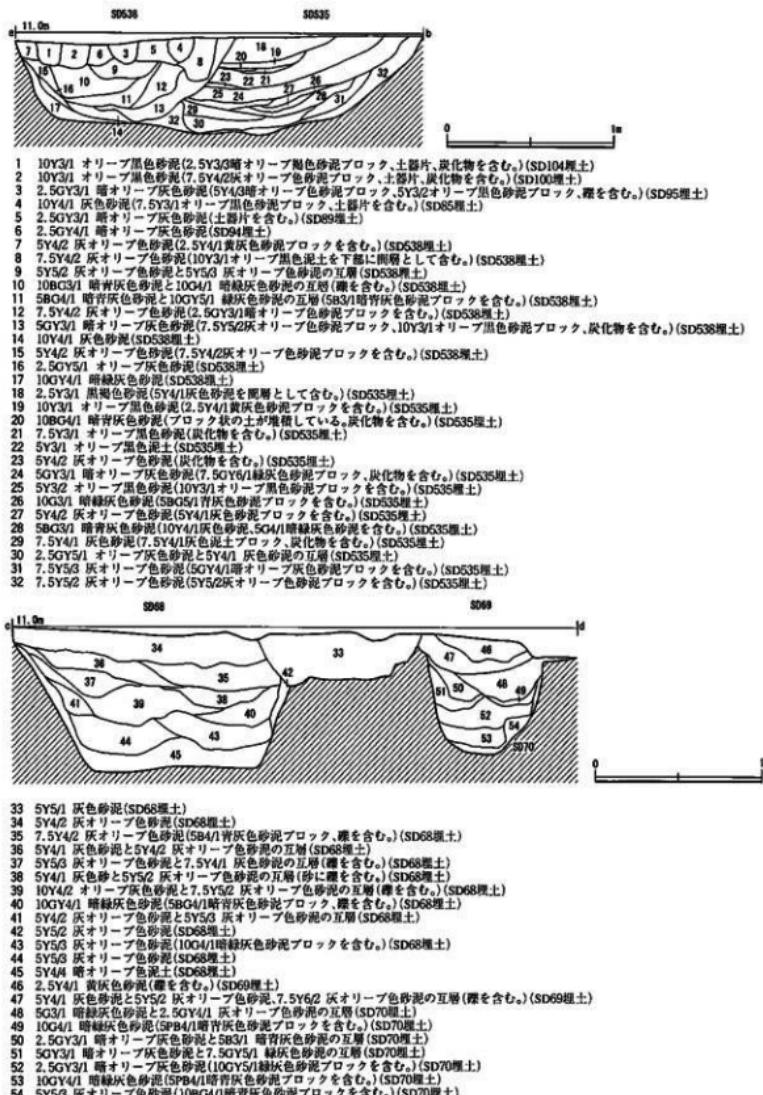
溝SD200・溝SD201平面図 (1/60)



道路造構 S F 1・溝 S D68・溝 S D69・溝 S D538平面図 (1/200)

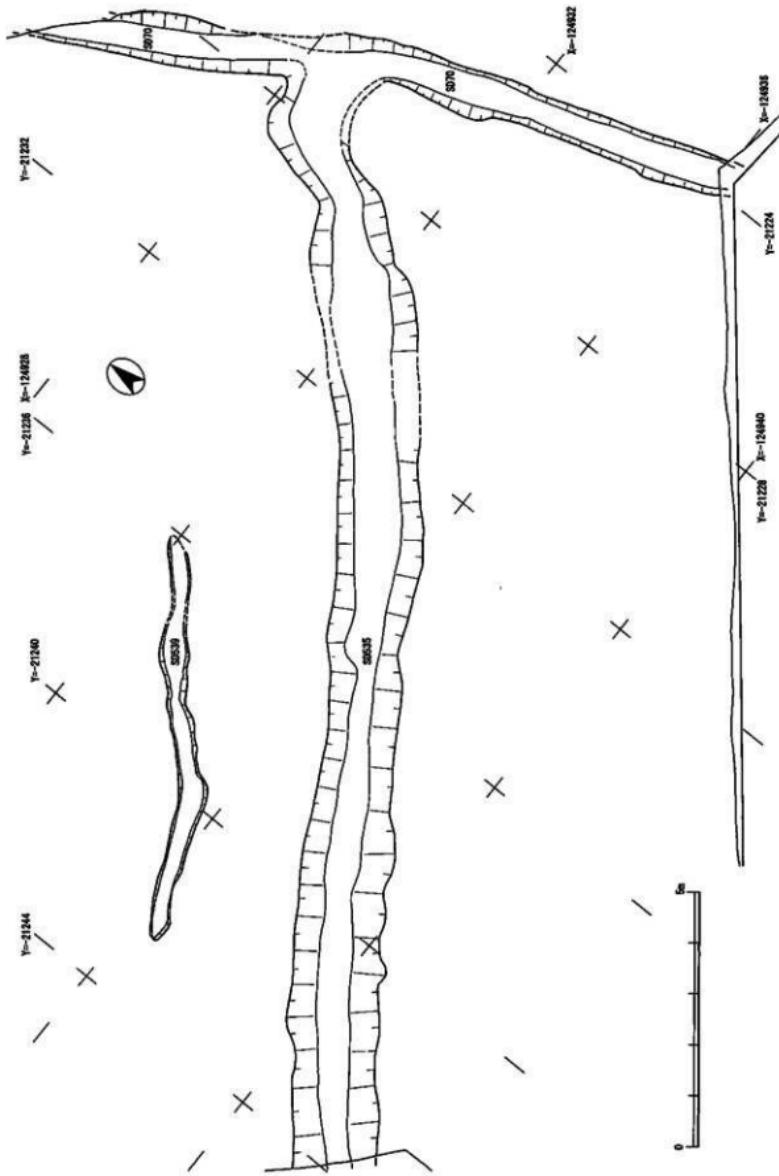


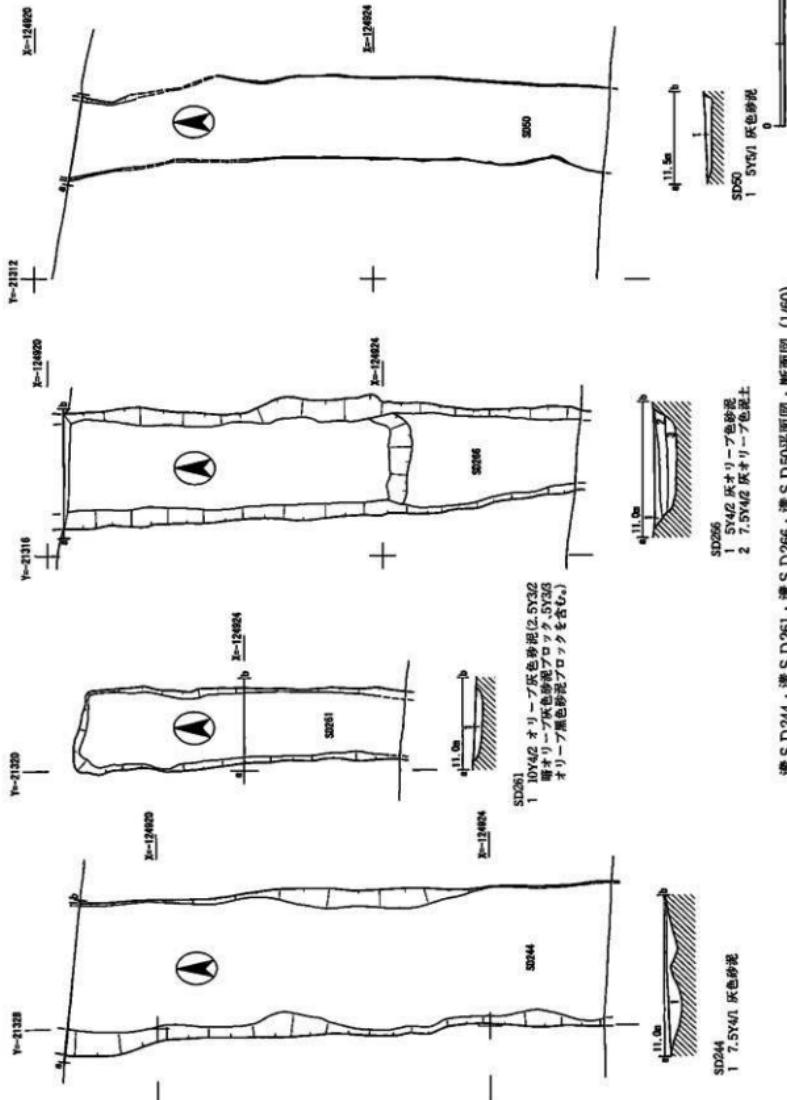
溝 S D68・溝 S D69・溝 S D70・溝 S D535・溝 S D538平面図 (1/200)



溝 S D535・溝 S D538・溝 S D68・溝 S D69・溝 S D70断面図 (1/30)

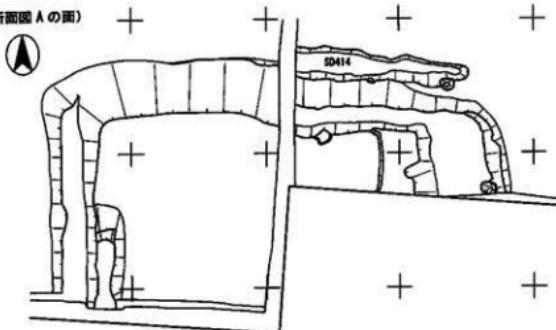
津 S D535・津 S D539・津 S D70平面圖 (1/200)



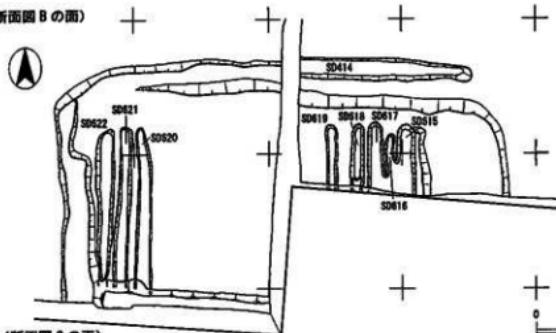


津 S D244・津 S D261・津 S D266・津 S D30平面図・断面図 (1/60)

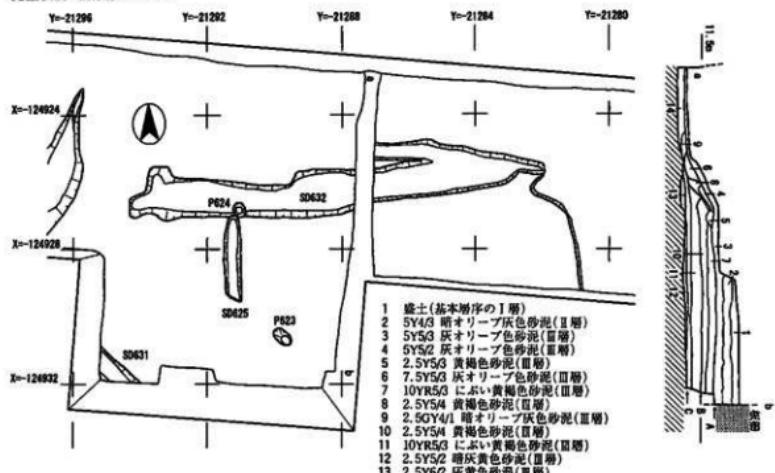
第1面(断面図Aの面)



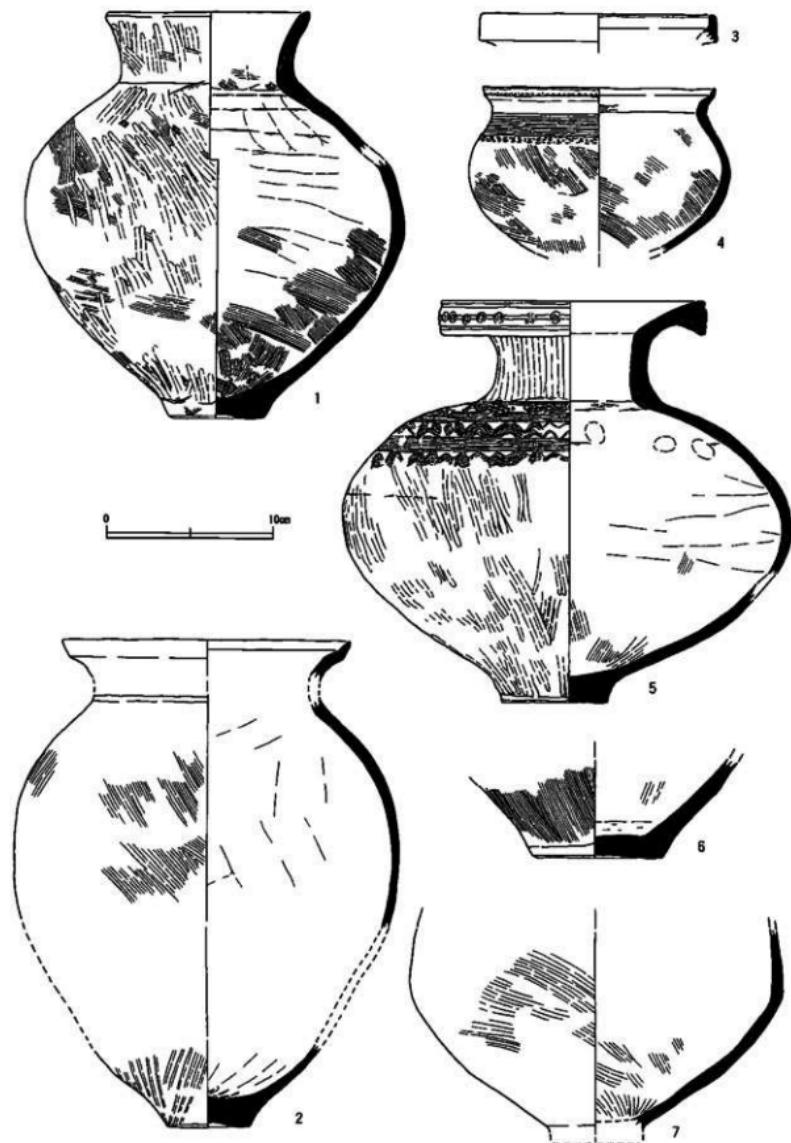
第2面(断面図Bの面)



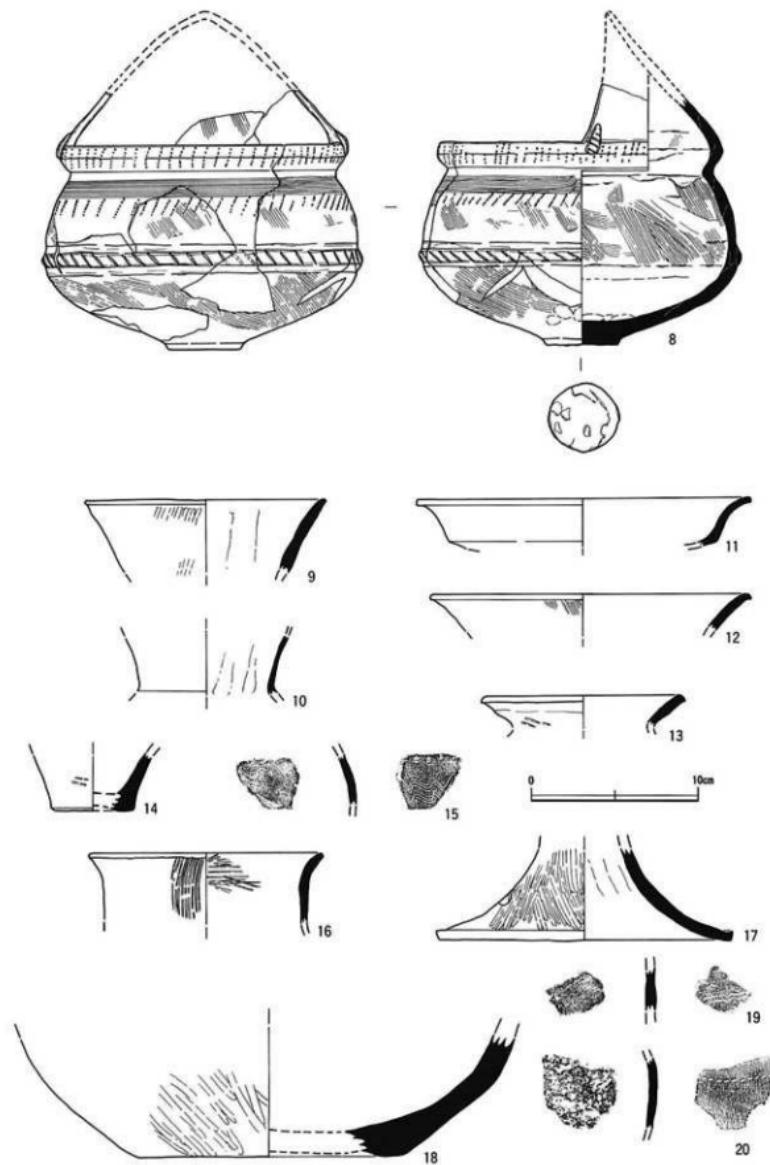
完掘状況(断面図Cの面)



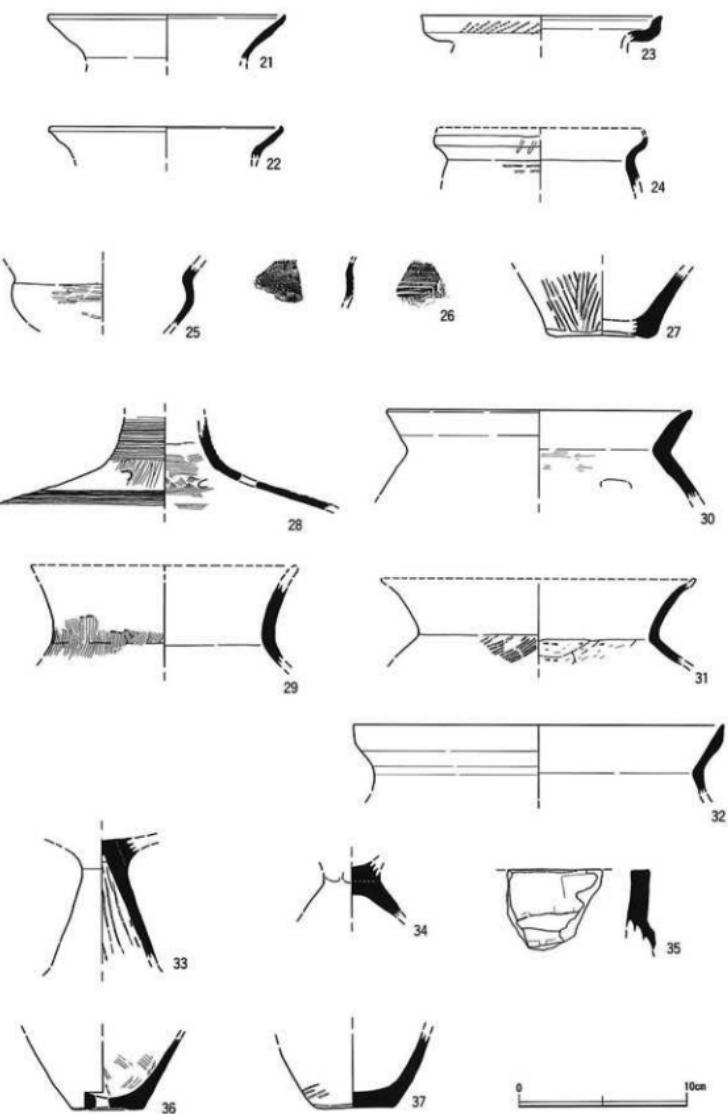
鳥畠跡 S X 1000平面図・断面図 (1/150)



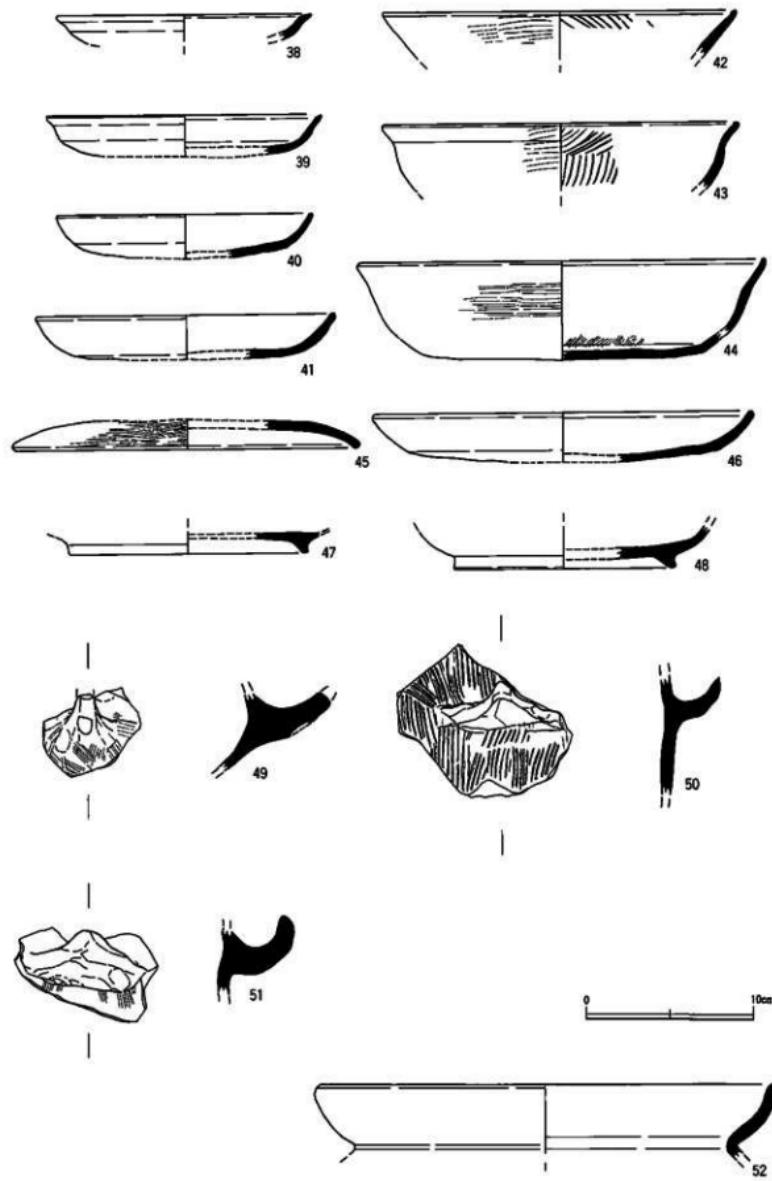
弥生土器・古式土器実測図1 (1/3)



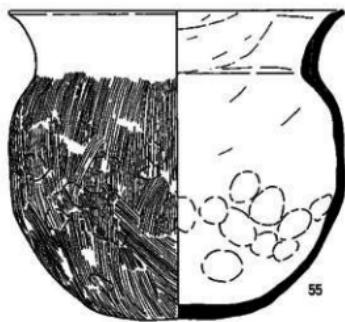
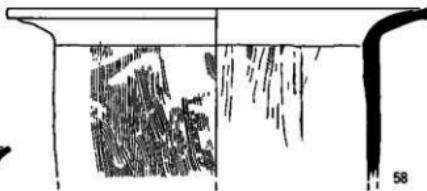
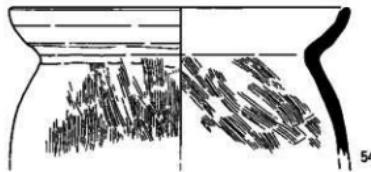
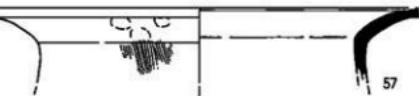
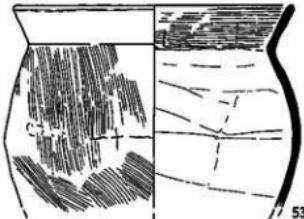
弥生土器・古式土師器実測図 2 (1/3)



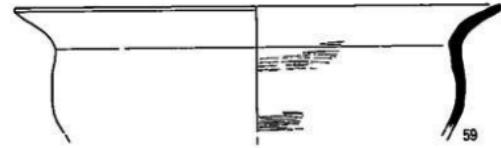
弥生土器・古式土師器実測図 3 (1/3)

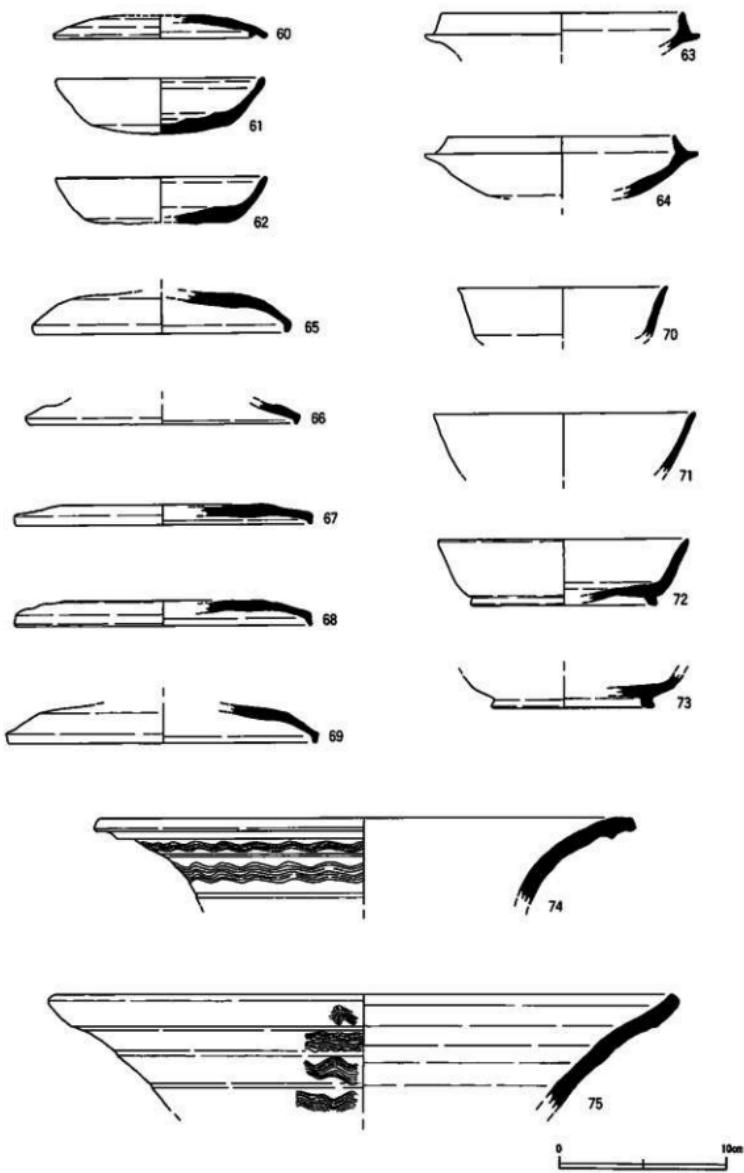


堅穴住居跡 S H465出土土器類実測図 1 (1/3)



0 10cm

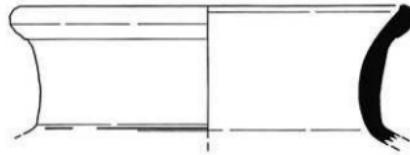




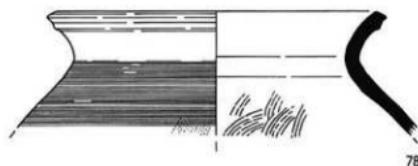
堅穴住居跡 S H465出土土器類実測図 3 (1/3)



76



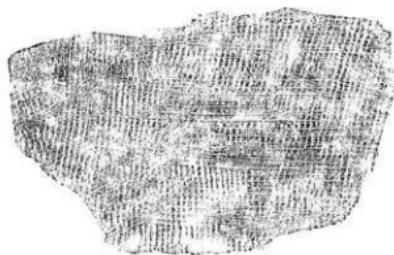
77



78



79

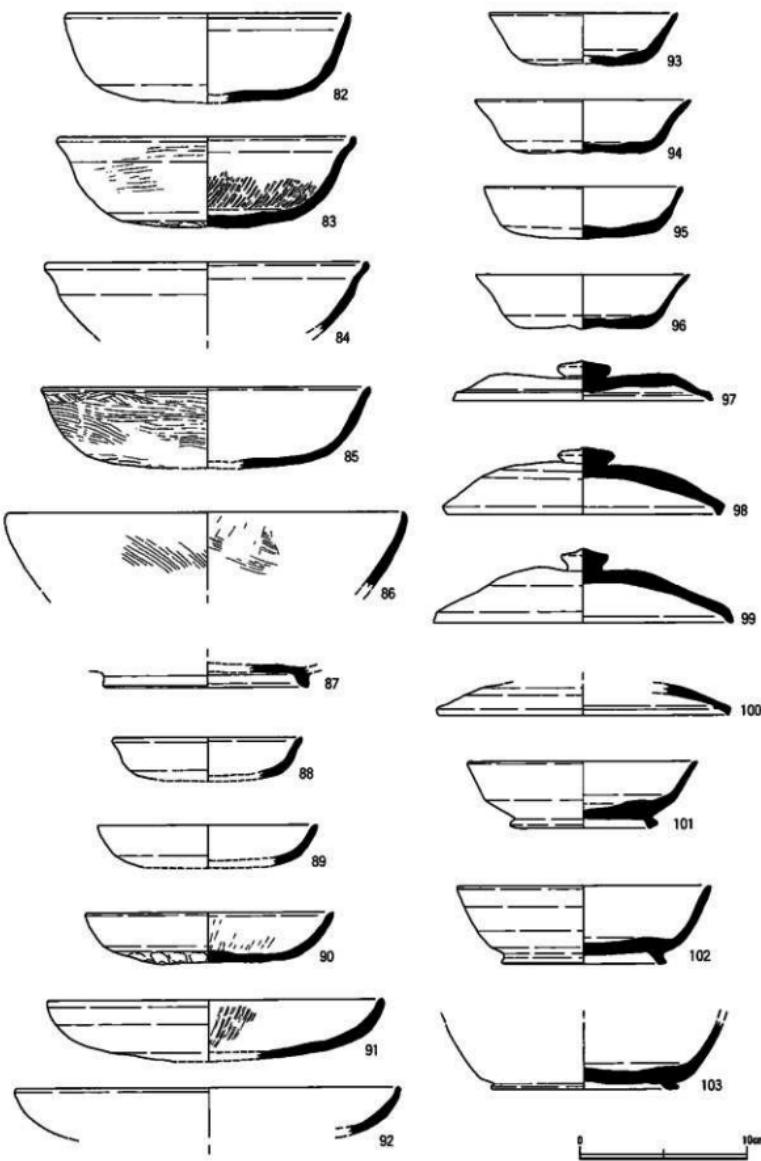


80

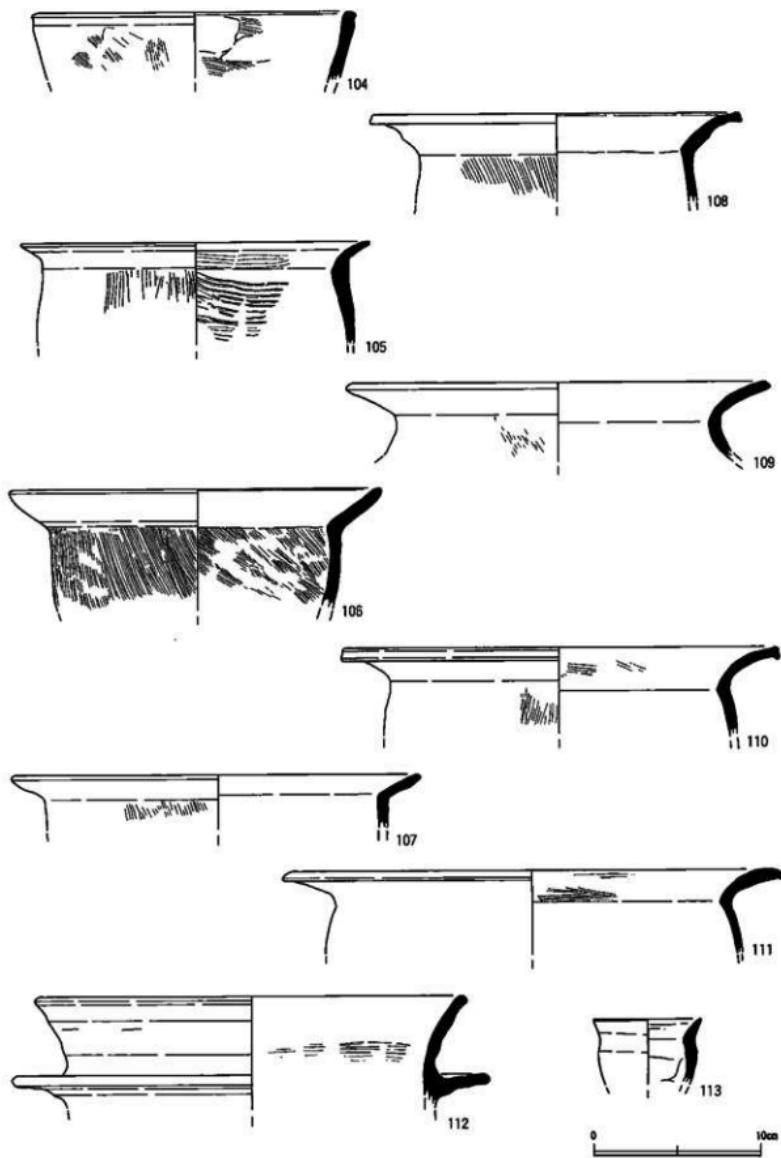


0 10cm

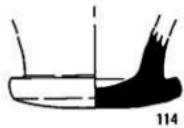
堅穴住居跡 S H465出土土器類実測図 4 (1/3)



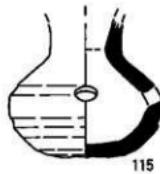
土坑 S K628出土土器類実測図 1 (1/3)



土坑 S K 628 出土土器類実測図 2 (1/3)



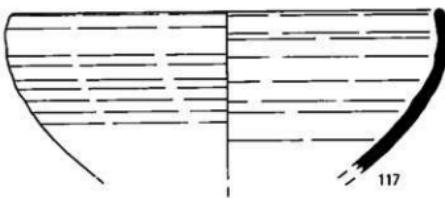
114



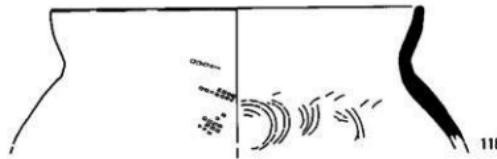
115



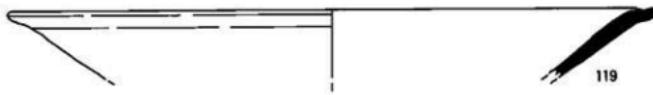
116



117



118



119



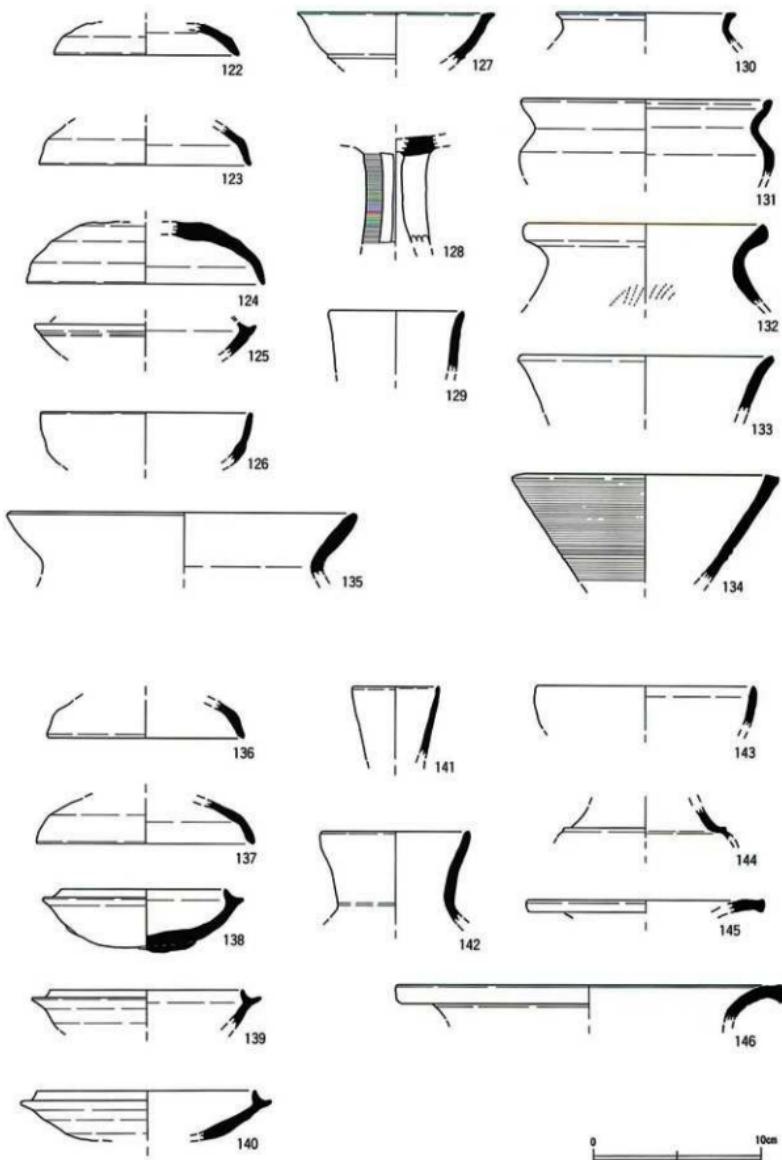
120



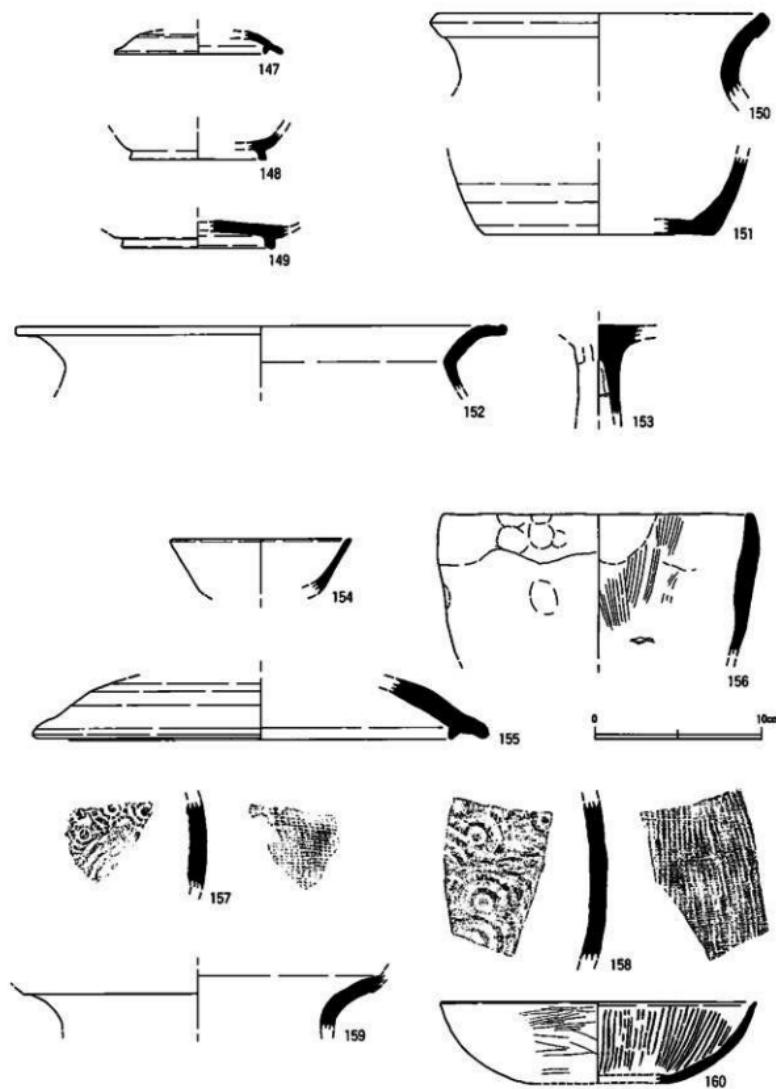
121



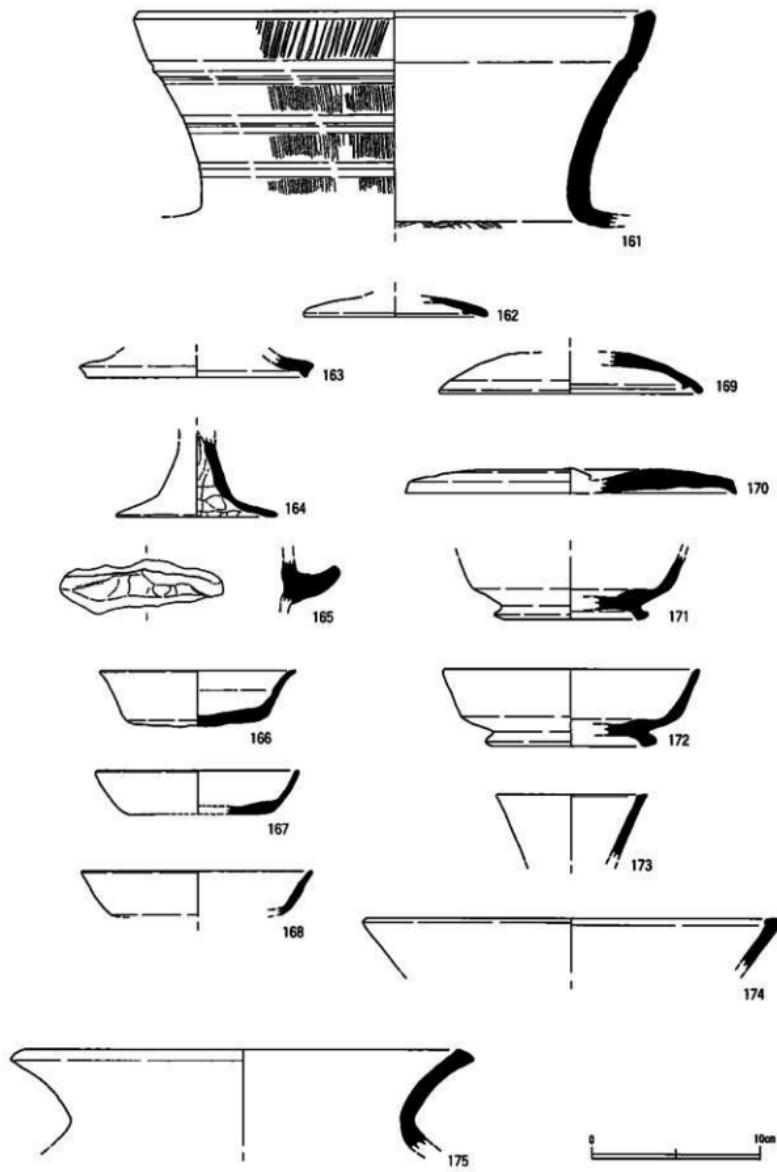
土坑 S K628出土土器類実測図 3・土坑 S K626出土土器類実測図 (1/3)



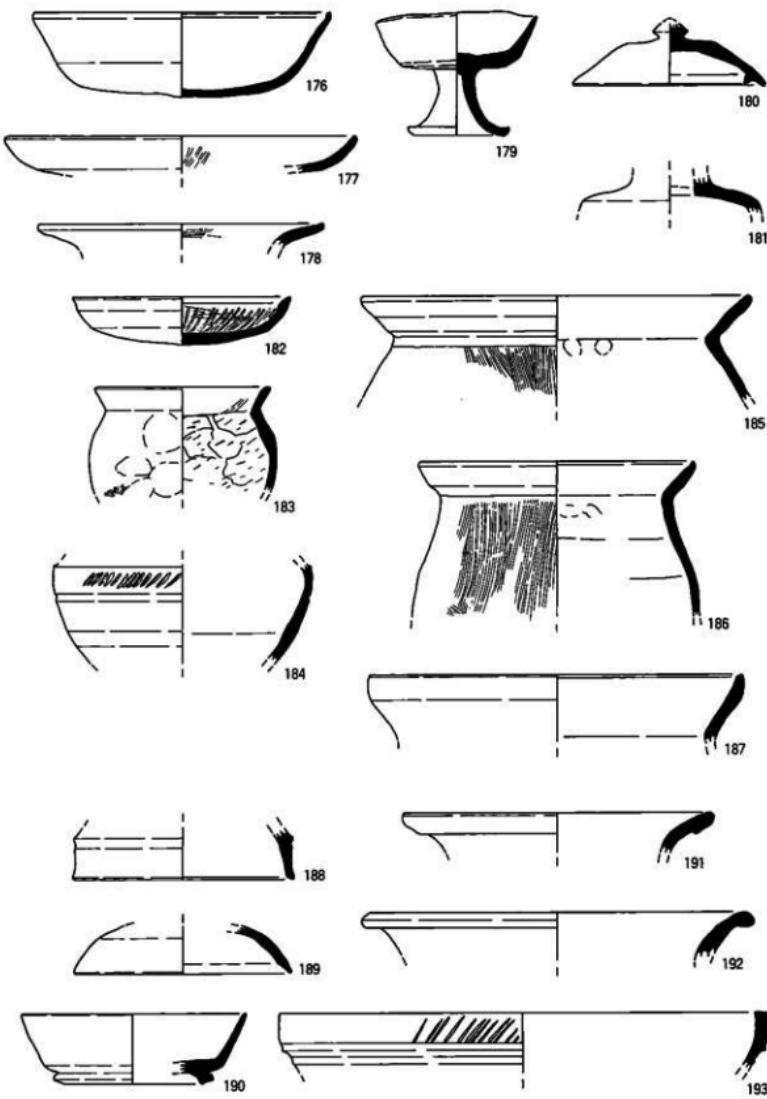
溝 S D 5・溝 S D 7 出土土器類実測図 (1/3)



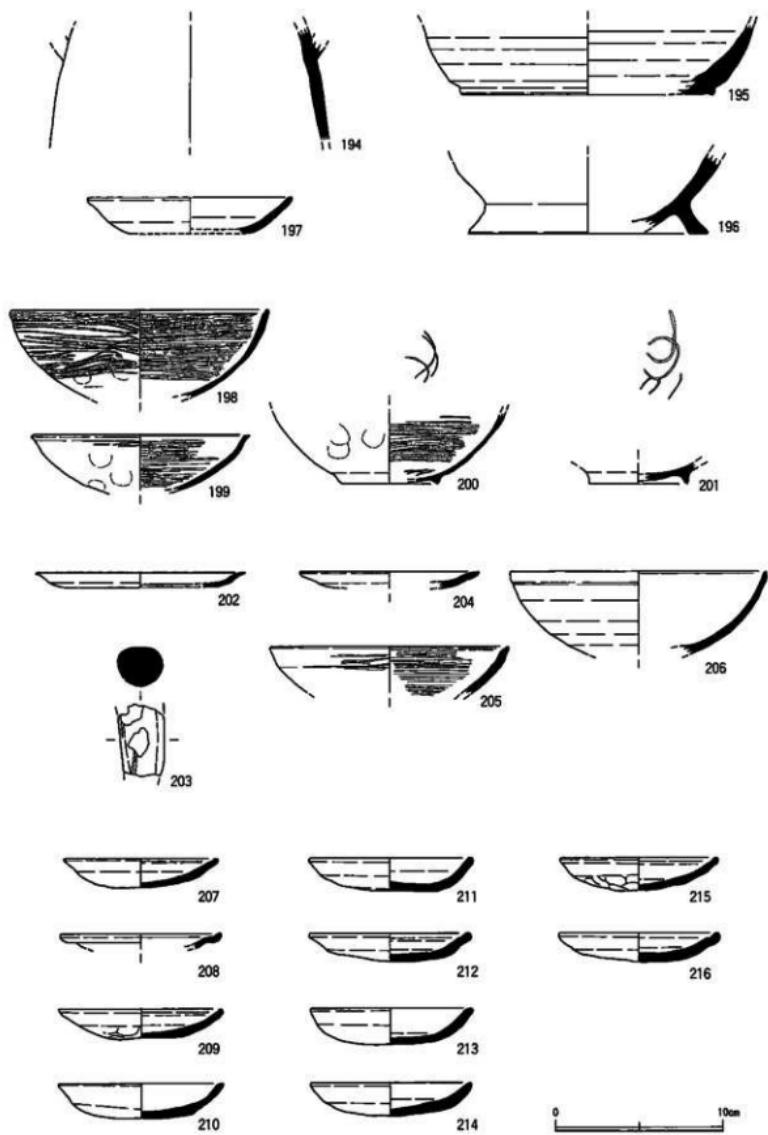
溝 S D231・溝 S D232出土土器類（1/3）実測図



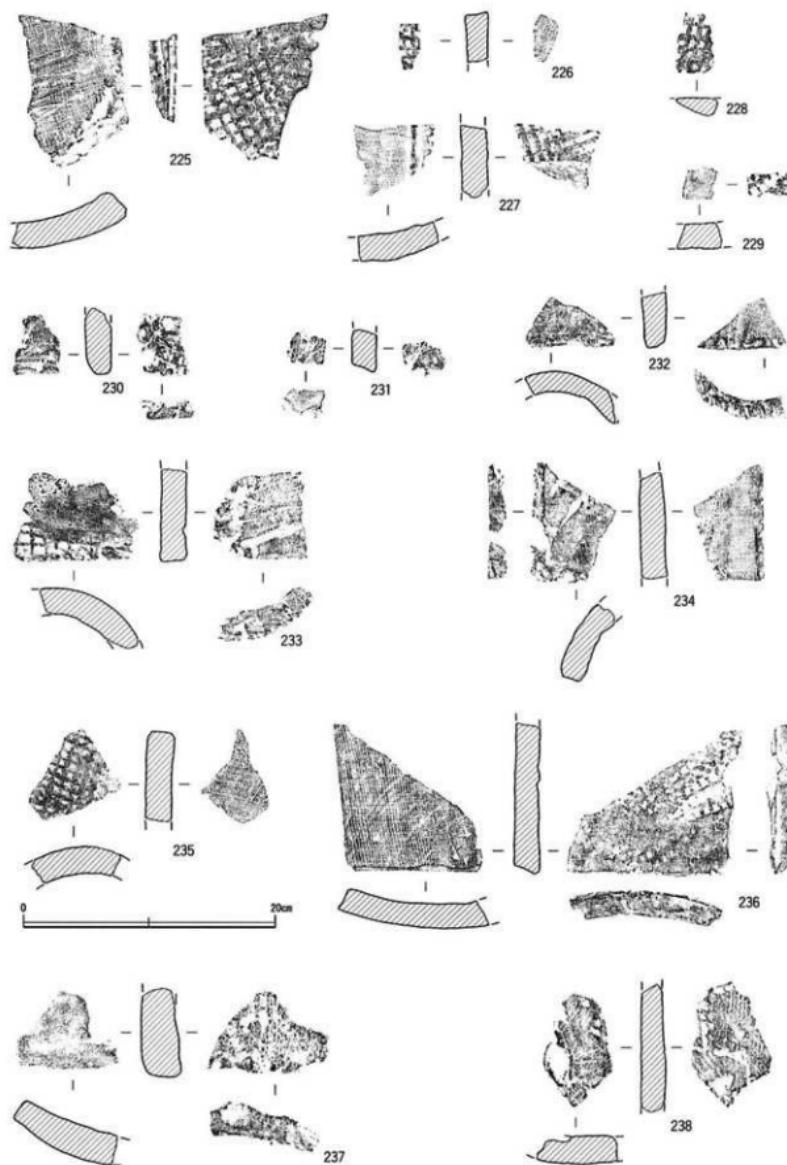
濟 S D251・濟 S D252出土土器類実測図 (1/3)



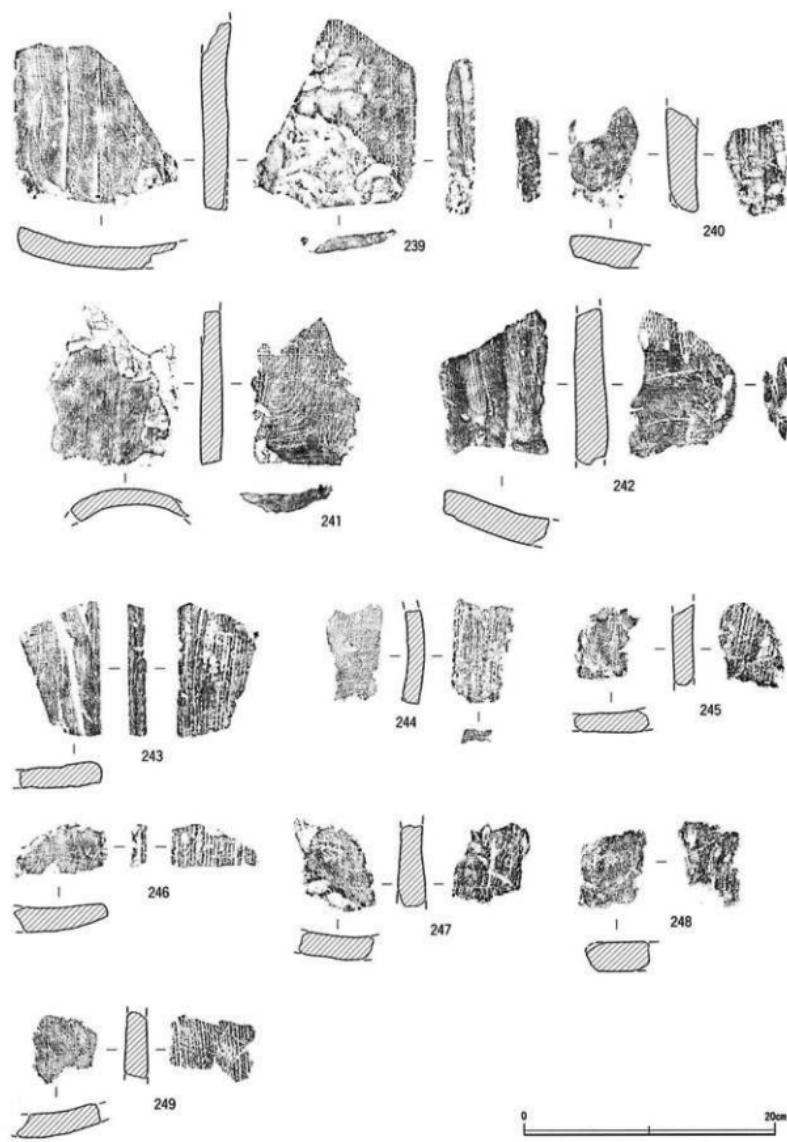
溝 S D541・溝 S D275出土土器類・その他の遺構出土須恵器（1/3）実測図



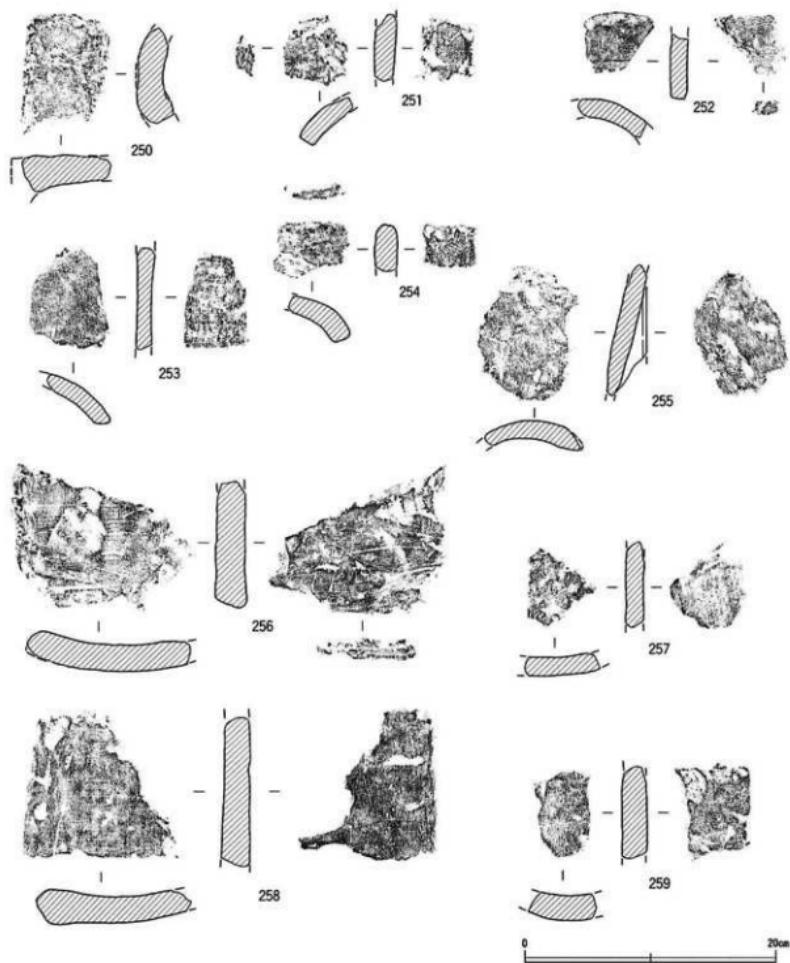
溝 S D 1・溝 S D 68・溝 S D 538・井戸 S E 10・井戸 S E 546・土器埋納遺構 S X 462出土土器類実測図 (1/3)



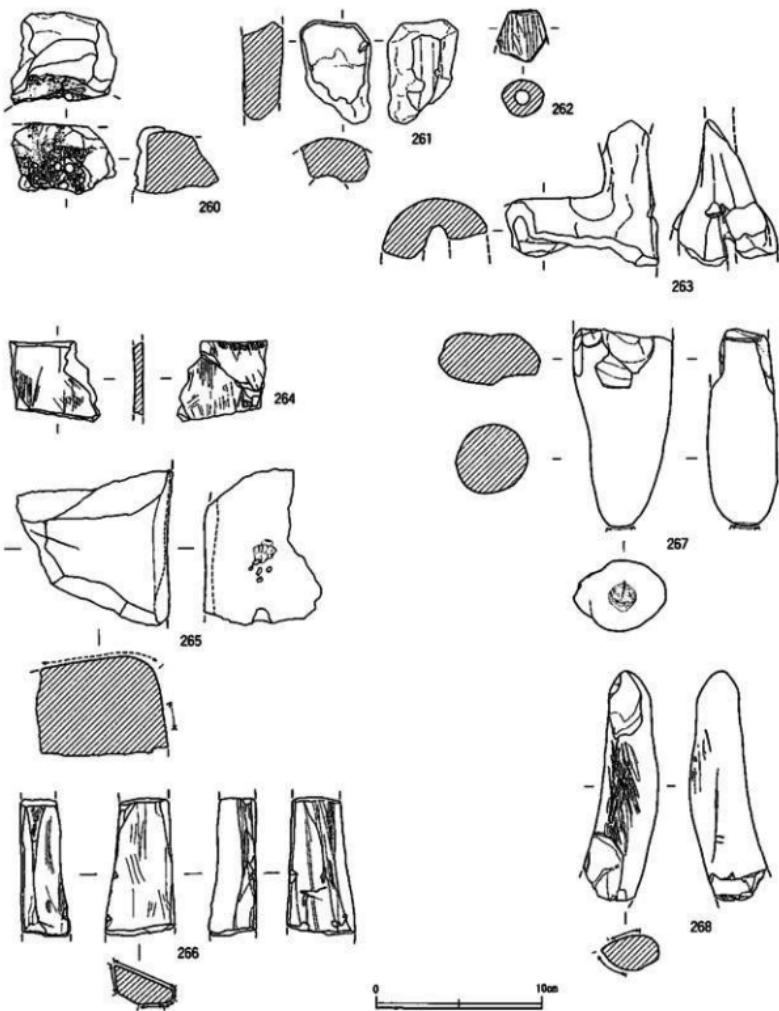
格子目タタキ成形の瓦実測図 (1/4)



縄目タキ成形の瓦実測図 (1/4)



その他調整による布目瓦実測図 (1/4)



土製品・石製品実測図 (1/3)



交差点全景（上が南）



方形周溝墓1・鳥糞跡 S X1000（上が南）



溝S D200・溝S D201（上が東）



溝S D264完掘状況（南より）



溝S D341土器出土状況（東より）



溝S D341完掘状況（北より）



溝 S D275・溝 S D341土器出土状況（南東より）



溝 S D275土器出土状況（南西より）



溝S D69・溝S D70断面（南より）



竪穴住跡S H465遺物出土状況（北より）



竪穴住居跡 S H465・土坑 S K629完掘状況（北東より）



竪穴住居跡 S H465・土坑 S K629・土坑 S K629完掘状況（東より）



溝SD4・溝SD5完掘状況（北より）



溝SD231完掘状況（北より）



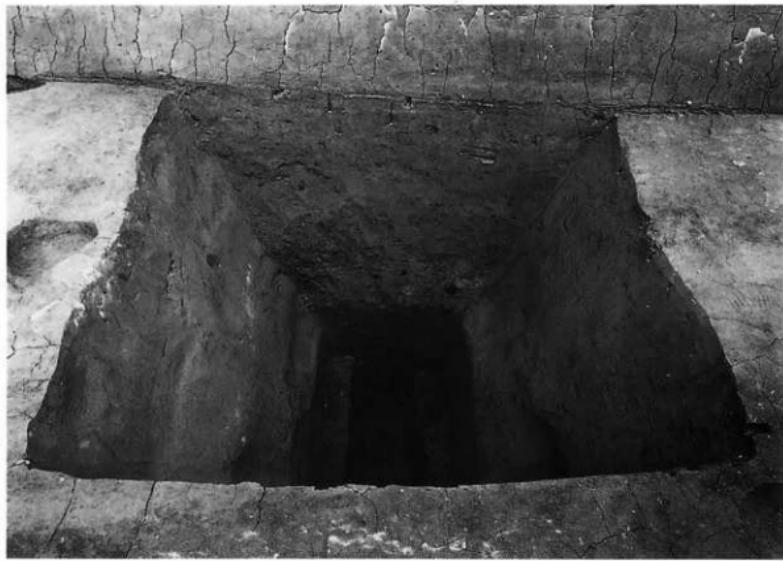
溝S D252遺物出土状況（東より）



溝S D252遺物出土状況（北より）



溝SD 1 完掘状況（北より）



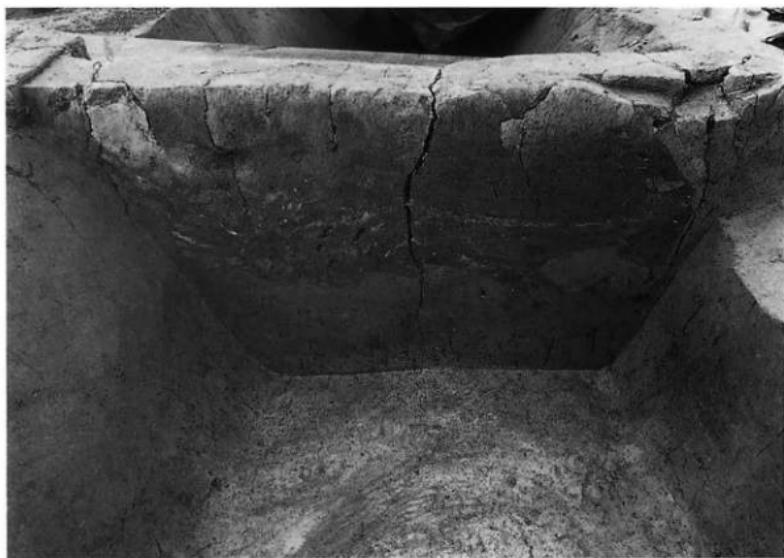
井戸SE 10 完掘状況（西より）



近世小溝群と道路遺構（南より）



道路遺構 S F 1・溝 S D68・溝 S D538完掘状況（北より）



溝S D68断面（南より）



溝S D538・溝S D535断面（南より）



建物跡 S B 1 検出状況（北東より）



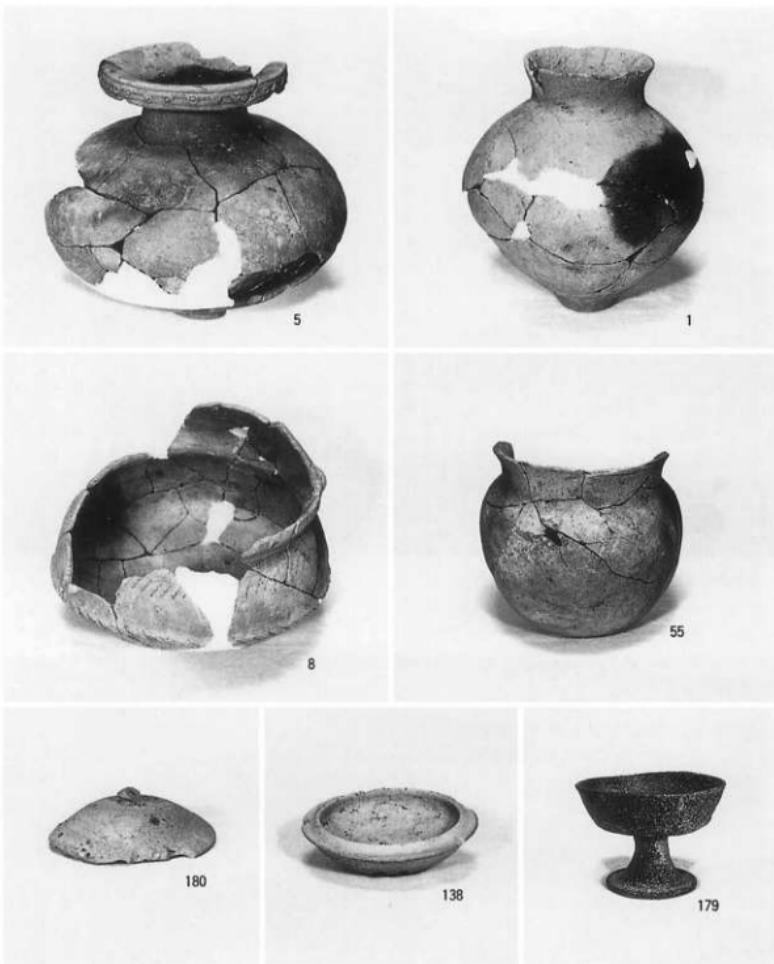
鳥煙跡 S X 1000第 1 面検出状況（北より）



鳥煙跡 S X 1000第2面検出状況（北西より）



鳥煙跡 S X 1000完掘状況（北西より）



弥生土器・飛鳥時代の土器類



90



83



99



98



102



101



95



115

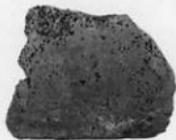
土坑 S K628出土土器類



236



225



233



242





239



241



260



270



271



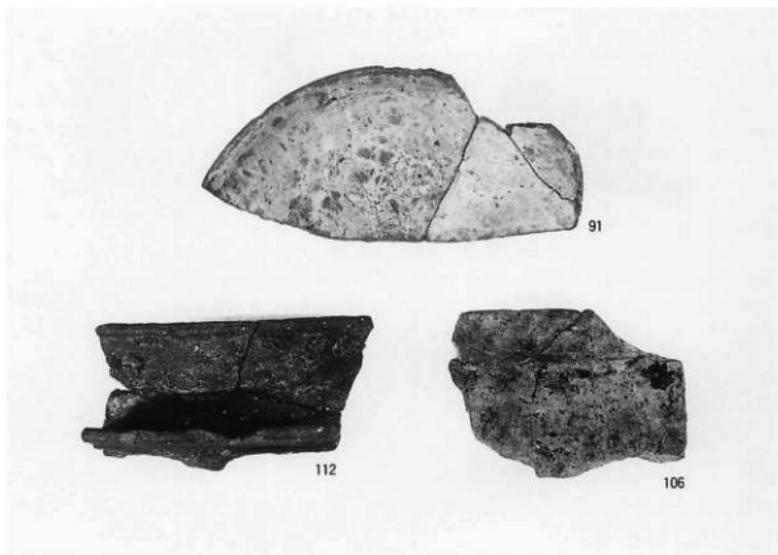
263



269



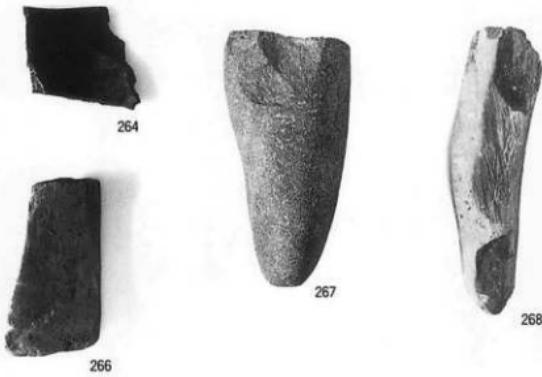
豎穴住居跡 S H465出土土器類



土坑 S K628出土土器類



土器埋納造構 S X462出土土師皿



石製品

報告書抄録

ふりがな	きょうとふくみやまちょうはやしでらあとだい2じはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	京都府久御山町林寺跡第2次発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	江谷 寛、桐山秀連、田中元浩						
編集機関	(財)古代学協会						
所在地	〒604-8131 京都府 京都市中京区三条高倉 TEL075-252-3000						
発行年月日	平成16年9月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町 村	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
はやしでらあと 林寺跡	きょうとふくぜぐ んくみやまちょう おおあざはやしあ ざたかぐろちない 京都府久世郡久御 山町大字林字高畠 地内		35° 3' 1"	136° 59' 8"	2003年 3月24日 ~2003年 6月30日	2680	道路建設に 伴う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
林寺跡	集落跡	弥生時代後期	方形周溝墓・溝	弥生土器壺・蓋・鉢・手 筋形土器			
		古墳時代前期	溝	土師器壺・壺			
		古墳時代後期	溝	須恵器杯・壺・壺			
	寺院跡?	飛鳥時代 / 奈良時代	堅穴住居跡・溝・ 土坑	須恵器杯・鉢・壺・壺・ 蓋・土師器杯・皿・壺・ 瓦・土馬			
		平安時代前期		須恵器壺・縁輪陶器碗・ 壺			
	集落跡	平安時代後期 / 駿倉時代	掘立柱建物跡・横 列・井戸・道路遺 構・溝・土器埋納 遺構	土師器皿・瓦器碗・白磁 碗			

京都府久御山町
林寺跡第2次発掘調査報告書

発行日 平成16年9月30日

編集行 財團法人 古代學協会

604-8131 京都市中京区三条高倉
振替01080-4-850
Tel.075-252-3000

THE SECOND EXCAVATION
AT THE HAYASHI TEMPLE SITE
IN KUMIYAMA, KYOTO PREFECTURE

THE PALEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, Inc

KYOTO MMIV